PSPo2iー英雄、その後

Angelica333

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＳＰｏ２ｉ－英雄、その後

【Ｎコード】
Ｎ２６８６Ｖ

【作者名】
Ａｎｇｅｌｉｃａ３３３

【あらすじ】
ＰＳＰｏ２ｉの二次創作となります。
グラールを救った英雄も、大きな事件がなければ一人のヒト。
一躍有名になったキャストの「マリー」も、増えすぎた任務にヘトヘトになりながらではあるけれど比較的平和な日々を過ごしていた…はず、だった。

ＬＷの日常（前書き）

まずはこのページを開いてくださりありがとうございますｍ（＿）ｍ

キャストが合理的でなかったりキャラの口調が安定しなかったりしますが読んでくれたらそれはとても嬉しいなって。

それでは、どうぞ！

ＬＷの日常

ーーーマイルーム前通路

女キャスト？「もう日付回っちゃったかぁ…何か今日は一段と疲れたなぁ…？

……って！え！？きゃぁぁぁぁぁ！」

シュインッ

女ヒューマン？「うっさい！今何時だと思って…ってマリーじゃん！一体どうしたの！？」

マリー「エ、エミリア…」

マリー「わ、私の部屋の入り口に…ゴキ○リが…」

エミリア「……は？」

これは、少し気弱な英雄と、彼女を取り巻くＬＷ社員達の平凡な日常の物語。

エミリア「…まぁ、その…とりあえずあたしの部屋、来る？」

マリー「喜んで！」

登場人物紹介（前書き）

出演予定の社員達を紹介します～

物語の設定資料のようなモノなので、必要ないと感じたら飛ばしてください。

新しいヒトが出てきたらこっそり追加するかもです。

登場人物紹介

マリー”M”ミスラ『やればできる子』
本作の主人公。キャストの女性。ハンター。
気弱な面が目立つ「英雄」。ここぞと言うときにはやれる子（本人談）。
イニシャルが全部Mなのは開発者の意向らしいが真ん中のMはミドルネームではなく製造番号。

エミリア・ミュラー『天才少女』
傭兵にして天才科学者。ブレイバーのヒューマン女性。
明るく活気がある少女。グラールに類を見ないほどの天才。
孤児であったがLWの実質的な責任者クラウチの養子となった。彼女曰く孤児時代は黒歴史。

クラウチ・ミュラー『魔弾の狙撃手』
LWの任務斡旋役。ビーストハンター。男性。
通称「おっさん」。家族大好きでエミリアに対して過保護。要するに親バカ。
いろいろあってウルスラと結婚。欠片騒動以後ナギサのことも気にかけるいいお世話役。

ナギサ『世間知らずの剣士』
剣の腕も考えも常識知らずなデューマンの女性ハンター。
常識知らずが褒めているのか貶しているのかわからないほどズレている剣士。
とはいえ戦力としては確かなもので、特にソードの扱いに長ける。

エイダ『ベストパートナー』

マリーのパートナーマシナリー。普段の仕事はメイド。
マリーとは対照的に強気。そのためメイドのくせに主人を主人と扱わないときも。
でも行動理念は「マリーのために」なのでどうあれどマリーに対する思いは一途。

イーサン・ウェーバー『世界を救った英雄』
ＳＥＥＤ事変を終結に導いた英雄。今はガーディアンズ総合調査部に所属のヒューマンハンター。
剣の腕は超一流。主にダブルセイバー・エンシェントクォーツを使う。
普通の人と同じく、泣きもすれば笑いもする。英雄扱いを嫌う。

カレン・エラ『星霊の代弁者』
現在はガーディアンズに復職中のイーサンの元教官。ニューマン。
ツインダガーとロッドを使い分けるハンター。
元幻視の巫女というとてつもない経歴を持つがやっぱり普通のヒト。

ヒューガ・ライト『イケメン社長』
イーサンの元パートナー。ガーディアンズ出身の現ＧＲＭ社代表取締役ブレイバー。
悪く言えば女好き、よく言えばレディファーストの紳士。
デューマンに組成変化するがちゃっかり適応してる出来るヒト。片手剣の腕は超１流。

ルミア・ウェーバー『新進気鋭』
イーサン・ウェーバーの実妹。意外と兄が大好きなフォース。ロッドを多用する。

プライベートではイーサンをお兄ちゃんと呼ぶ『鬼教官』。
胸と男っ気がないのが悩みらしい。

エミリア「まぁ上がっていきなよ」（前書き）

物語の始まりとなります。

…が、何分初心者なので文の構成等々アドバイスいただければな～、と思います。

それではどうぞ！

エミリア「まぁ上がっていきなよ」

ーーーエミリアのマイルーム

エミリア「虫1匹に絶叫とは…あんたってさ、
　　つくづくキャストっぽくないよねぇ？」
マリー「だ、だって奴だよ!?…あぁもう想像しただけで鳥肌がっ」
奴、とは言わずもがな。黒くてかさかさ高速移動するあの虫のことである。

エミリア「キャストなのに鳥肌立つんかい!?
　…そりゃ、あたしだっていきなり奴と遭遇したら、
　思わずラフォイエ撃ちかけるけど…」
マリー「…私接近戦だから剣に奴の体液が付くと思うともう…ね」

エミリア「あ、そりゃイヤだわ…ってグラスアサッシンとかを楽々
　切り倒しといてそれ気にする!?
　てかあの速さのあの小ささを切り殺すつもりだったんだね!?」
マリー「…あ、アックスの側面で押しつぶせば」

エミリア「っ…そんな落ち着いた発想ができるなら叫ばないでよ!
　　あたしが鳥肌立ってきたわ!」
マリー「いやぁはは…テンパっちゃって…」

そういいつつ、頭を掻く。
…苦手な物は苦手なのだ。

エミリア「全くもう…」
マリー「やー、お騒がせしちゃってゴメンね？」

エミリア「全くよ…もう、折角思い立っ…何でもないっ」
マリー「？…何か、考え事でもしてたの？」

エミリア「いやいや何でもないですよ～？」
マリー「怪しい…けど、まぁ言いたくないなら良いかぁ」

そう言って、私は辺りを見渡す。
…これは、ひどい。

エミリア「そそ、察して察して～♪」
マリー「むぅ…あ、そうだエミリア？」

エミリア「ん？改まっちゃってなんでしょー？」

エミリアの方を向き直り、勇気を出して、言う。

マリー「部屋の片づけ…手伝おうか？」
エミリア「っ…全く話題変わってなぁ～い！」

エミリアのその叫びは、夜の静かな空気を吹き飛ばすほど大きかった。

エイダ「マスターの帰りが遅い」

ーーーエミリアのマイルーム

ピンポーン、と。真夜中にいきなりインターフォンが鳴った。
さっき叫んだことで苦情でも来たか、いやいやそんなことは…
そんなことを考えていると、ドアが開いた。

???「失礼します。夜分遅くにすみませんがエミリア様、
　　私のマスターがお邪魔してませんか…ってうわ!」
エミリア「うわってなによ!そんなにあたしの部屋汚いの!?」

来訪者はどうしたことか…パートナーマシナリーだった。
しかも普通に悪態までつくという。

マリー「うん、これは私には擁護できないよエミリア…」
エミリア「思わぬところで二対一だ!?」

マリー「あははは…ね、エイダもこっち来れば～?まだこの辺は
　　エイダくらいなら座れるよ…ってあれ?どしたの?」

エイダと呼ばれたそのマシナリーはしかし、
玄関口で下を向いて震えている。

エイダ「…許可をくださいエミリア様」
マリー「…んん?あぁ、あっちゃー…」

エミリア「あ、あたし?」

エイダ「この部屋を掃除する許可を」

エミリア「えっ？」

エイダ「こんな部屋見て片付けずにいてどうします！？
　　メイドの名折れですよ！？」

エミリア「えぇと、その？メイド？…マリー、これって一体どーゆー状況？」

マリー「あー、その、…やらせといて良いんじゃないかな？」

これは、話すと長くなる。

私は説明を放棄して、立ち上がった。部屋を出るためだ。

…私のパートナーマシナリーの『エイダ』は、少々特殊で。

…マスターと呼ばれてはいるものの、私の言うことすら却下するという

本当に一人の「同居人」みたいなものなのだ。

エイダ「エミリア様」

エミリア「は、はいっ」

エイダ「許可を…頂けますか？」

エミリア「（目が怖い目が怖い目が怖い）お、お願いします！」

許可をもらうなり、詰め寄っていたエミリアからパッと離れるエイダ。

エイダ「ありがとうございます。それでは私は早速この部屋の清掃に
　　取りかからせていただきますので、恐縮ですが
　　マスターの部屋へとご移動願います。
　清掃が完了しましたらお声を掛けさせて頂きます」

マリー「おっけ～…！」

簡単に言ってから思い出す。
私がこの部屋に避難してきた理由を。

マリー「エイダ、えと、その、部屋の前にいたアレは…？」
エイダ「ご心配なく。完全に駆除しておきましたので。」

マリー「ありがとうエイダ大好き～！」

そう言って反射的にエイダに抱きつく。
…辛辣な言葉で返された。

エイダ「くっつかないでくださいマスター」

ーーーマリーのマイルーム

エミリア「ほぇー…」
マリー「ほぇー…ってどうしたのエミリア？口開いてるよ？」

エミリア「うぇっ！？…いや、改めて見るとマイルームって、
　　こんな広かったんだなぁって」
マリー「あぁ、これはそう見せる片付け術があってね…」

エミリア「すごいじゃんマリー！最初の頃の記憶しかなかったから

『あの殺風景な部屋かぁ』とか思ってたんだけど正直見直したわ！」

マリー「何かほめられてる気がしないけど…

まぁ私がエミリアのルームに行く方が増えたからねぇ」

エミリア「本当お父さんの粋な計らいにも感謝だよねぇ…

『お前ももう一人部屋で大丈夫だろう』とかさぁ！」

マリー「あ、おっさんって言わなくなったね。偉い偉い！」

エミリアの言う「お父さん」とは、彼女の本当の父親ではない。

つい最近までいがみ合っていた養父だ。

まぁ、色々あって今では二人はとても仲がいい。

エミリア「ばっ…」

マリー「あら茹でダコみたいに赤くなっちゃって」

エミリア「…そ、それは…！

だってもうお父さんだし？今までお世話になってきたなー、とか

ほんのちょっぴりだけど思ってきたり？それに…」

マリー「あ…あー、えと、もしもーし？

…だめだ、完全に自分の世界入っちゃってる…」

エイダ「マスターの帰りが遅い」（後書き）

えーと、主人公のキャラが行方不明ですねすいません＞＜；

安定するよう努力しますんで生温く見守ってやってください＞＜；

エミリア「徹夜は日常茶飯事でね？」

ーーーマリーのマイルーム

マリー「くぁぁ…はぅ。…エミリアったらまだ自分の世界から戻ってこない…

まぁそれだけ家族ができたことが嬉しいのかな？

…私にはエイダくらいしかいないからわからないけれど。

…まだまだ話し終わらないとは…元気だねぇ…」

眠気に立ち向かおうとしたのだけれど。

私の意識は夢の世界へ旅立っていった。

ーーーーーーーーーーーー

エミリア「それでね…」

エイダ「遅くなりまして申し訳ありません。清掃完了いたしました」

エミリア「おー、なんかありがとね？」

エイダ「いえ、私もしたいことをしただけですのでお構いなく」

エミリア「相変わらずお固いねぇエイダは…」

エイダ「そうでしょうか？」

エミリア「私のマシナリーなんて勝手に私のお菓子食べ出すんだよ！？」

エイダ「…それは…ちょっとどうかと…」

エミリア「でしょ～？まぁ良い奴なんだけどねぇ…」
エイダ「そう言えば先ほどの清掃時にマシナリーを見かけませんでしたが」

そう言いつつちゃっかりエミリア様の対面に座ってみる。
…イスに座ったら足が地面に着かず、ぶらぶらさせておく。

エミリア「あぁ、あいつ今定期メンテなのよ。だからＧＲＭ本社にいるの」
エイダ「成る程、そういうことでしたか。」

エミリア「うん、まぁいないならいないで寂しいもんだねぇ…」
エイダ「でしたら私どもの所へ来ていただければと思いますが。
　　マスターは基本、任務時以外は暇人に分類されると思われますので。」

エミリア「そして相変わらず容赦ないねエイダ…」
エイダ「事実ですので」

エミリア「そんなこといってマリー怒んないの？」
エイダ「怒るも何も…マスターですから…」

はぁ、とため息を一つ。私のマスターは気が強い方ではない。
…いや、気が弱い、と言っても過言ではない。

エミリア「なるほど…なぜか納得できる」
エイダ「私としてはもう少し自信を持っていただきたいのですが…
　　メイドに言い負ける主など聞いたことがありませんから」

昔はこうではなかったのだけれど、と。
聞かれないように口の中だけで呟く。

エミリア「違いないね…ってこの話題にも全く混ざってこないし？」
エイダ「あぁ、それなら」

エミリア「？」
エイダ「マスターはあの状態でもうすでに夢の中ですから」

エミリア「…起きてると思ってたよ今の今まで！？」
エイダ「そうおっしゃられましても…無理はないかと」

そう言い、備え付けられている時計に目をやる。

エミリア「おーいマリー…ん？無理がないってどういう？」
エイダ「…エミリア様、ただいまの時刻は０５：１４です」

エミリア「…２４時制で？」
エイダ「もちろんです」

エミリア「…あたしぜんっぜん眠くないんだけど…」
エイダ「あれだけしゃべり通しておられれば、無理もないかと」

エミリア「エイダって結構棘あるよね…」
エイダ「このマスターのサポートをしなければなりませんし」

エミリア「ちぇ。まぁいっかぁ、あたしそろそろ帰るわぁ」
エイダ「資料は分類ごとにファイリングしてありますので」

エミリア「やー、何から何までありがとね？」
エイダ「いえ、お気になさらず」

エミリア「んじゃまたね～、マリーにもよろしく言っといて！」
エイダ「承りました。お気をつけて」

そう言い、エミリア様を出口まで見送る。
…とはいえ隣の部屋なのだけれど。

◆◇◆◇◆◇

エイダ「…全く、世話のかかるマスターですね。
冷房入れっぱなしで毛布もなしにしかも椅子で寝るとか。
毛布…よりブランケットの方が良さそうですね」

ゴソゴソ、と。
ドレッシングルームの奥からブランケットを持ってくる。

マリー「…ぅん…」
エイダ「心配する身にもなってくださいよ。本当にもう…」

テーブルクロスをかける要領でマスター…『マリー』に被せる。

マリー「…すぅ…」
エイダ「…ふふっ、だらしない顔しちゃってまぁ」

くすっ、と小さく笑う。

心なしか、マスターも小さくほほえんだように見えた。

マリー「…ぅう…ん…」

エイダ「ま、こんなマスターじゃ私がいなければどうなることやら。

…明日も頑張れそうです。ありがとうございます、マスター」

マリー「…ぅぅん、エイダぁ…」

エイダ「おやすみなさい、良い夢を」

エミリア「徹夜は日常茶飯事でね？」（後書き）

はいダラダラですねすいませ（殴

進行は遅いかもですが基本日常なので許してください＜＞；

マリー「朝は食欲ない…」（前書き）

８／６追記※矛盾点をなくしたりちょっとだけ内容いじりました（汗

マリー「朝は食欲ない…」

ーーーマリーのマイルーム

???「マ……ー…起……さい。マスター？」

心地良いまどろみの中から私を引き戻す声がする。

マリー「…んー？エイダ…？…あ、おはよう…ふあぁっ」

そう言って大きく伸びをする。

エイダ「おはようございますマスター。
　早速ですが朝食はシリアルとトースト、
どちらになさいますか？」

マリー「ん～、お腹すいてないからパス…っていうのは…」

エイダ「いけません。朝食は一日のエネルギーの源だといいますし、
　きちんとお摂りになってください」

マリー「キャストだし大丈夫だよ～…」

エイダ「いいえいけません。いくらキャストとはいえ、
　マスターのエネルギー源はヒトと同じ食事でしょう？」

マリー「…うー…わかったよぅじゃあシリアルで…」

エイダ「かしこまりました。それでは少々お待ちください」

マリー「はーい…んんっ！っとととと…危ない危ない転ぶ転ぶ…
　朝に弱いとか…自分で言うのもなんだけど、

私って本当機械っぽくないなぁ…『限りなく人に近いキャスト』ねぇ…
酔狂な博士に作られちゃったもんだ…」

そんなことを一人ごちながら、エイダが朝食を運んできてくれるのを待つ。
…そこでようやく、自分が椅子で寝ていたことに気付く。
このブランケットは…エイダがやってくれたのかな。

エイダ「マスター、準備が整いました。
シリアルはフルーツ含有の物でよろしかったでしょうか？」
マリー「ん、それでいいよありがとー」

ありがとー、に二つの意味を乗せたのは内緒だ。

エイダ「いえ、それでは私はこれで。お食事がすみましたらお呼びください」
マリー「んー…そうだ、エイダも一緒に食べない？」

エイダ「いえ、私は有り合わせですませますので。
そのお気持ちだけいただいておきます」
マリー「シリアルでできる有り合わせって一体…まぁいっか。
じゃぁいただきますっ」

エイダ「どうぞごゆっくり」

エイダはそう言うと、何気なくブランケットを持って下がっていった。

マリー「毎回一人で朝ご飯は寂しいから一緒に食べたいって思ったのになぁ…

…押しが弱いのかなぁ？でもなぁ…」

マリー「押しを強くとか無理無理。それなら性格変えなきゃね～…

それこそ無理、か…」

マリー「…くそう美味しいなこれ…明日もこれにしよう…

明日こそエイダと食べてやるんだから…」

マリー「命令すればいいんだろうけど…嫌々一緒にってのは嫌なんだよなぁ…

けど一緒に食べたいし…ん～……あ、食べ終わっちゃった」

その台詞を待っていたかのごとく、どこからかエイダが出てきた。

エイダ「では食器お下げいたしますね」

マリー「ぅうわぁ！？……エイダ、もしかして聞いてた？」

エイダ「？…何をでしょう？」

マリー「いやいや聞いてないならいいんだけど…」

聞かれてたらそれはそれで恥ずかしいし、というのは言葉にならない。

エイダ「…？まぁ、そうおっしゃるのなら気にはしませんが」

マリー「そうそう構わないで大丈夫だよ～」

エイダ「…いつにもまして変ですねマスター。熱でも？」

マリー「…それはさすがにないかなぁ。仮にもキャストだし」

エイダ「まぁそうですよね。お召し物はドレッシングルームに
入ってすぐにさげてありますので」ぺこっ

まぁそうですよねって…また今日は一段とドライだなぁエイダ。

マリー「道のりは長そうだなぁ…
今日はアリス・リーパーか…任務入ってたっけ?」

手早くパーツを装着して、予定を確認する。

マリー「ビジフォンビジフォン…ん?通信ログ?…あっちゃー!…」

…予定表を見るまでもなく、呼び出しの通信だ。

マリー「チェルシーさんとクラウチさんから2回ずつ…
エイダ、もうヤバめだから行ってきます!詳細はメールするね!」

奥からパタパタと足音をさせてエイダが出てくる。

エイダ「行ってらっしゃいませマスター。お気をつけて」

マリー「うん、ありがと!行ってきます!」

そう言って飛び出した私の頭は、最短ルートの検索に忙しくなっていた。

◇◆◇◆◇◆◇

エイダ「本当に、気をつけて…もう、朝ご飯中に考えごとしてるからですよ…
…明日からは時間の管理も兼ねて一緒に食事をとることを許してもらいましょうか。きっと良いって言ってくれるでしょうし」

私は誰ともなく呟き、小さく笑って食器の片づけに戻った。

マリー「朝は食欲ない…」（後書き）

やっっっと部屋からでれました…（汗

次こそは任務中のやりとりを書きたいと思ってます＜＞；

クラウチ「じゃ、任務内容を説明する」

ーーーリトルウィング本部

結局、私がクラウチさんの所についたのは15分遅刻してだった。

クラウチ「やっと全員揃ったようだしな？」

マリー「す、すいません…」

そう言って肩をすぼめると、クラウチさんは豪快に笑った。

クラウチ「何、責めてるわけじゃねぇから安心しろ。
うちのバカ娘も遅刻組だからな」

エミリア「バカって何よー！遅刻はしたけど！」

そう、このクラウチさんこそがエミリアの『お父さん』。
…ちょっと前まではこんな人になるなんて思えなかったけど。
家族思いの、いい人だ。

クラウチ「うっせ。遅刻する前に連絡入れたかどうかの違いだ」

マリー「…え？私連絡なんて入れる暇なかったんですが…？」

クラウチ「あぁ、それは…エイダ、だったか？
お前さんのマシナリーがな」

マリー「…エイダありがとぉ…！」

帰ってきたらちゃんとお礼を言おう。
…うん。忘れてなかったら。

クラウチ「ほれほれ無駄話はここまでだ。
じゃあ任務概要の説明に入るぞ」

空気が変わる。
張りつめる空気に、自然と背筋が伸びる。

クラウチ「任務地はニューデイズ・オウトク山周辺地域だ。
内容は…えー、イベントの警護だな。質問は？」
マリー「は、はい」

おずおず、とだが、手を挙げる。

クラウチ「お、何だマリーからたぁ珍しいな。なんだ？」
マリー「えと、メンバーって私達二人だけでしょうか…？」

クラウチ「あぁ、そこか。いや、現地で地理に詳しい教団警衛士と
別枠でガーディアンズが一人ずつ合流して計４人のはずだ」
マリー「そうでしたか…あ、ありがとうございます」

警護に二人は厳しいから、ひとまず安心。

クラウチ「他に質問は？…無いようだな、じゃ今からニューデイズに向かってくれ。任務開始は現地時間で１７：００だ。
それまでに警衛士とガーディアンズと顔合わせとけ」
エミリア「おっけ～♪」

マリー「了解、です」

ーーーリトルウィング、ロビー

マリー「ふぅ…」
エミリア「どったのマリー？ため息なんてついちゃって」

マリー「いや、ブリーフィングの雰囲気って苦手で…」
エミリア「ああ、あの息の詰まる感じね…あたしも苦手」

と、静かに愚痴会。

マリー「…それに１７：００っていうと警護は夜中心なんだよね？
　…イベントって何やるのかなぁ…」
エミリア「ん～、この時期だから多分…あぁ、あれかな」

マリー「え？エミリア知ってるの？」
エミリア「あぁ、マリーは知んないのか…現地についてからのお楽しみ～♪」

マリー「むぅ…エミリアの意地悪…」
エミリア「ほらほら気になるならさっさと行こー！」

そう言うとエミリアは私の後ろに回り込んで私を押し始めた。

マリー「あ、ちょ、押さないで押さないで！
　わかったわかった自分で歩けるから！」

クラウチ「じゃ、任務内容を説明する」（後書き）

任務説明のこと忘れてました…

次こそは任務に入りたいと（殴

すいません調子乗りました次の次くらいになると思います＜＞；

マリー「何だか凄い人だかり…」

ーーーニューデイズ、イベント開催地近辺

マリー「エミリア、まさかとは思うけど…」
エミリア「うん、地図によるとあの人だかりの場所が警備詰所だね」

マリー「なんで詰所にあんなに人がいるのよぅ…」
エミリア「さぁ…警備にイケメンがいるとか噂になったんじゃない？」

ざっと５００人程度はいるだろうか。
…数えるのもおっくうになる人の固まりが、そこにはあった。

マリー「あそこに突撃とかホントやだなぁ…裏口とかない、かな？」
エミリア「ん～…回ってみる？あたしも突撃はしたくないし…」

マリー「回ろう！え～っと…東の方から北に回ろう！」
エミリア「はいはい…って、え！？速っ！？」

脱兎の如く。
私はかけだしていた。

マリー「早く行こう！ほらほらこっちだよ！」
エミリア「全くなんで今日はこんな…そっか。あんた人混み苦手だっけ？」

マリー「それもある…けど。このパーツで人混みなんて確実に誰か

刺すし…」
エミリア「アリス・リーパー…刺々しいね…警護が人傷つけちゃ
元も子もないから仕方ないか。行こ！」

ーーー警備詰め所裏

エミリア「な、なんとか抜けられた、ね…」
マリー「少ないっていっても結構人いたね…」

エミリア「だって今日は…ん、まだ内緒」
マリー「まだ教えてくれないのかぁ…本当に何があるの？」

エミリア「詰所で座れたら話す…今元気ない…」
マリー「わかった…それにしても、もしかして裏口、無い？」

扉はおろか、窓すら見あたらないとは…
…どうしよう？

マリー「あ～っと…表に回る元気、ないよねぇ…ある？」
エミリア「あたしパス。ならここで座ってる方がマシ…」

マリー「地べたは遠慮したいかなぁ…えーっと、…エミリア？」
エミリア「何、どうしたの？」

マリー「今からすること、目つぶってくれない？」

そう言うと、私は愛刀を具現化させて、鞘から抜きさった。

エミリア「何を…あぁ…あたしは何も見てませんよ～？
　　…え～と…マリー？」
マリー「…何でしょう？」

エミリア「壁一枚以上に切り過ぎないでね？」
マリー「たぶん大丈夫！…これ、斬れすぎるからわかんないけど…」

ヒュンヒュン、と軽く空を斬る。
…うん。いい感じ。

エミリア「それにしても実刀好きだよねぇ…それ名前なんだっけ？」
マリー「これ？これは剣影っていってね…やっと解放できたばかりの
　　今一番のお気に入りなんだぁ！」

エミリア「目を輝かせんで良いから。…はい、んじゃ頼んだ！」

エミリアが壁際から退いて、私の後ろ2メートル程度に陣取る。
Ｇｏサインは出た。

マリー「斬りすぎたらごめんなさい……ハッ！」

剣影一閃。
少しのタイムラグの後に、厚さ3センチほどのコンクリートの壁がこっちに向かって倒れてくる。
…後に残ったのは１．５ｍ四方程の穴。

マリー「…ふぅ、終わったよ！」
エミリア「さっすがマリー！さぁて入りますか～」

穴をくぐって私たちは中に入る。

…これって侵入？

マリー「お邪魔しま～す…」
エミリア「ここは…裏通路かな？」

マリー「そんな感じするね」
エミリア「さてさて証拠隠滅っと…」

エミリアが一旦外に出て壁を持ち上げようとして…みる。

マリー「…エミリアじゃ持ち上がらなくない？」
エミリア「うん…これ…はム、リ…だねっ」

マリー「…はいはいやりますよぅ…ううう、手が白くなるぅ…
なか、なか、お、も、い…よいしょっ！」

一旦壁を中に入れて。
内側から壁をもう一度はめ直す。

エミリア「お～！さっすがマリー！」
マリー「…この隙間どうしようね？」

少しだけ。
剣影一本分だけ、隙間が空いてしまった。

エミリア「ん～…放置で！またあとで考えよう！とりあえず今は座りたい！」
マリー「了解ですよっと…こっちかな？明かり付いてるし」

…表と思われる方向に回り込むと。

…メディアでよく見る写真の人がそこにいた。

マリー「えぇと、質問していい？」
エミリア「なに？」

マリー「あそこに居るの、って…」
エミリア「…イーサン・ウェーバー？」

英雄が、そこにいた。

マリー「だよねぇ…ガーディアンズの人ってもしかして…」
エミリア「うん、それ以外はみんな警衛士だね…」

マリー「それでこの人だかり…」
エミリア「あのー、マリーさん？」

いきなり敬語で呼ばれて素っ頓狂な声を上げてしまう。

マリー「はいっ？」
エミリア「…あんたも一応彼レベルの英雄なんだからね？」

一瞬の間。

マリー「…忘れてましたぁっ…！」

イーサン「英雄は辛いぜ」

ーーー警備詰所

「おいおいここは警備詰所だぜ？来ても面白くないだろうって」
「何言ってんの！英雄を生でみられるなんて中々無いよ！？」
「英雄って…」
「イーサンともう一人！ほらあの民間軍事会社の…」
「あぁインヘルト社の時の！」

そんな会話がちらほら聞こえてくる。
…なにも聞こえないよー。
耳を塞いでいたら、エミリアに肩をつつかれた。

エミリア（…マリー？）
マリー（うぅ～…こ、このまま裏通路に居るのって…）

エミリア（却下。椅子無いじゃん。…ほらあっちみて？）
マリー（あっちって…給湯室、だね。…あ、椅子がある！）

入り口を右に見て真っ直ぐ進んだ一番奥。
入り口からは遠い位置にある。…あそこも、ここも。

エミリア（しーっ！静かに！目立ったら休めなくなるよ！）
マリー（ご、ごめんなさい…でも向こう行くのってこの部屋突っ切るしか…）

エミリア（覚悟決めて！潜入任務と同じでしょ！）

マリー（…ていうことは物陰に隠れながら、だね？）

エミリア（そゆこと～♪この場合あの机とかね？…行きますか！）

密かにもう一つ、任務が始まった。

…がやがやと入り口の方が賑やかで。

見つかりはしないかと冷や汗をかく。

マリー（うぅ…緊張するぅ…）

その時、入り口に動きがあった。

イーサン「ふぃー、ゴメンみんな、疲れたから休んできて良いか？」

「「「ダメー！」」」

イーサン「な、何だよ…休憩くらいゆっくりとらせてくれよぉ！」

マリー（！！今だ！）

今なら皆注目は彼一人に向けてる！

少しだけ、移動のペースをあげる。

イーサン「わかったわかった、5分で戻るからさ！な！？」

「「絶対だよ！」」「「待ってるから～！」」

マリー（あと一歩！）

イーサン「オッケーオッケー！じゃ5分後にな！」

危ない！

危険を感じて、私は頭からスライディングを決める…決まった。

マリー「な、何とかたどり着いたぁ…飲み物飲み物…あ、アイスコーヒー！」

直後。

エミリアも頭から滑り込んできた。

エミリア「潜入なんて嫌いだー！」

マリー「あ、エミリアお疲れさま。コーヒーいる？」

ご自由にどうぞ、と書いてある紙コップに注いで、エミリアに差し出す。

エミリア「飲む！……っはー。ありがと…」

一息ついていると、私たちより結構大きな人影が現れた。

イーサン「ふぃー、疲れた疲れた…あああ！マリーにエミリアじゃねえか！」

英雄、イーサン・ウェーバーだった。

マリー「ウ、ウェーバーさん…こんばんは…」

エミリア「お邪魔してるよ～」

エミリアは物怖じしないなぁ…

イーサン「来るのが遅いと思ってたらもう来てたなんて…

一体傭兵ってどんな訓練してんだ？」

マリー「あはは…」

エミリア「ヒミツ～☆」

笑って…ごまかせた、かな？

イーサン「ま、いいや…あと１０分で警備開始だけど二人とも準備は良いか？」

…誤魔化せたみたい。

マリー「１０分休めれば上等です…」

エミリア「あたしはもうちょっとグダグダしたいけど…任務だしね！」

イーサン「相変わらずだな…まぁいいや、警備ルートの確認しようぜ？

ブリーフィングで聞いてるかい？」

確か現地で、と言う話だったはずだ。

頭を仕事モードに切り替える。

マリー「いえ、何も」

イーサン「じゃ、説明するぜ。俺と警衛士一人が南を回って西に抜けるから、

このルートだと…１５分後に西端に着くと思うから連絡する。

で、連絡を受けたら二人も南経由で西端に来てくれ。

入れ替わりに北経由で俺たちがここに戻る。」

んん？

会場は円形なのかな？

マリー「えっと…それは2班に分かれて、
　　円を描くようにぐるぐる回るということですか？」
イーサン「さすがマリー。飲み込みが早くて助かるぜ。まぁそういうことだ」

ご名答、らしい…
まあ警護だし討伐ほど気を張りつめなくて良いか、とほっとする。

エミリア「はいはいしつもーん！」
イーサン「なんだエミリア？」

エミリア「その円の中心部はどうするの？」
イーサン「あぁ、そこは別のチームが対応するから安心してくれ。
　　むこうも俺らと対して変わらない技量の奴ばかりだから
　　そこは心配しなくて良いさ…やっべ！」

…英雄ランク総動員とは…
ますます今日って何の日なんだろう？

マリー「どうしたんですか？」
イーサン「5分たっちった！ちょっと表でてくるけど…くるか？」

遠慮します、とエミリアときれいにハモる。
こういう時こそ、息ぴったり。

イーサン「だよなぁ…ま、お疲れのようだし俺らから連絡があるまでは、
　　そこで待機してて構わないぜ！」

マリー「あ、ありがとうございます…」

エミリア「気が利くねぇ！」

イーサン「だろ？へへっ、んじゃいってきます！
あ、そうだ武器はスタンモードにしておいてな！」

そう言い残して、彼は飛び出していった。

マリー「…忙しそうだったねぇ」

エミリア「ま、あたしらはゆっくりしてましょ！」

マリー「そうだ、そろそろ今日何があるのか教えてよ！」

エミリア「ん、そろそろ聞こえてくるはず…」

ヒュルルルル…ドーン！

不意をつかれた私は、癖で戦闘態勢をとる。

マリー「うわっ！何！？爆撃！？」

そう言うとエミリアにヒドく笑われた。

…なんか悔しい。

エミリア「いやいや…今日は年に１度の花火大会だよ！」

ーーー２０分後

イーサン『二人とも聞こえてるかぁ？』

エミリア「バッチリ！」

イーサン『はは、そりゃ良かった。そろそろ動き出してくれ！じゃ！』

エミリア「えっちょっ…切るのはやっ！」

マリー「まぁまぁ…じゃ、行こうか」

警護任務が、始まった。

ーーー南端

マリー「…んー、特に異常なさそうだね？」

エミリア「そうだねぇ…あ、焼きそば売ってる」

…実は小腹の空き具合が気になってて。

なんて誘惑…！

マリー「…お腹すいたよね？買っちゃお！」

エミリア「…経費で？」

マリー「落ちないと思うなぁ…」

ーーー西端

エミリア「んー、やっぱり屋台の焼きそばは美味しく感じるなぁ！」

マリー「私なんてお祭り自体初めてで…こんなに楽しそうな人々…

こっちも楽しくなってくるね！」

エミリア「ふふーん、今度パルムでもお祭りあるから一緒にいこ？」
マリー「もちろん！」

エミリア「そこまで嬉しがってくれるとこっちも嬉しいよ」

そう言って、二人で笑った。
お祭りって、楽しいものなんだ！

ーーー北端

ドーン！

マリー「うわ、びっくりしたぁ…今の綺麗だったねぇ！」
エミリア「一瞬で消えちゃうところがまたいいよねぇ」

ドーン！…えてぇ！」

マリー「…ん？」

何か別種の…この声は聞き覚えがある。

若い女性「ひったくり！誰か捕まえてぇ！」

救難信号だ！

エミリア「マリー！」
マリー「わかってる！…対象補足。ルート推測…先回りするね！
エミリアは女性の保護を！」

エミリア「わかった！」

どうやらひったくりらしい。犯人は壮年の男性。
…速さで負けるはずがない！

壮年男性「邪魔だどけぇ！」
マリー（あーあ、せっかく楽しかったのになぁ…けど…）

マリー「…絶っっっ対に逃がさない…」

そう言い残して、私は駆けだした。

エミリア「あ…あーあー、これは…ご愁傷様です…」

人の合間をすり抜け、潜り、時に跳ぶ。
最短ルートで対象を捕捉した。

マリー（楽しく笑ってる人の笑顔をそんな風に奪うなんて！）

男性の進行経路上にゆらり、と立つ。

壮年男性「どきやがれぇ！」
マリー「…けないで」

壮年男性「テメっどけぇ！」

男性が私を突き飛ばそうと、伸ばした手を。

マリー「ヒトの笑顔奪っておいて…ふざけないで！」

壮年男性「はっ！？」

受け流して、その勢いで。
一本背負いで放り投げた。

マリー「ハァァァァ！！」
壮年男性「がはぁっ！！」

地面にうちつけられた男性ののどに具現化した剣影を当てる。
勿論、抜き身で。

マリー「あなた自分が何したかわかってるの！？」
贈年男性「かはっ…あぁ？てめぇに関係あんのかよ！」

マリー「ないよ！でもそのポーチはあなたの物じゃない！」
壮年男性「細けえことをゴタゴタうるっせぇんだよ！なんなんだよてめぇ！」

マリー「ここの警備を任された傭兵だよ！！
…本当は私の出番なんか無かった方が良かったのに！！」
壮年男性「ざっけんじゃねぇよ！この…くそが…離せやぁ！」

暴れる男性の頭を、鞘でうちつける。
脳震盪さえ起こしてあげない。

マリー「あなたじゃ私は引きはがせない…私、今かなり怒ってますから。
下手な抵抗すると…首と体が永遠にバイバイする事になりますよ？」

壮年男性「！！…っち…わぁったよ…」

スタンモードで殺せるわけないんだけど。
…脅しは利くならしておくに限る。

マリー「じゃ、連行させてもらいます。念のため縛るから」
壮年男性「っせぇな！好きにしやがれ傭兵風情が！」

男性をきつく縛り上げていると、エミリアの声が聞こえた。

エミリア「焦らなくて大丈夫ですよ！彼女なら必ず捕まえますから！」
若い女性「はぁっ、はぁっ、あ、ありがとうございます…」

エミリア「落ち着けましたか？ではこちらへ。
お手数ですが荷物の確認をしてもらいます」
若い女性「何から何までどうも…あなた、お名前は？」

エミリア「名乗るほどの者では。それはあそこで犯人を締め上げてる彼女に言ってあげてください」
若い女性「あぁ、ありがとうございます…」

マリー「本部へ、こちらマリー班。ひったくり犯を連行していきます」
教団警衛士『本部、了解』

マリー「…ほら歩いてください行きますよ」
壮年男性「けっ」

エミリア「マリー！」

マリー「エミリア！その方が？」

エミリア「ん、そう。それと、ポーチは？」
マリー「それはほら、ここに…中身、無事だと良いんだけど」

エミリア「中身はみれないしねぇ…あの、こちらに来てもらっても？」
若い女性「はい。…あぁ、あなたが…なんとお礼を申し上げたらいいか…」

女性はまだ若いのに良い着物を着ていた。
…祭り、楽しみにしてたんだろうな。と、ふと思う。

マリー「いえ、私はそんな…」
若い女性「もしよろしければお名前を伺っても？」

…しまった。断り方がわからない。
観念して、正直に自己紹介をした。

マリー「…えと、傭兵会社リトルウィング所属のマリーと申します」
若い女性「…あら？どこかで聞いたような…」

よし、と思ったのも束の間。
騒がしくなったのはギャラリーだった。

「おい、リトルウィングのマリーって…」
「嘘だろ、あの！？」

マリー「ええと…わ、わたしは犯人を連行するから！エミリア後任せるね！」

壮年男性「バカッ、引っ張ん…イテテテ！」

三十六計逃げるにしかず！

私は男性を引きずるのも構わずに駆けだした。

エミリア「えっ、ちょ！？…あーあー犯人引きずっちゃって…」

若い女性「あの…」

エミリア「はい、あぁ、ポーチはここに。中身の確認をしていただいても？」

若い女性「えぇそれは…あの、彼女は一体…？」

エミリア「…あー、えー、はい。

彼女こそが我が社が誇る『英雄』、マリー”M”ミミルです」

イーサン「英雄は辛いぜ」（後書き）

長い上にグダグダ、戦闘という戦闘もなしですいません＞＜；

さてもう少しだけ続きます（汗

エミリア「やっと戻ってこれた…」

ーーー警備詰所

ひったくりの男性をウェーバーさんに引き渡したところで少し自主休憩。
…という言い訳で詰め所の中でアイスコーヒーをすすっていると、エミリアがずいぶん疲れた様子で帰ってきた。

マリー「あ、エミリア。お帰りなさい」
エミリア「全くもう…あの一帯スゴい騒ぎになったんだからね？」

マリー「ご、ごめんなさい…」
エミリア「いや、怒ってるわけじゃないんだけどさ…で、不届き者は？」

マリー「あぁ、彼なら…ウェーバーさんが怒って『矯正してやる！』って
息巻いてガーディアンズコロニーに連れていったよ」
エミリア「…うわっ…えげつなっ…」

そう言って露骨に引いたエミリアの顔はひきつっていた。
…まぁ、彼直々の指導と考えれば…ご愁傷様、かな。

マリー「まぁまぁそう言わずに…で、そっちはどうだった？」
エミリア「あー、後日またお礼がしたいって言うからクラッド６に改めて
来るってさ。義理堅いおばさまだったよ…意志も堅

いし…」

マリー「あはは、そっか。…ポーチの中身、無事だった？」
エミリア「ん、それに関しては大丈夫だった。といっても中身メセタカード
くらいだって言ってたしね」

マリー「そっか。よかったぁ…」
エミリア「ほらほら座ってないで。まだまだお祭りは1時間くらい
あるんだから見回らなきゃ！」

…お祭りが楽しいのはわかるんだけど、と前置きして。

エミリア「…はぁ、顔バレした状態で警備かぁ…」
マリー「堂々としてなって！逆に気付かれないかもよ？」

エミリア「…そうかなぁ…うん、がんばる！」
マリー「そうそう！観光客に混じって警備してけば良いって！」

エミリア「うん…ありがと、勇気でてきた」
マリー「大の男を叩きのめした奴が何言ってんだか。さ、行こ！」

そう言ったエミリアに背中を押されて詰め所をでる。

エミリア「…うん！」

がやがや

マリー「なんか心なしか見られてる気が…」
エミリア「大丈夫、気のせいじゃないと思う」

マリー「そこ！？うぅぅ…」
エミリア「ほらほら自然に！あ、リンゴ飴食べたい！」

マリー「あ、待ってよエミリアぁ…！」

がやがや

マリー「エミリア、私リンゴ飴って初めて食べたけど美味しいね！」
エミリア「そういえばリンゴ飴ってなんで屋台にしかないんだろう…」

マリー「…屋台でしか人気がないから売れないとか？」
エミリア「うーん…あたしならカフェでも普通に買うんだけどなぁ…」

がやがや

エミリア「食べ終わっちゃったね。次は…」
マリー「エ、エミリア良く入るね…私結構キツいよ…？」

エミリア「ほら、甘い者は別腹って言うじゃん？」
マリー「リンゴ丸々1個を別に入れられるお腹って一体…
ヒトの神秘…」

ヒュルルル…ドーン！

エミリア「たーまやー！」
マリー「ん？エミリア、何そのかけ声？」

エミリア「えへへ、実はよくわかんない…」
マリー「エミリアにもわからないことって…」

エミリア「まぁ、なんか叫びたくなるじゃん？」
マリー「それはわかる！」

エミリア「だからまぁ…いいんじゃない？」

ヒュルルル…ドーン！

「「たーまやー！」」

がやがや

エミリア「あ、チョコバナナ！」
マリー「チョコ…ばなな？」

エミリア「あー、見た方がわかるか…おっちゃん！これ2本！」
おじちゃん「あいよまいどっ！」

エミリア「はいマリー。これもほぼ屋台限定の食べ物だよ！」
マリー「チョコに、バナナ…頂きます…お、美味しいよこれ！！」

エミリア「あれ、なんかデジャヴ…」
マリー「エミリア、花火大会ってスゴいね！
美味しい物がいっぱい！」

エミリア「…あー、初めてプリン食べた時のユート見てる
みたいなんだ…納得」

マリー「えへへ…」

エミリア「いや、なぜ照れる」

がやがや

マリー「ん～…」

エミリア「どったのマリー？」

マリー「いや、ね？…何でみんな浴衣なんだろうって思って」

エミリア「それもそうだね…ほら、なんか風情があるじゃん？」

マリー「そうだね、何かとっても風景に似合う感じ」

エミリア「まぁ伝統が何たらしいけどそれでいいと思う」

マリー「お祭りだしね！」

エミリア「そうそう！」

ピーンポーンパーンポーン

エミリア「…放送？」

放送の内容は迷子のお知らせだった。

マリー「迷子かぁ…ニューマンの女の子、赤とピンクの浴衣…？」
エミリア「一人でちっちゃい子ならさっきチョコバナナの所にいた気が…」

そういえばそんな子もいた、ような、気がする。

マリー「…ものは試しで行ってみよっか！」

がやがや

少女「…おかーさん、どこぉ…？」

丁度チョコバナナの屋台のすぐ脇に。
放送の特徴に合う小さな女の子が半べそで立っていた。

エミリア「あ、いた！」
マリー「ニューマン、赤とピンクの浴衣…うん、この子かな？」

少女「？…おねーちゃんたち、だぁれ？」

…嘘も方便、怖がらせないように、怖がらせないように。

マリー「あなたのお母さんに言われてあなたを探してたんだ！

さ、いっしょにお母さんのところに行こう？」
少女「おかーさん…！うん！」

マリー「ほら、おねーちゃんが肩車してあげるから、お母さん見つけたら
教えてね？」
エミリア「ひゅー、マリーってば力持ちー♪」

こんな小さな子持ち上げられないで傭兵なんて…と言いかけたところで。
…恥ずかしながら、女の子の笑顔に悩殺されちゃった。

少女「うん！ありがとうおねーちゃん！」

がやがや

マリー「ん～…詰所の所まで来ちゃったけど…」
少女「…！！おかーさん！いたぁ！」

言いつつ女の子に頭を叩かれる。

マリー「いたっ、いたっ、頭叩かないで！結構痛いよ！？」
少女「あっちー！」

私の事情なんてお構いなしに女の子が指を指す方に向き直る。
…髪の毛引っ張らないで!?結構痛いよ!?

マリー「はいはい…あ、あの人かな?」
少女「うんー!おかーさーん!」

エミリア「マリーの対子供スキルが高すぎて付いていけない…」
マリー「そ、そんなことないよ…」

がやがや

エミリア「いやー、見つかって良かったねえ!」
マリー「そうだね!…お母さん、かぁ…」

エミリア「ん?どったのマリー?」
マリー「いやいやなんでも?」

マリー「博士…」

もう何年も前に私のことを作り出してくれた博士。
…色々あったけど、あの人が私の親だということになるなら。
…私の口から、自然に大きなため息が漏れていた。

ピーンポーンパーンポーン

マリー「あれ、また放送？」

エミリア「この時間は…あぁ、花火大会終わりのお知らせだね」

マリー「終わっちゃうのかぁ…楽しかったね！」

エミリア「そうだね！…マリー、これ一応任務だからね？」

マリー「…そうだったね！？」

エミリア「いや忘れてたんかい！？」

そう言われ本気で忘れていたことに焦る。

…ええと、ルートははずれてない、はず。うん。

がやがや

エミリア「急がずゆっくりとお進みくださーい！」

マリー「臨時便がありまーす！お帰りの際は係の者にご確認くださーい！」

警護任務のはずだったのに。

…私たちは何故か交通整理をお願いされ、断りきれなくて。

そんな気持ちをエミリアが代弁してくれた。

エミリア「まさか交通整理とはとんだ落とし穴だよ…」
マリー「一気に任務に引き戻されたね…」

がやがや

マリー「今日中に帰れるかなぁ…」
エミリア「まぁあたしらはマイシップあるし？
最悪どっかに泊まればいいしねー」

マリー「それは経費だねー」

なんて他愛もない話をしていたら。
…ついさっきまで私の頭の上にいた赤とピンクの浴衣が見えた。

少女「おねーちゃんたちバイバーイ！」

元気に手を振る少女と、彼女のの母が会釈をしてきてくれた。

エミリア「あ、あの子だ！」
マリー「もうお母さんの手離しちゃだめだよー！」

言いつつ、女の子の姿が人混みで見えなくなるまで私は手を振った。

…それからしばらくもしない内に。

エミリア「お？」
マリー「今のが最後の一便かな？」

エミリア「みたいだね…お疲れマリー！」
マリー「終わったぁ！エミリアお疲れさま！」

パァン！と景気付けにハイタッチ。

エミリア「やー、帰り際のあんたに気付いた人の表情がねぇ…
あの『！？』って表情はそうそうみれないわぁ」
マリー「事前に気付いて握手求めてきた人とかね…」

ここで言う『気づいた』とは、私の所属を含めて、ということ。

エミリア「あれはスゴいと思ったね…視線が熱っぽかったもんね…」
マリー「ただただ注目されるのが恥ずかしかったね…」

そんなことを言いながら詰め所に引き上げていると、一人の警衛士さんが
私たちの方に近づいてきた。

警衛士「お二方、本日はどうもありがとうございました」
マリー「あ、警衛士さん。いえいえそんな…」

警衛士「これは私どもからの心ばかりのお礼でございます」
マリー「そんなそんな！報酬も貰ってますし受け取れませんよ！」

差し出されたものは菓子折り…かな？

うん、銘菓って書いてあるからたぶんお菓子。

エミリア「マリーは欲がないからなぁ…」

警衛士「しかし…」

警衛士さんも引いてくれない。

…上司から言われてるのかなぁ、とか考えちゃうところは無粋かな？

マリー「いえ、私も今日は楽しませてもらいましたし、この経験
だけで十分満足してますから。ですからそれはお気持
ちだけ
頂いておきます。ありがとうございます！」

警衛士「あぁ、やはり評判に違わぬ素晴らしいお方々だ」

いきなり誉め殺しですか！？

マリー「え！？いえいえそんな…」

エミリア「…その評判を聞きたいね…」

マリー「もうっエミリア！」

遠くを見てため息をついたエミリアを軽く小突いて、照れ隠し。

…こういう時は空気の読めるエミリアだ。

警衛士「しかし本日ももう遅いですし、誠に勝手ながら宿を取らせて
頂きましたので、お休みになってからお帰りください」

エミリア「あ、なんかすみません…ではお言葉に甘えて…」

マリー「え、エミリア即決！？

…じゃあすみませんお世話になります…」

警衛士「いえいえ。ではこちらに」

ーーーホテルの一室

エミリア「…やっと着いたぁ…ふぁ…ふかふかベッドにダーイブ！」
マリー「ふふ、エミリアったら…え、もしかして…」
ダイブしたきり動作がないエミリアの顔をのぞき込んでみる…と。
エミリア「…ぐー…」
…もう半分夢の中だった。
マリー「…寝付き良いにも程があるでしょ！？
　…とはいえ、私も今日は疲れちゃったな…ふぁぁ…
　お風呂は明日朝入ろう…うんそれが良い」
マリー「お休みなさいエミリア…」
エミリア「むぅ…お休みなｓ…」

エミリア「やっと戻ってこれた…」（後書き）

やっと、やっと花火大会終わりました…＞＜

今後もこんな展開の遅さですが、生温く見守ってくださると嬉しいです（泣

マリー「…んぅ…」ｚｚＺ（前書き）

書き方変えてみました。

何かご指摘等くれたら嬉しいです＜＞；

マリー「…んぅ…」ｚｚＺ

ーーー宿、宿泊室、午前２時

マリー「…」すぅ…

草木も眠る丑三つ時に。
部屋の中に黒い影が入ってきた。

？？？「…」

丁度トイレに立っていたあたしは、物陰でそいつの行動を探る。

？？？（…へへ、あのマリーの寝顔ゲット…）カシャッ

カシャッ、というのはシャッター音だろう。
機を見たあたしは、すぐそこにあった電気のスイッチを点けた。

エミリア「へぇ…それ、どうするの？」
？？？「！？」

ヴーン…という音とともに、部屋のライトが軽い明滅の後、影を照らし出す。

マリー「ん～…眩しい…エミリア、電気消してぇ…」
エミリア「はいはい、ちょっとだけ待っててね？」

マリー「んぅ…」ｚｚＺ…

盗撮された当の本人はまだ夢の中。…起こすのも忍びない。
照らされた影は、グラール教団の教団員のものだった。

エミリア「さてどうしてくれようかこの変態教団員は…」
教団員「くっ、くそ、何で気づいた!?」

エミリア「うっさい叫ぶな」

そう言いそいつの尻を蹴る。

教団員「いたっ」
エミリア「声出さないでね?マリーが起きたらどうするの?」

こういうところは一応あたしも戦闘職種だ。
ドスの利いた声で黙らせる。

教団員「うっ…」
エミリア「ん、よろしい。…何、その目?」

寝不足＋安眠妨害＋反抗的な目つき＋あたしの地雷を踏む＝?
…答えは『最っ悪に不機嫌』。

教団員「お、お前は戦闘が得意じゃないってことくらい判ってるんだ…れ、連行しようとしても無駄だからな!」
エミリア「叫ぶな」

さっきより強く尻を蹴り上げる。

教団員「いたっ」

エミリア「…あのね、人怒らせるのも大概にしなよ？」

教団員「ひぃっ…」

エミリア「警備で疲れた夜に？眠りを妨げられて？
　　挙げ句の果てに盗撮目的？イライラしないと思ってるの？」

教団員「うっ…うるさい！用があるのはお前じゃなくて…」

エミリア「お前じゃなくて？」

あたしの中で何かが切れた、…ような音がした気がした。

教団員「！！や、その…」

エミリア「ちょっと…外、行こうか？」

教団員の奥襟をつかんで強制連行。

左手にハンドガンを携えて。

教団員「ひぃぃっ…」

エミリア「あぁ、そうだ電気消さなきゃ。
　　ちょっと待っててねマリー」

消えるときは音もなく。…とりあえず中庭があったからそこを目指そう。

ドアはなるべく音を立てないように閉めさせた。

ちょっと行ってくるねマリー。

そう心の中で呟いて、あたしは教団員を引きずって歩きだした。

マリー「…ぅうわっ！…え！？……何だ、良かった、夢、か……
……あれ？エミリア？」

ーーー２０分後、宿、中庭

エミリア「あとはこの画像を消去して…ねぇ？」
教団員「な、なんでしょう…」

鬱憤＋マリーを狙った罰でもう教団員はボコボコだ。
…やりすぎたかな、とも思ったけど。

エミリア「バックアップも出して。全部ね」
教団員「は、はい…」

エミリア「…うわ、何これ盗撮ばっかり…動かぬ証拠だわぁ…」
教団員「そんな…！」

エミリア「何か問題でも？」
教団員「…いえ、なんでも…」

エミリア「だよね～♪…それと、ガーディアンズにはもう連絡
入れたから逃げようとか考えないでね？」
教団員「くそっ…」

エミリア「何か？」

教団員「…いえ…」

エミリア「よろしい。…お、来た来た」
？？？「こんばんはエミリア。盗撮犯を引き取りにきました」

エミリア「おっ、ルゥじゃん！直々におでましとは珍しいね！」

このキャストはルゥ。ガーディアンズの汎用キャスト。
ちなみにボディの設計はあたしがやってたりする。

ルゥ「いえ。この盗撮犯は以前から我々の追跡対象でしたから」
エミリア「へぇ…てことはイタズラですまない所までやってる
ってことだもんねぇ…ま、後は任せたわ！」

ルゥ「協力に感謝しますエミリア。それではまた」
エミリア「またねルゥ！」

思わぬ所で知った顔と会えて、良いこともした。
さぁて、部屋に帰りますか！

ーーー宿、宿泊室

エミリア（そ〜っと…）
エミリア（あれ？電気がついて…）

マリー「エ、…」
エミリア（マリー起きてるー！）

しかも何でか超涙目なんですけどー！？
…思考が固まっている間に、マリーが続けた。

マリー「エミリアぁ…！」
エミリア「ああ、えっと、その…あぁ、泣かないでマリー！」

マリー「良か、エミリア、いなく、なってなかっ…」
エミリア「だいじょーぶだって！あたしがそう簡単にいなくなるわけないじゃん！」

マリー「うん、でも…」
エミリア「なに、どうしたの？そんな夢でも見た？」

マリー「…」

無言でこくこくと頷くマリー。
…たまぁに幼児退行するんだからこの子はぁ！

エミリア「あー…ごめんね？一人にしちゃって」
マリー「…エミリアが、悪いわけじゃない、から」

エミリア「んー…ほらほら顔上げて！ね？」
マリー「うん…」

エミリア「朝にはちょっと早いけどさ、気分転換に散歩でも行かない？」
マリー「うん…行く」

やっと泣きやんでくれたぁ！
…勢いで散歩って言っちゃったけど言ってよかったぁ！

エミリア「そうときたら！…あ、ちょっと待って」
マリー「？」

…冷静になってみたら。
出かける前には…ちょっと気になることが。

エミリア「…先に、さ。お風呂、入っても良いかな？」
マリー「…私も…そういえば昨日入ってない…」

エミリア「んじゃ、散歩はその後ね！」
マリー「うん！」

うはぁ、やっと笑ってくれたぁ！
…何でかお風呂は二人ではいることになったけど。
…まぁ、楽しいからいっか！

マリー「…んぅ…」ｚｚＺ（後書き）

ルゥ出番すくなっ！

閑話休題。

なかなか難しいです＞＜；

それとすいません、作者が根性なしなものでお風呂はスキップさせて貰います（汗

エミリア「朝は空気が澄んでて良いわぁ」

ーーー日の出前、湖畔の散歩道

エミリア「何かこう、走り出したくなるね！」
マリー「エミリア、あんまりはしゃぐと危ないよ？」

エミリアは今縁石の上に立ってヤジロベエのようにバランスをとっている。

エミリア「だいじょーぶだって！ほらほら…うわっ！？」

大丈夫と言いはなったその瞬間に。
…体勢を崩して転びかけるエミリア。

マリー「エミリア！？大丈夫！？」
エミリア「いたた…あはは、大丈夫！」

マリー「ドキドキさせないでよもう…」
エミリア「ごめんごめん！いやー、テンション上がっちゃって！」

マリー「わかるけど…あ、空が白んできたね」
エミリア「本当だ…おぉ、日の出…」

湖の向こう側に見える山から、太陽が昇ってきた。
…湖に光が反射して、言葉にできない景色が生み出される。

マリー「綺麗だねぇ…」

エミリア「本当…ん？」

マリー「…ん？どうしたの？」
エミリア「いや、あそこに見覚えのある人影が…」

マリー「んー…あ、あそこ？」
エミリア「そうそうあの桟橋のところ！んー…誰だろう…」

カメラアイの倍率を上げるなどという事は出来ないので。
目を細めて誰かを確認しようとする。
…正体は、意外なヒトだった。

マリー「あ、エミリア、あれあの人だよ！ほら、えぇと…
元巫女様！」
エミリア「え、あれカレンさん！？」

マリー「そうカレンさん！カレンさーん！」
エミリア「カレンさーん！」

そういいつつ二人で手を振る。
逆光で見え辛いが、確かにあれはカレンさんだ。
おまけにこっちに気付いて手まで振り返してくれた。

エミリア「行こ！」
マリー「うん！」

考えていることは同じだったようで。
私とエミリアは、彼女の元へかけだした。

ーーー散歩道、桟橋

カレン「何も走ってこなくても良かったのに…」
エミリア「いやぁ、何か走りたくなっちゃって…」

マリー「おはようございます、カレンさん」
カレン「あぁおはようマリー。ところでこんな時間にどうした？」

マリー「いろいろあってお散歩中です！」
エミリア「や、マリーが怖い夢を見たっていうんで気晴らしに」

カレン「おやおや」

そう言ってくすくす笑うカレンさんは、何だかやっぱり大人だ。

マリー「もう、言わないでよエミリアっ」
エミリア「あははっ」

カレン「ん？…というか、マリーはキャストなのに夢を見るのか。
　　睡眠をとるとは…本当にキャストか？」
マリー「あはは…」

エミリア「いやぁ、それが本当にキャストなんですよ。
　　お風呂に一緒に入ったんですけどマリーったら…むぐっ」
マリー「エエエミリア！？落ちつこ！？」

さすがに恥の概念くらい持ち合わせている。

私は続きを言わせないようエミリアの口を手でふさいだ。
…タップされたので放しておく。そこまで強く閉めた気はないんだけどなぁ…

カレン「あははは。二人は本当に仲がいいんだな」
エミリア「っはぁ…そりゃぁパートナーですから！」

マリー「えへへ…何だかこそばゆいね…」
カレン「パートナーは大事だぞ？後々違う道を歩むことになったとしても
連絡を取り合う二人組を知ってるからな」

エミリア「へぇ…あたしたちの知ってる人ですか？」
マリー「違う道…かぁ…誰だろう？」

カレン「なに、イーサンとヒューガだよ」
「「あの二人ってパートナーだったんですか！？」」

朝の湖に驚愕の叫びがこだまする。

カレン「何だ、知らなかったのか？意外だな」
エミリア「いやぁ、こいつが『英雄』の話題になると逃げ出すもので…」

マリー「…てへっ！」
カレン「恥じることはないのだぞ？」

マリー「いやぁ、なんというか…大げさ？に言われるのがどうも…
私はただ、大切な人たちを守ろうと必死だっただけで、

それを祭り上げられると申し訳ないと言いますか…」
エミリア「嬉しいこといってくれんねぇ、このぉ」

言いつつエミリアに小突かれる。
…ああ、顔が赤くなっていく…

マリー「は、恥ずかし…」
カレン「あはははははっ。全く、英雄とはかくあるものだなっ」

マリー「ちゃ、茶化さないでください…むぅ…」
カレン「いや、茶化してなどないさ。ただ、イーサンも同じことを
言っていたのを思い出してな。すまない…あはははっ」

エミリア「へぇ…通ずるものがあるんでしょうかね？」
カレン「かもしれないな。あぁ、笑った笑った。こんなに笑ったのは
久しぶりだ。ありがとう、二人とも」

マリー「はい、どういたし…まして？」
エミリア「なにもしてないですけどねっ！」

マリー「いやそこドヤ顔で威張るところじゃないと思う…」
カレン「あぁ、無理を言って出てきてよかった…いや、実は今お忍び
で出てきている身なんだ」

エミリア「あれ、何か催し事でもあるんですか？」
カレン「あぁ、今年は３０年に１度の大星霊祭だからな…そうだ、
お前たちに【ヤオロズレースの参加権】を進呈したい。
特別に私の独断で一組入れて良いと言われてな。本当
はもう
受付の締切がすぎてしまっているんだが、申し込んだ

かい？」

マリー「いえ、レース自体を今知りました…」

祭りは昨日のが初めてだから。と口ごもる。

カレン「なら丁度良い。是非参加してくれ。楽しみに待っているよ。
…あぁいけない、時間が来てしまった。詳しくはまた連絡する」

マリー「ありがとうございます…あの、催し事頑張ってください！」

エミリア「それじゃぁまた今度！さようなら～！」

カレンさんはヒラヒラと手を振り、散歩道を私たちの宿の方向とは反対に
歩っていった。

エミリア「…行っちゃったね」

マリー「なかなか会えない人だしねぇ…」

エミリア「…」くぅ…

マリー「…あははっ！エミリア今の音っ…！」

エミリア「う…うるさいうるさい！しょうがないでしょ！？」

今の音は、まぁたぶん間違いなくお腹の虫が鳴いた音だ。

マリー「はいはい…ぷくく…本当にくぅって鳴った…」

エミリア「もう！ほらあたしらも帰るよ！」

マリー「チェックアウトはすませちゃったし…クラッド6に？」
エミリア「そう！ほらいくよ！」

マリー「途中で朝ご飯買おうねっ」

そこで私はたまらず吹き出した。
…エミリアが顔を真っ赤にしてるのがおかしくって。

エミリア「だって朝ってお腹すくじゃん！」
マリー「えー？そう？私朝弱くってさぁ…」

エミリア「お腹すくもんなの！ほらいくよ！」
マリー「わかりましたわかりました…帰ろう！」

エミリア「朝は空気が澄んでて良いわぁ」（後書き）

進行が遅いのは仕様で（ボッガ・ズッバ
すいません改善できる気がしませ（ボッガ・ランパ

次からやっとクラッド６に帰ってきます！

やっとだぜ…先は長くなると思いますがごゆっくりおつきあいをお願いします＞＜；

エイダ「マスターーーー！」（前書き）

久方ぶりの更新となりますが覚えててくださるでしょうかくく；

ご指摘いただきましたのでちょいちょい書き方変えていきます～

これからもどんどん言ってくださると助かります（＾―＾；）

それではどうぞ！

エイダ「マスターーーー！」

ーーークラッド6、マリーのマイルーム

マリー「ただいｍ「お帰りなさいマスターっ！」

マイルームの扉を開けるなり、腰ほどの高さに衝撃を感じた。

マリー「おぉう速いねエイダ…って、どしたの？抱きついて
　　くるなんてずいぶん珍し…！」

エイダ「怪我はないですか！？…本当に！？」

全身をボディチェックされるかのごとくペタペタ触られる。

…しかも微妙に優しくなのが妙に…くすぐったい。

マリー「……くはっあはっあはははあはくすぐったいって！！
　　やめ、すいませんエイダさんもう勘弁してくださ
　　あっはははははあはは！！」

エイダ「いいえだめです！メールすると言っておきながら
　　結局連絡なしでしかも朝帰りですよ！？
　　これはお仕置きもかねてるのでやめません！」

やばっ、すっかり忘れてた！

エイダ「あ、今すっかり忘れてたって思いましたね？
　　そんなダメマスターにはもっとお仕置きです！」

マリー「え、ちょ、なんでわかっ、やだーー！！」

エイダ「はい、今の言葉で裏がとれました！そんなマスターには

倍速こちょこちょの刑です！」
マリー「え、私はめられた？ゃっ、いやーーあはははは！！」

ーーー３０分後

マリー「ぜぇ…も…だめ…息…吸えな…」
エイダ「倒れて肩で息とはまさかここまで効くなんて…
これくらいで許してあげましょうか」

マリー「…あ、ありがとうございますエイダさん…」
エイダ「それではマスター。朝食はどうなさいます？」

この状態で朝食なんて余裕ないよ！
…とツッコミたかったが盛大に笑ったせいかお腹は空いている。

マリー「あ、…じゃぁシリアルでお願いします…」
エイダ「かしこまりました。少々お待ちください」

あ。一緒に食べようってまた言いそびれちゃった。
…またこちょこちょされてもイヤだから大人しく席へと向かう。

マリー「ふぅっ…あれ？いつもなら『準備が整いました』とか
言ってもおかしくないくらいの時間なんだけどな
…」

…ん？椅子から見える風景になんだか違和感。

マリー「…マシナリーチェア？こんなの置いたっけ？」

その時。壁の陰からエイダがこちらに…
いつもの倍はあろうかというお盆を持ってやってきた。

エイダ「おまた…せっしま…した！」
マリー「ちょちょちょエイダ大丈夫！？
　　ってかそんな大きなお盆あったっけ！？」

エイダ「ふぅ。慣れないことはするものじゃありませんね」
マリー「あ、質問はスルーなんだね…」

エイダ「よいしょっ…では頂くとしましょうか。…何ですか？
　　何か私の顔面にへばりついてでもいますか？」
マリー「何か今日風当たり強くない？私…
　　や、いや、エイダ一緒に食べてくれるの！？」

エイダ「ご迷惑ならば退席しますが」
マリー「むしろ一緒に食べてくださいお願いします！」

エイダ「主の頼みとあらば仕方ないです。
　　ご一緒させていただきます」

…今まじまじと見て気づいた。
これは…エイダの照れ隠し…！

マリー「…ふふっ」
エイダ「かっ、勘違いしないでくださいね？あくまでマスターのスケジュール
　　管理の一環としてこうやって…」

マリー「あれ？私何もいってないよ？」もしゃもしゃ
エイダ「……！！」

おぉー、耳の先まで真っ赤になっちゃって。
普段の無感情な言動からは想像できないなぁ…

マリー「…可愛い奴めっ」もしゃもしゃ
エイダ「……！だ、誰が！」

マリー「エイダが？」ごっくん
エイダ「……！！！」

今にもボンッ！って言いそうなくらい赤くなっちゃってまぁ。
…私も大概だけどエイダもなかなかマシナリーっぽくないよなぁ…

マリー「はいごちそうさまでした…ってあれ？エイダ？
　…おーい？」
エイダ「はっ、はいっ！何ですかマイマスター！」

マリー「いや、大丈夫かなぁと思って」
エイダ「大丈夫です無問題ですシステムオールグリーンです！」

あちゃ、見事にテンパっちゃってる…

マリー「ん～、エイダ？」
エイダ「はいっ」

マリー「今日は確か任務なかったよね？」
エイダ「ぇえとっはい！今日はフリーですね」

マリー「後でさ、パーツ買いに行きたいから一緒にきてくれない？」
エイダ「は、はいわかりました…」

マリー「…やっと落ち着いた？」
エイダ「はい、お見苦しいところを…」

エイダがスプーンを持ったまま深々と頭を下げる。

マリー「ああちょっエイダ、髪がミルクに浸っちゃうよっ」
エイダ「ああっと！度々すみません…」

マリー「まさに間一髪だね…」
エイダ「ありがとうございます、マスター」

マリー「いいっていいって。ほら、速く食べちゃいな？」
エイダ「じゃぁすいませんお言葉に甘えて…」もそもそ

なんだかいつもと逆になっちゃってるな、というのは
エイダの名誉のため言わないでおく。

エイダ「…ふぅ。ごちそうさまでした」
マリー「よっし！じゃあエイダが準備できたら買い物行こっか！」

エイダ「了解しました。少々お待ちください」

エイダ「マスターーーー！」（後書き）

久しぶりでキャラが行方不明…

ヤオロズ様は結構後になるかもです＜＜；

ナギサ「貴女か、奇遇だな」

ーーークラッド6、コスチュームショップ

マリー「あ、ナギサ。おはよう」
ナギサ「おはよう。服でも見に来たのか？」

マリー「そうそう、ちょっと見たい服があってエイダに
　　付き合ってもらってるんだぁ」
エイダ「ナギサ様、おはようございます」ぺこっ

ナギサ「あぁおはよう。…ええと、マリーのパートナー
　　マシナリーでよかったかな？」
エイダ「はい。私のことはエイダとお呼びください」

マリー「あり？二人って初対面だったっけ？」
エイダ「いえ。ですが覚えて頂いていない可能性がある以上
　　自己紹介をした方が、物事が円滑に進むかと」

ナギサ「…私が言うのもなんだが、あまり私に対して固く
　　ならなくてもいいのだぞ？」
エイダ「いえ、私一体の時ならまだしもマスターがいる前で醜態を
　　晒すわけにはいきませんのでお気持ちだけ受け取らせて
　　いただきます。ありがとうございます」

…嘘付け、エミリアの前ではもう結構はっちゃけるくせに。
下手なとこで頑ななんだからもう…

マリー（この空気の重さをどうにかしてもらいたい…）ふぅ…
ナギサ「ああそうだマリー。少し話があるのだが」

マリー「はっはいっ！？」
ナギサ「？何をそんなに慌てているんだ？
まあいい。マツリ？…に必要なユカタ…だったかな？
それを探しているんだがどこにあるか知らないだろうか？」

マリー「あ、ナギサも浴衣見に来たんだ。うーん、ヒトの服の配置は
私にはわかんないかなぁ…」
ナギサ「…そうか、貴女はそうみえてもキャストだったな」

マリー「そう見えてって一体私ってどう見えてるの…？」
ナギサ「まあいいじゃないか。とりあえず私は店員に聞いてくるよ。
それではまた会おう。…エイダ、だったな。うん、覚えた」

エイダ「光栄です。それではまた」
マリー「…あれ？最近私スルー多くない？泣くよ？」

エイダ「その程度で泣かないでくださいマスター。…ところで、
先ほどのお話から推測するに、マスターも浴衣をお探しに
なっているようですが。お祭りにでも参加するんですか？」
マリー「ああ、ちょっとね。カレンさんにヤオロズレースの特別招待券
みたいなのもらっちゃって」

エイダ「ヤオロズレース…大星霊祭ですか？」
マリー「そうそう、さすが情報通だねぇ！」

エイダ「…となりますと、今日の夜の便でニューデイズに向かわないと
　　明日のレース開始には間に合いませんね」
マリー「…うそ、ヤオロズレースって明日！？」

エイダ「はい」
マリー「ちょちょっエイダ急ご！さすがにまずいって！」

エイダ「まだ１０時になったばっかりですからそんなに焦らなくても…」
マリー「久しぶりの休暇なんだしご飯とかはゆっくり食べたいの！
　　あ、ってことは明日のレースのメンバー今日中に集めなきゃ！
　　ええとエミリアと、私と、ナギサ誘ってみて…」あたふた

エイダ「…落ちつてくださいマスター」
マリー「え、私は十分落ち着いてマスヨ？ああえっと…」

不意に。
ごすっ、という音とともに頭に鈍痛が走る。

マリー「いったあ！何すんのさエイダぁ！」
エイダ「だから落ち着いてくださいって言ったでしょう。
　　今日の最終便とはいえ後１２時間程後の心配を今してどうします。

とりあえずほらほら浴衣見に行きますよ？」

マリー「…いや、ジャンピングチョップは結構な威力を誇るね…
あ、はいすいません行きます行きますから武器はしまって！？」

ーーー２０分後、試着室

エイダ「着替えられましたか？」

マリー「着られたけど…私に緑って似合わないと思うんだぁ…」

エイダ「そういうと思って色違い用意しておきましたよ。
赤・黄・黒・紫、どれにします？」

マリー「エイダのおすすめで！」

これで選んでくれてる間にこの浴衣脱いじゃおう。
…と思ったのだが、私はエイダを甘く見ていたようだ。

エイダ「では黒ですね…開けますよ？」

マリー「あっちょっまっまだ！」

シャッ。

試着室のカーテンが開かれる。

エイダ「…ヒトだったならサービスショットなんでしょうが…
マスターはキャストですしねぇ…」

マリー「うっさい恥ずかしいのは変わんないんだから！！
　　ボケっと見てないで早く閉めてよぅ！！」

エイダ「ああ、これは失礼しました」シャッ
マリー「…最近エイダが私を主として見てない気がする…」

エイダ「それは気のせいですマスター」
マリー「ぅう…もうお嫁にいけない…」

エイダ「…行かれちゃったら寂しいじゃないですか…」ボソッ
エイダが何か言ってるんだけどカーテンのせいで聞き取れない。
くそー。
…と言う間に着替えも終わったので浴衣を交換してみる。

シャッ。

マリー「…はい、着替え終わったよ…エイダ？
エイダ「…！！」ゴシゴシ

マリー「どしたの？どこか調子でも悪い？」
エイダ「いえ、なんっでもありませんっ！」

マリー「そ、そう…あ、黒の浴衣貸してくれる？着てみるからさ」
エイダ「はい！どうぞ！」

マリー「？…変なエイダ…ま、いっか。ちょっと待っててねぇ」

気づかない振りはしてみたけど誤魔化せてるかな？
エイダ、泣いてた。

何でなのかなんて、わからないけど。
何だろう、エイダに泣かれると、すごく、辛い。

マリー「…ヒトの着る服って何でこんな着づらいんだろ…」

四苦八苦しながら浴衣を着る。
…さっきよりは上手に着れたかな?

シャッ。

マリー「エイダ、どうかな?似合ってるかな?…あれ?エイダ?」

さっきまで確かにここにいたのに。
エイダが、いない。
そんな。何で?

マリー「エイ、ダ…?エイダっ?」

いつもならすぐ帰ってくる返事が返ってこない。

マリー「…!」

いてもたってもいられない。浴衣なんか着てる場合じゃない。
着替える時間ももどかしく思いながら、すぐに元のパーツに換装する。

マリー「エイダ!」

思わず叫んでいた。
浴衣を片づけるのもそこそこに駆け出そうとーーー

エイダ「はいはい、そんなに呼ばなくても聞こえてますってマスター。
公共の場ではお静かに、ですよ？」

マリー「…え？」

ーーーして、急に後ろから声をかけられて。
無理に方向転換しようとした私は派手に尻餅をつくことになった。

マリー「いいったぁ！」
エイダ「えっ、大丈夫ですかマスター！？」

マリー「エ、エイダ！？さっき見たらいなかっ…」
エイダ「マスター、他の浴衣を置きに行っただけです…
売場からここまで結構あるんですから」

え、すると何？早とちり？

エイダ「そもそも私がマスターを置いてどこに行くって

言うんですか…」

マリー「そ、それもそうだけど返事くらいしたっていいじゃん！」

エイダ「店内でいきなり叫べと？…構いませんがいかんせん
周囲に他のお客様がたくさんいたもので」

マリー「あ、それは叫べないね…
あはは、いやー、てっきり置いて行かれたかと」

エイダ「マスター…流石に私も泣いちゃいますよ？
貴方以外に仕えるなんてこっちから願い下げですし…」

マリー「…嬉しいこと言ってくれるじゃない？」

エイダ「ええ言ってやりますともマイマスター。
この身果てるまで仕えると決めた唯一の我が主。
貴方が望むのなら例え火の中水の中ですよ。
それなのにどうして貴方の前からいなくなりましょう
？」

マリー「おおう…なかなか恥ずかしいことを恥ずかしげもなく言う
とはやりますねエイダさん…」

エイダ「本心ですし」

マリー「…じゃぁ聞くけどさ、さっき泣いてたの。あれは何で？」

エイダ「！！…あれは……マスターが…」ごにょごにょ

マリー「言いたくないなら無理に追求はしないけど…
悩んでるなら聞いときたいかなぁ…って思って」

エイダ「うぅ…あれは…ていうかバレてたんですね…」

マリー「気付かない振りしようとしたんだけどね～」

エイダ「…わかりました。いいます。けど…引かないでくださいね？」

マリー「任せときなって！どんとこーい！」

とりあえず今は安心させることが先だ。

引くかどうかは…聞いてから考える。

エイダ「……ターが、いなくなっ……悲しくなって……」

マリー「？…すいません、もうちょい大きな声でお願いします…」

エイダ「マスターがっいなくなったら私は！…どうしたらいいのかなって…！マスターがいない日常を考えてたら…悲しくなって…」

マリー「…そんなことで悩んでたの！？」

エイダ「そんなこととは何ですか！私からしたら一大事ですよ！」

マリー「あはは、私がいなくなるなんてことありえないって！亜空間事件でも欠片騒動でも死ななかった私が簡単にいなくなってたまるもんですか！あははは！」

エイダも可愛いところあるんだよね！

ギャップ？というのだろうか、普段はクールビューティーなエイダの弱い部分を見た気がしてそれがなんだかツボにはまった。

エイダ「わ、笑わないでください！…それに…」

マリー「ひー、お腹いた…はい、それに？」

エイダ「あの、ですね。マスターは身内びいき除いても結構殿方に好まれそうな性格してますし？容姿だってキャストだから

とはいえかなり可愛い方だと思いますし…」

マリー「や、褒めごろしはヤメテくださいエイダさん…
エイダの慣れない褒めごろしは必殺級に恥ずかしいです…」

顔が赤くなっていくのが体感でわかる。
こんな時に自分が本当にキャストなのか疑わしくなる。
暑いなぁ、冷房もっと効かせてくれないかなぁ。

エイダ「だから！…その、ウルスラさんの件もありましたし、突然『私結婚するから！』とか言われたらどうしようかと…」

マリー「…あぁ、お嫁にいけない発言からこうなったのね…
いやいやちょっと待ってよ。何で結婚するのにエイダを置いてかなきゃいけないのさ？
エイダを受け入れられない相手ならこっちが願い下げだね！」

これはまごう事なき本心だ。
でなければこんな熱く語れるわけがない。

エイダ「…もう！ありがとうございます！吹っ切れました！
変なことでうじうじ考えません！」

マリー「よし、その意気だよエイダ！
…それで、すごく言いづらいんだけど…」

そっと口をエイダの耳に寄せる。

エイダ「？どうなされました？」

マリー「なんかめっちゃ目立っちゃってるよね私たち…」

エイダ「そういえばあちこちから視線が…」
マリー「…黒の浴衣買って逃げよっか？」

エイダ「はい、それがいいと思います」
マリー「エイダは？浴衣とか…」

エイダ「私はもう何着か持ってますので」
マリー「…エイダの他の服とか見たことないんだけどな…
そっか、じゃ、行こ！」

エミリア「ありゃ？奇遇だね」（前書き）

どうも、完徹二日目でテンションがヒャッハーしてる作者です（笑

登場人物の台詞等おかしなところありましたらご指摘願いたく思います＜＞；

それではどうぞ！

エミリア「ありゃ？奇遇だね」

ーーーカフェ

エミリア「おーいマリー！エイダー！」

マリー「あ、エミリアだ」

エイダ「エミリア様は周りに人がいても大声を上げるのをためらわないんですね…」

エミリア「二人ともカフェで会うのって珍しいね！

何、買い物でも行ってたの？」

マリー「ああ、うん。ほらカレンさんにもらったお祭りのチケットあるでしょ？お祭りって知ってたら浴衣着たいなぁって」

エミリア「へぇ～…あれ？お祭りはお祭りでもさ、私たちってあのー…何とか…何とかレースに出るんだよね？」

マリー「？うん、ヤオロズレースでしょ？」

エミリア「あれっていつもの任務みたいに四人パーティーで行くって聞いたんだけど…人数集めた？」

マリー「ううん全然集めてないよ？エミリアは？」

正直忘れていた。ちょっとだけ焦る。

…が、エミリアを見てそんな気持ちが吹っ飛んだ。

エミリア「私がそんな気を配ると思ってか！」えへん
マリー「あはは…そこは威張るところなのかなぁ…」

エミリア「まぁそしたら私も適当に人一人連れていくから後一人
よろしく！頼んだ！」
マリー「あ、そうそう。現地には今日の最終便までに行かなきゃ
レース開始に間に合わない…んだよね？」

エイダが会話に入ってこない…から話題を振ってやる。

エイダ「はい。本日中に向こうに向かいませんとまず間に合わないと
考えてもよろしかと」
エミリア「うっそ！？やばっ、あたし何の準備もしてないや！
ちょっとちゃちゃっと準備してくる！じゃまた
後でね！」

そういうとエミリアは…任務中のダッシュより速いんじゃないかと
いう
スピードで駆け出していった。

マリー「…嵐のように去っていったね…」
エイダ「まぁエミリア様ですし致し方ないかと」

マリー「むぅ…エイダの口調がものすごく固くなってる気がする…」
エイダ「先ほどのように取り乱したりしてしまうといけませんので」

マリー「もっとゆる～くいこうよエイダ～」のしっ
エイダ「っ…もたれ掛からないでくださいマスター！
意外と…負荷が…！」

マリー「あ、それは私を重いっていったのかそうなのか！？」ぐでん
エイダ「いえ…身長の倍ほどもあるヒトを持ち上げるように作られて
いる訳ではないですし…！仕方ないかと…！」

マリー「はいはい離れますようっ…と。じゃ、お昼食べよっか！」
エイダ「は、はい…ふぅ…大丈夫です、行きましょう」

マリー「やっぱりまだ固いなぁ…」
エイダ「…わかりました。多少改善を試みます」

マリー「ん、ならよし！」
エイダ「あの席が空いていますね、行きましょう」

手頃な席を瞬時に見つけるエイダ。
そのスキルは私もほしいぞ、と思う。

マリー「おっけー！あ、そうだエイダ何食べる？ケバブ？」
エイダ「そこで何でケバブをチョイスしたんですか！？」

マリー「いや、エミリアがおすすめしててさ…えと、『片手で本を
読み
ながら食べられてなおかつ美味しい』って」
エイダ「それはおにぎりでも変わらないのでは…」

マリー「細かいことは気にしな～い！んじゃま、ご飯選びに行きま
すか！」
エイダ「ケバブ…その辺に売っているものなの…？」ぶつぶつ

マリー「お、この…エイダ、なんて読むのこれ?どこの料理?」
エイダ「ええと…カオオブサパロッヌアプーですね」

カオオブ…?

マリー「なにそれ新しいテクニック?」
エイダ「料理です。モトゥブにニューデイズの文化が何やかんやしてできた甲殻類のピラフをパイ・ナッポォの器に盛ったものです」

マリー「へー…エイダやけに詳しいね?」
エイダ「一応料理人も兼任してますし、これはこの間レシピを見つけた
ばかりだったもので記憶に新しく」

マリー「甲殻類ってどんなの?」
エイダ「タラ・バガニですとか…あとクル・マエビですとか…
この料理だとタラ・バガニの仲間を使用するそうです」

マリー「はぇ〜…これにしようかなぁ」
エイダ「器が器ですので甘めの味付けになってますが大丈夫ですか?」

マリー「うん、辛くなきゃ大丈夫大丈夫!」
エイダ「…辛いのだって美味しいのに…」

ちょっとしょんぼりするエイダ。
…と、その目が不意に輝いた。

マリー「エイダは何にするの？」
エイダ「では私は…ガイ・パッ・バイカパオとライスで」

ガイ・パッ…？

マリー「なにそれ新しいナックルのフォトンアーツ？」
エイダ「ボッガ・ランパじゃありませんし、れっきとした料理です」

マリー「はぇ～…見るからに辛そうだけど…」
エイダ「辛いはずです。簡単に言ってしまえば鳥肉のバ・ジル風味炒め
ですが、香辛料をふんだんに使用しますのでとても辛いです」

オブラートに包んではいるが要するにトウ・ガラシ満載だ。

マリー「…ひ、一口だけ食べてみてもいい？」
エイダ「えぇ。マスターに食べさせるために辛いのを頼みましたから」

私が辛いのを食べられないと知っての狼藉だ！確信犯だ！！
いや…でも…ううん、克服してみせる！

マリー「う、うん。…私、頑張るっ！」
エイダ「そんな決意を持って食事するヒトもなかなかいませんよ…」

いや、だってエイダは結構辛いものが好きなわけで。
…となると手加減なしに辛そうなわけで。

マリー「じゃ、じゃあ注文しちゃおっか。…噛みそうだから頼んでいい？」
エイダ「勿論です。というか、私が注文するつもりでしたし」
マリー「さっすがエイダ！…お、順番来たね」
店員「ようこそいらっしゃいました。ご注文をどうぞ」
エイダ「カオオブ…」
エイダのいう言葉が呪文に聞こえて仕方ないので隣で何をすることもなく。
カウンターに届かないから背伸びして注文するエイダ可愛いなぁ…なんて
思っていたら。
エイダ「マスター、ドリンクはいかがしますか？」
マリー「ぇ？あ、はいっ。…じゃあオレンジジュースをお願いします」
エイダ「はい。…はい、オレンジジュースを一つ。以上でお願いします」
店員「毎度ありがとうございます、お会計は…」
マリー「…ふぅ。ヒトがいっぱいいるって疲れるねぇ」
エイダ「そうですね。お昼時ですし仕方ないですが」
マリー「ええと、席は…ありゃ、とられちゃってら」
荷物とか置いとけばよかったかなぁ、とちょっぴり後悔。

…わざわざ荷物をデバイスから出すのが面倒だったんだけど。

エイダ「…あ、マスターあそこがあいてます」
マリー「よく見つけるねぇエイダ！よし、とられちゃう前に突撃だ～！」

エイダ「トレー持ってますから走れませんけどね…ええ、いきましょう」

マリー「意外とすぐついちゃった」
エイダ「カフェ自体もそこまで広くないですしね。こんなものでしょう」

マリー「それでは…」

「「いただきますっ」」

マリー「あ、これおいしい！ほんのり甘いのにくどくないし！」
エイダ「やっぱり辛いのはいいです…この内側から暖まる感じが特に」

マリー「あ、そうだ一口ちょうだい！こっちも食べて良いからさ！」
エイダ「ええ。交換と行きましょう」

エイダ「…あぁ、甘いのもこれはこれでなかなか…」
マリー「……っ！！！」

なにこれ辛ぁっ…！！
慌ててオレンジジュースを飲む。というか飲み干す。

エイダ「ふふ、大丈夫ですか？マスター」
マリー「…ぶはぁ！暖まるどころじゃないよバーニングだよ！
舌が燃え盛っちゃうよ！」

エイダ「オレンジジュース頼んでよかったですねマスター…ふふっ」
マリー「…この数時間でエイダがドSになってきてる気がする…」

エイダ「いえいえそんな。褒めても何も出ませんよ？」
マリー「それを褒めてると受け取れるのがすごいよ！？」

そんなこんなで楽しく昼食の時間は過ぎていった。
以前はやれＳＥＥＤ事変だ、やれ亜空間事件だ、極めつけには欠片騒動。
事件が解決してからも傭兵には後始末の依頼が次々と舞い込んで。
ゆっくり食事をとる暇もなく任務先で最低限、があたりまえ。

…だから。
こんな他愛もないやりとりがすっごく楽しくて。

マリー「…ねぇエイダ」
エイダ「何ですかいきなり改まって」

マリー「私が家にいるときはできるだけ一緒にご飯食べようね？」

こんなことを言うのが少し怖くって。

エイダ「マスターがそうおっしゃってくださるなら私としても是非」

そういってくれるのがとっても嬉しくて。

マリー「…ふふっ」

エイダ「何ですかマシナリーの顔を見て笑うなんて。変なものでも
食べたんですか？」

マリー「いまご飯食べてる真っ最中だよ！？」

自然と笑みがこぼれてくる。

マリー「…あ、そうだエイダ」

エイダ「はい？」

マリー「ヤオロズレース、参加しない？」

エイダ「…皆様が良いと仰ってくださるなら」

マリー「よし決まり！んじゃ、残りの用事全部すませちゃおっか！」

エイダ「まぁまぁ腹が減っては何とやら。…お残しはいけませんよ
？」

う、と止まった私の器にはまだピラフが残っていた。

マリー「だってこれ絶対二人前くらいある…！」

エイダ「しょうがないですね…」

と、エイダが皿を自分の方に引き寄せる。

私の分も食べてくれるのか、…と思いきや。

エイダ「はい、あーん」
マリー「あーん？」

エイダ「いや流石に私でもこの量は無理です。だから自分から食べないなら
　　食べさせようと思っただけなのですが…」
マリー「…オッケーエイダ落ち着こう。とりあえずそれはとても恥ずかしい。
　　自分で食べますからお皿をください」

エイダ「？…ええ、そうですか。ではどうぞ」

…不意打ちにも程があるってもんですよエイダさん…！
そのあと食べたピラフの味は行方不明になっていた。

エミリア「ありゃ？奇遇だね」（後書き）

デレデレですねぇエイダさんとマリーさん…

いえ、百合を狙って書いているわけではなくて（汗

なんかもうキャラが自分から動いてくれてるのを書き移す作業みたいな
感じなんで誰かこいつら止めてくださ（黙

…ちなみにカオオブ（ｒｙもガイ・パッ（ｒｙも実在するタイ料理です（。—。）
パイナポー美味しいよパイナポー（笑

マリー「とりあえず部屋に戻ろう」

ーーーマリーのマイルーム

マリー「と言うわけで帰ってきたわけですがエイダさん」
エイダ「何でしょうマスター？」

マリー「…なんだか私のベッドに誰か寝ている気がするのは
　　私のカメラアイが狂っているのでしょうか？」
エイダ「いいえマスター。私にも誰かいるように見えます」

マリー「…それにあの後ろ姿はとても見覚えがあるのですが」
エイダ「奇遇ですねマスター。私も、この人をとてもよく
　　知っているように思います」

思い出せば懐かしいほど昔ではないけれど。
…彼女にとっての休憩場所になっているのかな。
なんて考えていたら。

エイダ「一応お客様なのでしょうか…おもてなしの準備は？」
マリー「いいえいりません。…とりあえず起こしましょう」

エイダ「そうですね。…マスター、いつまで敬語なんです？」
マリー「いや、止めるタイミング逃しちゃって…」

エイダ「まぁだろうと思いましたが。…では失礼して」

と言うとエイダは、彼女を刺激しないように慎重に近付いて、
…何やら武器を取り出し始めた。

マリー「エ、エイダさん？流石にそれは許可できないかなぁ
　…なんて思ったり」
エイダ「安心してくださいマスター。これは護身用です」

いやいや護身で本気装備！？
…と思ったが、寝ている人が人だから仕方ないか。

エイダ「…行きます」
マリー「ファイトっ！」

小声でそういって壁の陰に隠れる。
…だって何が起こるか解りきってるし。

エイダ「ふぅ……よし。…後ろがガラ空きですよナギサ様！！」
ナギサ「！！」

ギィンッ！
と言う音がしたかと思うと部屋に閃光が走っていた。
その閃光がナギサの愛剣だという事を認識するのに
時間はいらなかった。

エイダ「…！！」

一方エイダはガードでその場をしのいでいた。
ロッドの細い柄で辛うじて受けきったようだ。

ナギサ「！！なかなかやるなっ！だがこれなら！！」
エイダ「…！ガードが追いつかな…！！」

ナギサの剣が金色の光をまといだす。
あの構えは…スピニングブレイク!?

エイダ「えっ?ちょっ!ナギサ様落ち着いてください!!
室内でアーツ発動しようとしないでください!!
というか寝ぼけて斬りかかる癖治してください!」

防戦一方のエイダが畳みかけるように叫ぶ。
…飛び上がろうとしたナギサは不意に我に返ったかのような顔をして言った。

ナギサ「……あれ?なんだ、エイダじゃないか」
エイダ「なんだ、じゃありません…と、とりあえず剣を
収めてくださると助かるのですが…!」

ナギサは一瞬しまった、という顔をして。

ナギサ「あぁ、すまない。…ところで何故エイダがここに?」

安全を確認して少しずつ陰から出ていく。

マリー「エイダが、じゃなくて何でナギサがここに、って
聞きたいんだけどなぁ…」

ナギサ「あぁ貴女まで。どうした?私に何か用か?」
マリー「ええと、ナギサ?…もしかして部屋間違えた?」

む、と顔をしかめて一瞬。
すぐに顔を明るくした。

ナギサ「ああ、道理で内装が違っているはずだ！」

はは、と持ち前の明るさ（能天気さ？）で笑い飛ばされた…けど。

エイダ「失礼ですがナギサ様。なぜ鍵を開けられたのですか？」

マリー「そうだよ、ちゃんと戸締まりしていったのに」

それだけは聞いておかねばなるまい。うん。

ナギサ「いやなに簡単なことだ。私が貴女の部屋の合い鍵を
　　持っているからだよ」

なんだそうか…ってえぇ！？

マリー「いやいやいや重要なことさらっと言ったよね今！？」

ナギサ「？何かおかしいのか？」

マリー「全部おかしいって！てかカードキーの合い鍵とか
　　作れちゃだめでしょ！？」

ナギサ「？エミリアだって持っているぞ？」

エイダ「…マスター、エミリア様のところに行ってきます」

マリー「行ってらっしゃい！」

多分合い鍵を貰いに行くんだろう。…穏便に済めばいいけど。

マリー「とりあえずナギサそれ没収！」

ナギサ「え、それはイヤだ困る」

マリー「イヤだ…？ああそう、じゃ、今後エイダの作るおやつ

全部禁止かそれを渡すか。どっちにする？」

ナギサ「どうぞこれを納めくださいっ」

即答…エイダのおやつ恐るべし…

マリー「ありがとっ…ねぇナギサ、もう一つ聞いて良い？」

ナギサ「どうぞ何なりと聞いてくれ！」

おやつ効果なのか、ナギサが妙に協力的だ。

…あとでエイダ特製プリンでも差し入れようかな。

マリー「これ、どこで手に入れたの？」

ナギサ「ああ、それか。それにはシリアルナンバーがないだろう？」

言われてみれば、でしか気づけないけど。

部屋番号とリンクして表記されているはずのナンバーがない。

ナギサ「それの原料をとってきて加工屋にこの形にしてもらって、
それにエミリアの解析したデータを打ち込んだだけだから、
それにナンバーはないんだ」

マリー「…てことは世間に流通している可能性はないって事？」

ナギサ「そうだ。だって私たちのせいで貴女に危害が及んだら
私はワイナールに合わせる顔がないからな」えへん

マリー「いやそこ威張れないことしてるからね？」

変なとこ律儀で助かる…というのは言わずにおいて。

マリー「それならひとまず安心かな…」

その時。

…エイダがエミリアを引きずって帰ってきた。

エイダ「ただいま戻りました」

エミリア「…マリー、エイダって足速いね…」

マリー「お帰りエイダ。…エミリア、私だって勝てるか解らない
　　エイダに徒競走挑むのは無謀だよ…」

エミリア「それを言っておいて欲しかったよ…」

とほほ、といった様子で更にうなだれるエミリア。

マリー「ところでエイダ、合い鍵は？」

エイダ「ここに。…平和的に話し合いですみましたからそんなに
　　心配な顔なさらないでください」

…失敬な。元からこういう顔だっていうのに。

エミリアも悪いことという認識は持ってたみたい。

…まぁ懲りてるようだしもういいかな。

マリー「二人とも、もうやっちゃだめだよ？部屋に入りたいなら
　　私がいるときにして欲しいな」

エミリア「わかったよう…ごめんね…」

ナギサ「すまなかった…」

いやいやそこまでへこまれてもっ

…仕方ない、予定を繰り上げて…！

マリー「エイダ、もう懲りてるみたいだしさ。ここはエイダ特製の
　　スイーツでも食べて水に流したいなぁって」
エイダ「了解ですマスター。少々お待ちを」

マリー「…あ、ちゃんとエイダの分も持ってきてね？」
エイダ「…了解です」

とエイダに頼んだところで二人の方を向く。
少しは元気出すかなぁ…と思ったら。

エミリア「ねぇねぇマリー！スイーツって何かな！？ケーキ！？」
ナギサ「プリンだったらいいのだが！むしろプリンを所望したい！」

…心配はなかったかな。
二人とも星が飛び出んばかりに目を輝かせている。大丈夫だね。

マリー「はいはい落ち着いて落ち着いて。席行こうか」

我先に、と席にすっ飛んでいって無駄にいい姿勢で待つ二人。
現金だなぁ、と軽くぼやいて私も席に向かった。

エイダ「お待たせしました」（前書き）

どうもこんにちは、なんだか最近超がつくほど忙しい現実から逃避するためにキーボードを叩いている作者です。

キャラが安定してきたと思ったら崩壊するっていうよくわからない事態に…！

ご意見、ご感想おまちしてます（ノ＿＜；）

それではどうぞ！

エイダ「お待たせしました」

エイダ「今日はフルーツタルトをご用意しました」
マリー「やった！エイダのタルト好きなんだよね！」

エミリア「フルーツタルト！？そんなのまで作れるの！？」
ナギサ「プリンではないのか…タルトとは何だ？」

面白いほどに反応が分かれる。
ナギサに至っては頭の上に『？』が３つくらい浮かんでいる。

マリー「まぁまぁ食べてみればわかるって！」
エミリア「このレベルのスイーツを家に帰れば毎日食べられる
だなんて羨ましいなマリー…」

ナギサ「そうか、まぁエイダ特製ならば美味しいに違いない！」
エイダ「お褒めに与り光栄ですが皆様のお口に合うか…
何分マスター好みの味付けなもので…」

マリー「エイダそれ私の味覚がおかしいって言ってるの！？
おいしいじゃん甘いの！！」

あはは、と皆から同時に笑われる。
いやいや甘いは正義ですよ！

ナギサ「…あの、早く食べてみたいのだが…」
エイダ「そうですね、それではご賞味ください」

「「「いただきます！」」」

こういう時は3人の声にブレがない。
…いや、エイダの作るお菓子にハズレはないから仕方ない。
…本当にハズレた試しがないから恐ろしいのだが。

ナギサ「！！！」
マリー「ナギサ、どう？初めてのタルトは」

ナギサ「マリー…これは…こんなものが…」
マリー「…え、もしかして美味しくなかった？」オロオロ

ナギサが猛烈な勢いで首を振る。…横に。

ナギサ「こんな美味しいものがあったなんて知らなかったぞ！
あの時カフェで食べたプリンとは何だったのか！！」
エイダ「ふふ、お口に合いましたようで光栄です」

エミリア「……ねぇエイダ、カフェで働きなよ。いや本当に。
このタルトを越える商品あそこには無いって…」

誉められて嬉しいのか、満更でもなさそうな表情をしながら。
それでもエイダは首を横に振った。

エイダ「お褒めのお言葉ありがとうございます。ですが私は、
マスターのためだけに作りたいんです」
マリー「エイダ…」

エミリア「おーおー隅に置けないねぇマリー？」
ナギサ「本当にだ。羨ましいぞマリー」

マリー「いやいやタルトも美味しいけど一番驚いた製作物は他にあるんですよこれが」
エイダ「…何か特別なもの作りましたっけ？」
…製作した本人が忘れているとは。
まぁ毎日の仕事に追われていれば仕方もないかな。
マリー「ほら、クラウチさんとウルスラさんの結婚式をさ、ささやかながらやったじゃないですか？」
エミリア「あー、ＬＷ社員だけで開いたあれね？ささやかといっても社員全員集合だったけどね…」
マリー「ウルスラさんの結婚式なんだから報道陣が来なかっただけささやかでしょ…でね、そのときのあのケーキあるじゃん？」
ナギサ「ああ、３段くらいだったかのウェディングケーキか」
マリー「そうそれ。エイダったらそれを次の日作っちゃってね？」
あれは驚いた。朝目が覚めたら部屋にウェディングケーキが有った、なんて体験は他に聞いたことがない。
エイダ「ああ、そんなこともしましたねぇ…あれはパティシエたるもの誰でも一度は作りたくなるじゃないですか？」
エミリア「いやあんたパートナーマシナリーでしょうよ！？」
ナギサ「…いや、本当にマシナリーなのだろうか…マリーといいエイダといい似たもの同士なのだな…」
あはは、と笑って流す。

ふと、思い出したようにエミリアが言った。

エミリア「あ、そうだナギサ。今日から明日にかけて暇？」
ナギサ「いや、大星霊祭に行こうかと思っているのだが…」

ふっ、とナギサの顔に影が差す。
そういえば浴衣買ってたし楽しみにしてるのかな、と思ってみる。

マリー「…ていうかまだ誘ってなかったんだ…」
エミリア「いや、ナギサ探しても部屋にいなかったんだもん…でさ、大星霊祭にいくならついでに参加してみない？祭の花に」

ナギサの顔が一気に明るくなった。効果音がつくならパァッと。

ナギサ「まさかヤオロズレースか！？」
エミリア「ご名答！一人メンバー集めてるんだけどどう？来ない？」

ナギサ「是非もない！抽選に漏れたから普通にお祭りに行こうとしてただけだからな！」

…抽選が行われるほど倍率が高いのか、と今知った。
カレンさんに会ったらお礼を言おう…！
と、思っていたその時、エイダが申し訳なさそうな目でこっちを見ているのに気がついた。

マリー「どしたのエイダ？何かあった？」
エイダ「…いえ、本当に私がメンバーでいいんでしょうか、と…」

マリー「何だそんなこと…ねぇ二人とも、ヤオロズレースに

エイダも参加したっていいよね？」

エイダは驚いたのか、私の口を塞ぎにかかってくる。
だけどもう言いたいことは言ってしまったので意味がない。
テンパるエイダが1日に2回も見られるなんて…明日何かありそう。
なんて思っていたら。

ナギサ「なぜ悩む？私は一向にかまわないが」
エミリア「そうだよ。種族の制限がされてないんだからいいに
決まってるじゃん？」

…うん。この2人でよかったと心から思う。

マリー「…だそうですがエイダさん、どうします？」
エイダ「そ、その…不束ものですが宜しくお願いします！」

マリー「エイダそれ意味違う！！」
ナギサ「…エイダでも緊張するのだな」

エミリア「まぁなんていうかこの二人はある意味で他のキャストと
一線を画すからねぇ…」
マリー「誉められてない気がする…」

気のせい気のせい、と軽く流される。
…この頃にはもうみんなの皿の上にタルトは残っていなかった。

ナギサ「ああ美味しかった、ごちそうさまエイダ。さて、私はレースの
用意をしてこようと思う。ではまた」
エミリア「私も行かなきゃなぁ…んじゃまたあとで！ナギサはあた

しが

連れていくから先にターミナル行っといて！」

マリー「うん、じゃまたあとでね～」

エイダ「後ほどお会いしましょう」

エイダ「お待たせしました」（後書き）

…タルト食べて終わっちゃった！！

すいません明日また続き上げますんで許してください＞＜；

ナギサ「すまない、待たせてしまったか」（前書き）

うあ、自分で決めた締め切り守れなかった…
遅くなりすいませんでした（￣﹏￣；）

今回でまたニューデイズに向かいます！
それではどうぞ！

ナギサ「すまない、待たせてしまったか」

ーーーＰＰＴシャトル乗り場

マリー「ううん、私たちも今きたとこだから大丈夫」
ナギサ「なら良いのだが…」

実は３０分前からいるなんて言えない。
…まぁ久しぶりのシャトルだから緊張して早く来すぎちゃったんだけどね。

エミリア「恥ずかしながら途中の道で迷っちゃって…」
マリー「…エミリアでも道に迷うんだ！？」

エミリア「私を何だと思ってるのさ！？」
マリー「いやぁ、道さえ忘れることを知らない天才少女かと」

エミリア「…即答で誉められても困るなぁ…」

おお、エミリアの顔が見る見る赤くなって…
…耳の先まで真っ赤になっちゃった。

ナギサ「？…エミリア、顔が赤いぞ？熱でもあるのか？」
マリー「あはは、そこ突っ込んじゃうかぁ…」

エミリア「ね、熱なんかないない！！あ、ほらシャトルの搭乗手続き始まっちゃうからもう行こ！」
マリー「はいはい、じゃあ、出発しよ！」

エイダ「了解です、マスター」
ナギサ「ああ、行こう。ニューデイズへ」

ーーー惑星ニューデイズ・大星霊祭会場付近

ナギサ「なぁマリー。一つ聞きたいことがあるのだが」
マリー「ん？なぁに？」

ナギサ「今は真夜中なんだろう？なぜこんなに人がいるのだ」
マリー「ああ、お祭りだからねぇ…」

エミリア「といっても前夜なのにこの混みようはちょっと異常だと思うねぇ…」
エイダ「３０年に１度のお祭りですし、この太陽系中から観光に来ている人々かと思います」

ナギサ「そういうものなのか…」
エミリア「そうそうお祭りなんて結構そういうもんよ？」

ナギサが合点した、という具合に頷いている横で、
なにやらエイダがキョロキョロしている。

マリー「どしたのエイダ？」

エイダ「…これが…そうなのですね…」

エイダの顔にニタァ、という効果音がふさわしい笑みが浮かぶ。

マリー「エ、エイダさん…？」

エイダ「マスター、私ちょっと味の探求の旅に出てきます！！」

…いきなりそう叫んだエイダの目には星が輝いていた気がする。

エミリアとナギサがびっくりしたようにこっちを向いた。

エイダ「朝食までには宿舎に向かいますので！！それでは！！」

マリー「あ、はい行ってらっしゃ…」

ビシッ！と何故か敬礼を決めたエイダは、尋常じゃないスピードで祭りのために開かれている屋台に向かって走っていった。

エミリア「…あたしは突っ込まないよ？」

ナギサ「では私が突っ込もう。マリー、エイダはどうしたのだ？」

マリー「…エイダの調理上手は元はといえば食いしん坊の進化でさ、食べたこと無いものとか見たこと無いものとかがあると、

たまーに、たまーにだけどね？ああして暴走するんだ…」

ナギサ「成る程…味への飽くなき探求心というわけか…」

マリー「良く言うとそうなるね…本当に朝までに帰ってくるかなぁ」

エミリア「や、あたしはもう屋台回る気力無いから宿に向かいたいなぁ…なんて思ったり」

ナギサ「はは、エミリアは眠そうだしな。じゃあ私も宿屋へと向かおうと思うのだが貴女はどうする？」

マリー「私も行くよ…正直すごい眠くてね…」

ナギサ「何だ何だ二人とも夜更かしには弱いのだな」

エミリア「いや、あたしは単なる寝不足…」

マリー「私は夜更かし苦手なんだけどね…任務上早起きが多いから…」

ナギサ「まだまだだな二人とも、それでは宿舎に向かおうじゃないか」

マリー「ふぁい…」

エミリア「ちょっマリーあくび移さないで…ふぁあ…」

ーーー民宿『雅』

エミリア「…歩いてたら眠気さめちゃった…」

ナギサ「ではお風呂にでも入ってきたらどうだ？私はまだ起きているから大丈夫だ」

エミリア「じゃあお言葉に甘えて…あ、マリー先に入る？…ってあ

れ？

マリーどこ行っちゃったの？」

ナギサ「ん？さっき布団をだすと言って押し入れを開けていたのまでは

見たがそれからは知らないぞ？」

エミリア「…まさか？」

中途半端に閉じられていた押し入れの戸を開けるとそこには…

マリー「……」ｚｚｚ

エミリア「押し入れで布団にくるまって寝るとは…猫か！」

ナギサ「…近くで叫んでも起きないとはよっぽど深い眠りなのだな…」

エミリア「…とりあえず布団出して敷いてそこに寝かせよう？」

ナギサ「そうしよう。せえの、で布団ごと持ち上げられるだろうか？」

エミリア「こいつキャストのくせに軽いから大丈夫だと思う…

せえ、のっ！」

ナギサ「…想像よりは軽いな」

エミリア「でしょ？羨ましいったらありゃしない…じゃあそっと降ろして

…よし！」

マリー「…むぅ…」ｚｚＺ

ナギサ「これでも起きないとは…」

エミリア「たまに本当にマリーが世界を救った英雄だってのを忘れるよ…」

ナギサ「同感だ。…が、いざというときは修羅かと思う戦いぶりだからな」

エミリア「本当に驚くよね、顔と戦闘スタイルのギャップに…」

ナギサ「泣きながら的確に急所をついてくるとは想像していなかったよ…

あれは後ろめたさもあって心が折れそうだった…」

エミリア「そか、ナギサは実際に戦ったんだっけ…ご愁傷様です」

マリー「……んぅ？…すぅ…」ＺＺＺ

ナギサ「…起こしても起きそうにないが一応退散するとしよう」

エミリア「賛成。あ、なら一緒にお風呂入っちゃう？」

ナギサ「背中の流しあいという奴だな、やってみよう」

エミリア「…後ろからだからって殴りかからないでね？」

ナギサ「大丈夫だ、…多分。うん」

エミリア「そこは冗談でも絶対って言ってほしかったなぁ…」

ナギサ「細かいことはいいんだ。では行くとしよう」

エミリア「うん、行こっか。…行ってくるね、マリー」

マリー「……んぅ…」むにゃむにゃ

ーーーその頃、屋台

エイダ「ジャ・ガイモにコルトバターとは新しい…
これは食べるしかありませんね！！」

ナギサ「すまない、待たせてしまったか」（後書き）

そういえばエミリアとマリーってニューデイズから朝帰り→夜にまたニューデイズなんですよねぇ…

はい、ヤオロズ様が終わったらちゃんと他の星のも書きます（汗

マリー「よく寝たぁ…」（前書き）

更新が不定期ですみません＜＞；

ちょっと忙しくなってきたんで更に不定期になるかもですがお許しください↑

ではでは語るのもそこそこに…読んでくださると嬉しいです＜＞；

マリー「よく寝たぁ…」

ーーー民宿『雅』ＡＭ０５：００

マリー「でもまだ眠い……」

そう言って軽く目をこする。

…カメラアイが傷つくだけなのだが、なぜかこすりたくなる。

多分これも『ヒト』らしさなのだろう、と起動したてでまだハッキリしない頭で考えていると声をかけられた。

エミリア「あ、マリー起きた？おっはよー！」

マリー「あ、おはようエミリア…朝から元気だね…」

ナギサ「何だ、貴女は朝に弱いのか？」

マリー「あ、ナギサもおはよう…いや、朝って頭がハッキリしないんだよねぇ…」

ナギサ「本当にキャストなのか本気で疑わしくなってくるな…」

マリー「いやー、私からしたら他のキャストが何であんなに機械的に動けるのかわからないよ…」

エミリア「…チェルシーといいあんたといいリトルウィングって変わり者のキャストぞろいなのかな？」

マリー「いやいやバスクさんがいるでしょう」

ナギサ「…バスクもなかなか変わり者だと思うのだが…」

マリー「そうかな？んー、よくわかんないや」

ごちゃごちゃ考えると頭痛が起きそうなので放置。
…そう、私には頭痛まであるのだけどこれがまたキツい。
特にキツい日差しを直接見たりすると起きるのだが正直設計した博士を恨みたくなるレベルだ。

エミリア「そういえばエイダ帰ってきてないね…どうしたのかな？」
マリー「うん、多分公園かどこかで寝てると思うよ」

ナギサ「随分と即答なのだな…もしやこれが初めてではないのか？」
マリー「あはは…この会社に入る前に何回かね…」

エミリア「そうだ、あんたがウチに来る前のことって知らないかも。
今度聞かせてくんない？」
ナギサ「ああ、それは私も興味があるな。私からもお願いしたい」

マリー「いいけど…面白くないと思うよ？」

大丈夫大丈夫、と二人で頷いてくるので仕方なく。

マリー「そっか、じゃあこの祭が終わって暇ができたらでいい？」
エミリア「うんうん！約束だからね～！」

ナギサ「ああ。楽しみにしているよ」
マリー「う……そんなに意気込まれても…」

そうやって3人で笑い合っていたら突然。
ピピピ、と聞き慣れた音が鳴った。

エミリア「通信？……あたしじゃないなぁ」
ナギサ「私でもないから貴女だろう。私達には構わず出るといい」

マリー「じゃあ失礼して…はい、マリーです」
？？？『すみません気がついたら朝で日が昇ってて！！』

通信回線をオンにした瞬間だった。
…これ以上ないんじゃないかと言うほどの爆音でいきなり謝られた。

エミリア「…エイダか」
ナギサ「…エイダだな」

エイダ『マスター！？大丈夫ですか聞こえてますか届いてますか！？』
マリー「あー…はい。大丈夫です聞こえてます届いてます。エイダ、とりあえず落ち着こうか」

エミリア「…慣れてるね」
ナギサ「…しかも相当だな」

エイダ『はっ、はい…』
マリー「おっけー？よし、エイダは今どこにいるの？」

エイダ『えっと……あれ？……えっと…あ、はい。オウトク山の麓の公園です！』

エミリア「公園だってさ…」
ナギサ「マリーの推測は侮れないな…」

マリー「わかったよ、じゃあ迎えに行くからその公園の特徴教えて？」
エイダ『えっと……中央に等身大のルツ星霊首長の像があります』

エミリア「カレンさんじゃないんだ…」
ナギサ「ルツとはいったい誰なんだ？」

マリー「わかりやすいね…じゃあ今から出て向かうから…そうだね、
　　２、３０分くらい待っててくれる？」
エイダ『わ、わかりました…』

エミリア「エイダがマリーに言いくるめられてる…」
ナギサ「…その言い方は語弊が生じないか？」

マリー「んじゃ、切るからまた後でね～」
エイダ『は、はい…』

ブン、と音を立てて回線を閉じて二人の方を振り返る。

マリー「聞こえてたよね？朝ご飯は屋台で何か、でいいかな？」
エミリア「うん、あたしは構わないよ」

ナギサ「というよりもこの時間では店も開いていないだろうからな」
マリー「それもそうなんだけど…素泊まりにしておいてよかったぁ」

エミリア「あはは、ほんとに…まぁ、行きますか？」
マリー「あ！ちょっと待って！」

ナギサ「ん？どうかしたのか？」
エミリア「何かエイダに伝え忘れでもした？」

マリー「いや、その……お風呂入ってくるね！！」

返事を聞く前に私は準備をすませて部屋に備え付けてあるお風呂に向かっていた。
後ろからため息が聞こえたけど気にしないことにしておく。

結局予定の倍ほどエイダを待たせてしまうことになったのだった。

ーーー1時間後、オウトク山麓の公園

マリー「エイダお待たせー！」
エイダ「マスター！」

エミリア「…は、はやいって…あたし、もう、ダメ…」
ナギサ「まだまだだな、エミリア。もっと体力をつけなければな」

エミリア「傭兵やりながら博士って多分グラール中探してもあたしくらいのもんだよ…」
マリー「あ、ごめんねエミリア走らせちゃって…」

走るのはいいけど二人とも速すぎる、と言われるが仕方ない。
…ナギサのランニングペースに合わせたらエミリアのダッシュになってしまったのだ。

エイダ「お二人もすみません私が帰らなかったばっかりに…」
ナギサ「なに、いい準備運動になったから気にしないでくれ」

エミリア「そーそー。気にしない気にしない……」ふらっ
マリー「エミリア大丈夫!?」

エミリアが大げさに倒れかかってきた。
演技とはわかっていても反射的に受け止める。

エミリア「さ、最後にカロリーメイト…食べたかった…ぐふっ」
マリー「エミリア!?エミリアーーー!!」

これ見よがしに胸を押さえて死んだふりをされたら…
乗るしかないと思った。

ナギサ「…貴女たちはいったい何をしているんだ?」
エミリア「…えへへ」

マリー「いや、乗るしかないかと思って…」
エイダ「…朝から元気ですねぇ」

エミリア「まぁね~」ぐるるる
エイダ「…ぐるるる?」

可愛らしく小首を傾げたエイダがエミリアの方を向く。

エミリア「…走ったからお腹空いたの!」
ナギサ「そうか、なら屋台に行こうじゃないか」

マリー「…私もお腹空いたし食べに行きたいな」
エイダ「あ、それなら向こうの焼きそば屋さんとあっちのフライドポテト屋さんがおすすめですよ!」

エミリア「え~…朝からそれは重くない?」
エイダ「いえ、焼きそばは塩で味付けしてあったのであっさりですし、

ポテトは良い油を使っていたので胃にもたれません
でした」

ナギサ「…なるほど、ただ食べ歩いていたわけではないのか」
マリー「このリサーチ力がエイダの力だからねぇ…」

エミリア「すごいねエイダ…んじゃ、いってみよー！」

「「「おー！」」」

マリー「あ、ヤオロズレース何時からだっけ？」
エイダ「大丈夫ですマスター。あと1時間ありますから」

マリー「よく寝たぁ…」（後書き）

…進み方が致命的に遅いですね＜＜；
細かく描写しようと思ってはいないのですがなぜかこんなに長くなってしまうんです＜＜；

生温い目で見守ってくださると嬉しいです（一＿一；）

エミリア「屋台で食べる物って美味しいよね！」（前書き）

3話連続で投稿してヤオロズレース終わらせたいと思います（汗

ご意見・ご感想等ありましたらお願いしますm（＿＿）m

それではどうぞ！

エミリア「屋台で食べる物って美味しいよね！」

ーーー大星霊祭会場・道の外れ

エミリア「味的にはレストランとかの方が良いんだろうけど
なんでか屋台の物って美味しいよねぇ…」もぐ
もぐ
ナギサ「同感だ。味覚というのは不思議なものだな」むぐむぐ

私達は今、道の外れの石段に腰掛けてエイダおすすめの屋台の
焼きそばとポテトに舌鼓を打っているところだ。
…エイダの言うように、朝には重そうに見えるメニューながら
その実全然重くないという不思議な朝食。

マリー「さすが、エイダの調査に外れはないねぇ…って、あれ？
エイダは食べないの？」もしゃもしゃ
エイダ「いえ、流れで買ってしまったのはいいのですが…」

エミリア「…もしかして私達の前だからって遠慮してる？」ごっくん
ナギサ「む。それはよくないな。私達は気にしないから充分に
食べると良い」もぐもぐ

エイダ「いえ、お言葉は嬉しいのですが…」そわそわ
マリー「…わかった。エイダってば夜中に食べ過ぎてお腹空いて
ないんでしょ」ごっくん

気まずそうな顔をしてエイダが顔を伏せる。
…これは図星だね。

エミリア「へー、エイダも可愛いところあるんだねぇ」もぐもぐ
エイダ「かわっ…!?ど、どこにそんな要素があるですか私に!?」

ナギサ「私にもわかるぞ。こうやって取り乱したりするところだな」
マリー「あはは…エイダ、顔真っ赤だけど大丈夫?」

エイダ「……!!マスターのバカッ!」

ドスッ、という鈍い音とともに。
エイダの渾身のタックルが私の左わき腹にクリティカルヒットした。

マリー「ごふぅ!?……エイダ、それは、キツい……」がくっ

焼きそばをかばって受け身がとれなかった私は、そのまま右方向へと倒れることとなってしまった。

エミリア「ごふぅって叫ぶヒト初めて見たよ…マリー?生きてるー?」
ナギサ「それにしてもタックルとは…その選択に感動すら覚えるよ…」

マリー「いや、感心してないでお願いですから起こしてください…」

このやりとりの間もエイダが私の体の上に乗っている状態で。
…横に器用に起きあがる、なんてこともできないので。
二人の助けを待つしかないのだった。

エミリア「えー?まぁまぁ、これ食べ終わったらで良い?」ずるずる
ナギサ「なんだエミリア、まだ食べ終わってなかったのか?」

エミリア「ってナギサもう食べ終わってんじゃん！速くない！？」
ナギサ「なに、ちゃんと味わっているから問題ないさ」
マリー「あのー…いちゃついてないで起こしてもらえませんか…？」
「「いちゃついてなんかないっ！！」」
いやいや反応するところそこじゃないってば！
…結果、私が起こしてもらえたのはそれから１０分ほどたった後だった…
ーーー２０分後
エイダ「…取り乱してすみませんでした…」
エミリア「いやいや。あたしは全く気にしないよ～？」
ナギサ「そうだ。少なくとも私達の前では堅くならずともいいのだから」
マリー「そうそう…いや、でもさすがに攻撃は抑えようか…」
エイダ「あれはマスターがいけないんです！」
マリー「あ、それはごめん……ってまさかの逆ギレだ！？」
エミリア「あーあーはいはい。夫婦漫才中断してー。そろそろレースの
出発点に向かった方が良いかもよ？時間的に」

夫婦漫才じゃ…！
と、言いかけたところでエイダがまたもや真っ赤になっているのを見てしまい。
否定するに否定できない私は大人しくエミリアの言葉に頷くしかできなかった。

ーーー大星霊祭会場・ヤオロズレース出発点

がやがや

マリー「うわっ！テレビの取材班がいる！」
エミリア「そりゃここまで大きなお祭りだからねぇ…お、何だかあのチームに付いて行くみたいだよ？」

ナギサ「…あのチームはそうそうたる面子だな…」
エイダ「はい…ウェーバー兄妹様方とカレン様とヒューガ様が確認できます」

マリー「優勝候補筆頭かぁ……何か負けたくないね」
エミリア「お？珍しくマリーが燃えてるね！これは優勝は頂いたかな！」

ナギサ「いや、勝負は気が抜けないものだ…焦らず堅実に行こう」
エイダ「ナギサ様に賛成です。…あ、始まるみたいです」

『３０年に１度しか行われない一大イベント！この記念すべきレース
どこのチームが優勝するのでしょうか！？』

スクリーンに大々的に映し出された紫が目に留まる若い女性が大きく声を上げると、会場が更に沸き上がった。

マリー「……ねぇねぇエイダ、あの紫の人って有名なの？」こそこそ
エイダ「グラールチャンネル５のキャスターですよ、マスターも見たこと
くらいはあるんじゃないですか？」こそこそ
…直接会ったことのないヒトの名前は覚えられないんだけどなぁ。
まあ話すこともないだろう、と高をくくっていると。
？？？「ハーイ！グラールチャンネル５、ニュースキャスターの
ハルでーす！お名前と、このレースにかけている気持ちを
伺ってもよろしいですか？」
…はい？
マリー「ええと、それは私に…？」
ハル「はい！…って、貴女はもしかして！？あのリトルウィング社
のマリーさんでしょうか！？」
マイクから拡大された声に一気に会場が静まり返る。
……今日は仕事で来た訳じゃ無いのに！
「うそだろ、マリーって、あの？」

「え、ほんとに!?どこどこ、どこにいるの!?」

「ハルを探せばそこにいるはず!」

マリー「ええ、っと…すいません今日はオフなんで勘弁してくださいぃ!」

と、言い残して。

エイダとエミリアとナギサの手をまとめて引いてその場から脱兎のごとく

逃げ去……った、はずだった。

イーサン「お!マリーじゃねぇか!また会ったな!」

ヒューガ「おや、こんなところで奇遇ですね…これもまた、星霊のお導きでしょうか」

突然現れた二人に進路を塞がれてしまい。

カレン「ああ、来てくれたのか。嬉しいよ」

ルミア「お久しぶりです。また会えて嬉しいです」

遅れてきた二人に左右を塞がれてしまって。

ハル「に、逃げないでくださいマリーさん!せめて一言お言葉を!」

更に後ろも塞がれてしまってからはもう。

マリー「や、やめてください押さないで!待ってやめて落ち着いて

え！！」

人の波に流されるしか私の行き先は残っていなかった。

マリー「さ、散々な目にあったよ…」

ーーーヤオロズレース・スタート地点

マリー「人里離れた小さな村で暮らしたい…そうだ、カーシュ族になろう」

エミリア「ちょいちょい落ち着いてマリー!?」

エイダ「そうですよ。私なんてルミア様に抱き抱えられて放置という…

何ですかこのちょっとした辱めは」

ナギサ「まぁまぁ落ち着け。そろそろレースも始まるし、解放してくれたぶん良心的なファンだったじゃないか」

…まぁ今回は比較的良心的だったけど。

…でも比較的なんです。

マリー「まぁねぇ…連れ去られそうになったときはちょっと剣影だしかけたけど…」

エミリア「ほらほらスクリーン見て。カウントダウン始まるよ?」

スクリーンに目を向けると、今まさにハルが声を張り上げているところ

だった。

『ハーイ!さてさて面白くなって参りましたヤオロズレース!

新旧英雄対決がこの目で見られるかも!?一瞬たりとも目が離せ

ません！
前情報は全くなしのプライベート参加、チームリトルウィングスと！
宇宙警察の意地にかけて負けられない！チームガーディアンズ！
両者が列の最前線で優勝を取りに走り！跳び！時に戦う！
運命のカウントダウン、今スタートです！！』

マリー「…私達ってチームリトルウィングスなんだ…」
エミリア「突っ込みどころそこ！？」

『5！』

イーサン「へっ、負けないぜ！」
カレン「気を抜くなよイーサン！相手が相手だ！」

『4！』

ナギサ「……ふぅ。よし。行ける！」
エイダ「補助・サポートは任せてください！」

『3！』

ヒューガ「ルミアちゃん、頑張りましょうね？」
ルミア「もう、ちゃん付けはやめてくださいってば！」

『2！』

イーサン「マリー、優勝は頂くぜ？」
マリー「いえ、いくらプライベートと言えど負けられません！」

『1！』

ルミア「…ナギサさん、負けませんよ！」
ナギサ「奇遇だな、私も負けるつもりはないんだ！」

『レース、スタート！！』

瞬間、会場が歓声とも怒号とも付かない爆音に包まれる。
スタートは同時、だがしかしすぐに城郭内に突入したために、お互いの
チームの進行状況はわからない。

マリー「エイダ、敵が出たら補助お願い！」
エイダ「了解です！」

そう告げ、全力で走り出す。

…間もなく、敵の1陣が現れた。

エミリア「こいつ、頑丈な奴だ！気をつけて！」
ナギサ「ならばそれでも斬るまでだ！」

バイシャ甲21型。オレンジの多脚マシナリー。
打撃が効きづらいなら…！

マリー「エイダ！チェイン溜めるからディーガ撃って！」
エイダ「言われずとも！」

ギャリィン！と音をたてて実刀の剣影が弾かれる。
同じくナギサも弾かれるが、お互いにこれで体勢を崩すような
レベルではない。
弾かれながらも刀を振り抜き、返す鞘で間接を狙い隙を生み出す。

エイダ「マスター！行きます！」
マリー「おっけー！せぇ…のっ！」

かけ声とともにナギサと同時に後ろに回避する。
逃げるためではなく、巻き込まれないために。
回避したその瞬間、視界に爆弾岩が飛び込んできた。
バイシャ甲21型が動けるようになった瞬間。
動き出したエネミーとテクニックがぶつかり合って爆発した。

エミリア「さっすがー！ほらほら、どんどん行くよ！」
「「「了解！（です！）」」」

チームワークならば向こうには負けない自信がある。
ならば1体1体を確実にしとめても余裕はあるはずだ。

エイダ「敵反応感知しました！奥の左の小部屋です！」
ナギサ「手前は！？」

エイダ「恐らくブラフです！敵が少なすぎます！」
ナギサ「わかった！奥だな！」

そう言ったナギサは奥の部屋に駆けていった。
遅れまいと私達も続く。
乱暴に襖を開け放ち、駆け込んだ先には先ほどとは違うマシナリーが。

エミリア「強い敵だよ！気をつけて！」
マリー「敵数３！小さいのを先に！５チェイン！」

ナギサ「了解！」

ギャランゾとシノワビート。どちらもレリクスの奥から出てきた奴らだ。
１体しかいないギャランゾの横をくぐり抜け、奥のシノワに向かう。
自然と二手に分かれ、前衛と後衛でタッグを組む。

ナギサ「エミリア！行くぞ！」
エミリア「おっけ～！」

マリー「エイダ、援護お願い！」
エイダ「了解です！」

ほぼ同時に私とナギサの剣が金色に光る。
ナギサは空中から相手を何度も切りつける『スピニングブレイク』。

私は低い姿勢から相手を何度も突きつける『クロスハリケーン』。
発動したアーツの動きに身を委ね、武器に仕込まれたリアクターが唸るのを感じる。

マリー「これでっ！」
ナギサ「終りだっ！」

ギャランゾがこちらを振り返る前に。
人型の2体のマシナリーは爆散していた。

ウィィィイン。

脚部のキャタピラで器用にこちらを向いたギャランゾのカメラアイに剣影の刃を突き立てる。

マリー「…ふっ！」

突き立てた刃をそのまま押し込み、ボディを制御している基盤を破壊する。
ギャランゾの姿勢が崩れたのを確認して即、回避行動に移る。
ギャランゾの自爆行動から逃げるためだ。

ナギサ「…私のソードではできないやり方だな」
マリー「まぁ簡単に真似されても困るしね？行こ！」

部屋の出口ではドロップされた鍵をエミリアが回収するところだった。

エミリア「ビンゴ！さすがエイダ！」
エイダ「お褒めいただき光栄です」

部屋のすぐ外にあったフェンスを解除し、次のブロックへと向かう。
…と、城郭の外側を登る階段に出た。

エミリア「見て！あっちにカレンさんたちが！」
ナギサ「本当だ…向こうもやるな、こっちも負けていられないぞ！」

イーサン『はぁ！？信頼しあってるとか別にそんなんじゃねーし』
ヒューガ『そ、そうですよ。僕はただ正直に話しただけで……』

ハル『フフフ。ではそういうことにしておきます』

マリー「ふふ、何か楽しそうだね？」
エイダ「ええ。なんだか皆さん伸び伸びとしていますね」

エミリア「あー、立場とかいっぱいある人たちだからなぁ…」
ナギサ「？私は今も充分楽しいぞ？」

マリー「そうそう、やっぱり楽しまなきゃ！」
エイダ「では楽しみながら向こうに勝って2度おいしいレースにしましょう」

エミリア「それ賛成！うし、ちゃちゃっと行きますかぁ！」
ナギサ「ああ、先に進もう！」

階段を登りきるとそこにあったのは大きめの広場だった。

マリー「あれ、下り階段が閉ざされてる…敵を倒さなきゃって奴か」
エイダ「…とりあえず中央に進みましょう。前包囲に注意してください」

ナギサ「了解だ」
エミリア「おっけー！…ほらお出ましだ！」

マリー「……！？」
エイダ「どうしましたマスター！？」

出てきたモンスターはゼルーモンが2匹に。
…ラッピー・ポレックが2匹。

マリー「無理無理可愛いもん！！斬れないよ！！」

エイダがこけた。
…エイダがこけた！？

ナギサ「では私がラッピーを相手しよう。行くぞエミリア！」
エミリア「はいはいっと…狙い定めて…シュートッ！」

エイダ「で、ではゼルーモンは私達ですね！行きましょう！」
マリー「う、うん…よし！こいつらなら！」

……ラッピーが可愛くて斬れないとかどこの乙女だ私はっ！
少し恥ずかしくてやりきれない感情を目の前の相手に向ける！

マリー「エイダは右の1匹をお願い！」
エイダ「了解です！」

ゼルーモンのターゲットは運良く私だ。思考を切り替える。
攻撃の予備動作を見切る。挙げられたのは右腕、死角は右脇腹！

マリー「はっ！」

かけ声とともにゼルーモンの横を駆け抜ける。剣影は鞘の中。腕の下をくぐり抜ける。軌道修正された腕が髪をかすめていく。ゼルーモンから見て右斜め後ろ、振り返る動作までに2秒。充分だ、行ける。剣影が鞘の中で加速する。迸る閃光はその敵の右腕を切り落としていた。

ォォォォオオッ！！

ゼルーモンが声にならない叫びを上げる。右腕が地に落ち、切断面から緑の血液が噴出する。振り向こうとしたその胴体に剣影を突き刺し、動きを止める。意識が加速するのがわかる。逆手に刺した剣をそのまま上に跳ね上げて主要な血管を寸断させる。叫びすら上げさせない。返す刀で頭頂部から体を2分割する。崩れ落ちる前に後方へ回避。先ほどまで自分のいた場所が緑の血液にまみれる。即座に分解され跡形もなくなるゼルーモン。剣影に付いた血を払い、立ち上がって周りを見ると皆もそれぞれ戦闘を終えるところだった。

マリー「皆、終わった？」
エイダ「戦闘終了、敵影、ゼロ。ミッション完了です」

ナギサ「いやいやまだこれからだろう、エイダ？」
エイダ「すいません、癖で……」

エミリア「どんな癖よ……って！ええ！？」

びよよ～ん、と。
間の抜けた音と共にエミリアが塀の向こうに跳んでいった。

エイダ「カタパルト…！」
マリー「行こう！」

びよ～ん、びよ～ん、と。間の抜けた音と共に私達も跳んでいく。
着いた先ではエミリアがゴナンを砲台で撃ちまくっているところだった。

エミリア「…よっし！これで終わりっと！」

最後に奥の壁に備えてあったセンサーに弾を当てると、
次のカタパルトが現れた。

ナギサ「エミリア、随分と仕事が速いな」
エミリア「やるときゃやりますよ～！さて次々ぃ！」

カタパルトを飛んだ先には。
また砲台。…と。フェンスで進めない奥のエリアにセンサーが2つ。
先ほどと違うのは。
…フェンスのこちら側にエネミーが出現したことだ。

マリー「砲台は任せて！援護お願い！」
「「「了解！」」」

備え付けの砲台に向かい、狙いを定める。
バリアフェンスが邪魔をしてくるが大した障害ではない。
…呼吸を鎮め、トリガーを絞る。
弾は直線で飛んでいき…見事、的に命中した。

マリー「終わったよ！」
ナギサ「こちらも片が付いた。先に進むぞ！」

びよ～ん。
真剣な顔で間の抜けた音を出して跳んでいくナギサに笑いを
こらえながら、次のエリアへと向かう。

ナギサ「マリーか！？援護してくれ！」

到着早々ナギサが戦闘を始めていた。
群がるゼルーモンを斬り裂き、斬り伏せ。突進してくるゴナンの
頭を切り落とし。
…最後にエミリアが到着する前に敵は片づいてしまった。

エミリア「お待たせぇ……ってはっやっ！！さすがだわぁ…」
マリー「ふふ、ちょっとやる気だからね。進もう？」

ギィィ、と音を立てた扉の向こうでは道が合流していて。
…あろうことかチームガーディアンズと鉢合わせしてしまった。

イーサン「よう、マリーじゃねーか。奇遇だな、ここで会うなんて」
マリー「あら、ウェーバーさんじゃないですか。奇遇ですねぇ」

エミリア（怖いよ！何かあの二人ドス黒いオーラ纏ってるよ！）
ナギサ（ああ、私にはわかるぞ…あれは本気の殺気だ！）

ルミア「……行くよ、お兄ちゃん！今はレースに集中！」
エイダ「マスター、行きますよ。優勝するんでしょう？」

カレン（…あっちもこっちも火花だらけだぞ！？）
ヒューガ（まぁまぁ。…血は争えないんですよ…）

マリー「ではご機嫌よう。優勝できると良いですね」
イーサン「サンキュー。じゃあ表彰台で会おうぜ」

あちらは左に、こちらは右に。
通路の奥の曲がり角を曲がった途端…恥ずかしいことに。
腰が抜けた。

マリー「しゅ、修羅場なんて随分経験してないから…」
エイダ「…締まらないマスターですねぇ…」

エミリア「いや、本気でビビっちゃったよあたし…」
ナギサ「…貴女でもあそこまでの殺気を出せるのだな…」

などと軽口をたたいていたら立てるようになり。

マリー「お待たせ！行こう！」

次のエリアへと歩を進めていた。

エイダ「走りましょう！」

このエリアの最初の敵はいろいろと厄介だった。
フィンジェR。サーフボードで空中を滑空するテクニック耐性をもつマシナリー。それが2体。
動きが止まればこちらの物、とばかりに破壊しながら進んでいると。
…奇妙なカーゴが目に入った。

『へいへい、今なら大星霊祭特価でアイテム販売中だよ！』
『安いよ安いよ買っていきな！』
『か、買っていってほしいんだな…』

エミリア「あ、ボル3兄弟だ」
マリー「…誰？エミリア、知り合い？」

エミリア「ううん…てか、マリーもあったこと会ったよね…？」
マリー「？……えへへ…」

エミリア「…まぁあの3兄弟だし…その笑顔に免じて許す！」
ナギサ「…すまない、ちょっと品を見てくる」

エミリア「絶対ぼったくりだからやめときなよ…うん、聞いてないね」

『へいへい眼帯の嬢ちゃん！』
『買いたくなくても買ってってくれよな！』
『か、買わないとひどいんだな！』

次の瞬間。
ナギサがいきなり剣を持ち出したかと思うと、瞬く間にカーゴを破壊し尽くしてしまった。

マリー「ちょちょちょ、ナギサ!?」
ナギサ「…なぜだか無性に腹が立ったんだ…」

エミリア「許す!」
マリー「うわぁ速断だぁ…まぁ、いかにも悪徳っぽいし、いっか」

『俺たちのサクセスがぁぁぁぁ…』

エミリア「無視無視。いこっ!」
マリー「うん!」

そして敵に遭遇しないまましばらく進むと。
…どこか見覚えのあるヒトが2つの転送装置の前に立ちはだかっていた。

マリー「イズマ・ルツ星霊首長?ここで何してるんですか…?」
ルツ「見てわからないかね。クイズの出題だ。」

ナギサ「どこもかしこも人員不足、か…」
エミリア「世知辛いねぇ…」

エイダ「マスター、これが窓際族ってやつですか?」
マリー「しっ、あんまり大きな声で言っちゃいけないよ?」

ルツ「……コホン。それでは第1回大星霊祭クイーズ！」
マリー「全力でスルーされた！？」

ルツ『今、人気急上昇中のルミア。その幼い頃の髪型は！？』

マリー「知らないよ！！」
エミリア「ていうかルミアの人気急上昇中ってどこで！？」

ナギサ「…それを知っているこの人は何者なんだ…？」
エイダ「まぁまぁ三者三様のツッコミですね…」

ルツ「1、三つ編み。2、ツインテール。さあどっちだ！」
エイダ「ツインテール」キリッ

マリー「早いねエイダ！？その心は？」
エイダ「いえ、ツインテにしておけば存外何とかなるかなぁ、と」

エミリア「適当だ！？」
ナギサ「しかし他に案もないのだからそれで行こう」

マリー「じゃぁ…2で」
ルツ「では正解を送装置の奥で確かめると良い！」

シュインッ

『おめでとうございます！見事正解です！！！』

ナギサ「…グラール教団とは恐ろしいな…」
エイダ「今度ルミア様に頼んでツインテールにしてみてもらいましょう」

マリー「エイダすごーい！やったね！」
エミリア「あ、向こうにまた下り階段があるよ！行ってみよ！」

ナギサ「…嫌な予感しかしないのだが…」
エイダ「奇遇ですね、私もです…」

ナギサとエイダの予想は当たっていたのだろう。
…階段の下に見覚えのある烏帽子頭が見えてきた。

マリー「……あれ、イズマ・ルツ星霊首長…？」
ルツ「第二回大星霊祭クイーーーーズ！！」

エミリア「清々しいまでのシカトだ！？」
ナギサ「彼の精神力は驚嘆に値するな…」

マリー「一瞬でここまでくるとは…」
エイダ「マスター、ツッコんでは負けです」

ルツ『ユートが好きなものと言えば？』

マリー「プリンかな」
エイダ「プリンですね」
ナギサ「プリンだろう」
エミリア「むしろプリン以外にあるの？」

ルツ「…1、ウパクラダ。2、プリン。さあどっちだ！」

マリー「よく心折れませんね！？」

エイダ「マスター、相手にしていると先を越されてしまいますよ？」
エミリア「2で。ほらほら転送装置行くよ」

マリー「ふ、二人とも非情だね…」
ナギサ「まぁ勝負の最中なのだから仕方もないだろう。私たちも向かおう」

シュインッ

マリー「…あれ？ここは…？」
ナギサ「円形の舞台…なるほど、ここが最終エリアか」

その時。
一陣の風と共に何かが姿を現した。

？？？『妾は荒ぶる命と静寂なる魂を司る者なり』

エミリア「これが……ヤオロズ！」
ヤオロズ「妾は試練を与える。そなたらの心の奥に眠る絆の力を示せ」

エイダ「絆の力、とは…？」
マリー「エイダ、始まるよ！」

面を被った白い大狐…という表現が一番しっくりくるだろうか。
背中に矢倉を背負い、足甲とでも言うのだろうか、四本の足全てにも

面が備え付けられている。

ヤオロズ「光っている面のみを壊せ。それ以外に触れたら
　　罰が待っておるぞ」
ナギサ「面白い。制限付きとは楽しませてくれる！」

ヤオロズ「威勢のいいことだ。せいぜい妾を楽しませておくれ」

言い切ると同時に、ヤオロズが空に一声吠えた。
戦闘開始の合図らしい。

マリー「皆…全力で行って良いからね！『フリーオーダー』！」
ナギサ「了解した！」

エミリア「援護は任せて！」
エイダ「私は属性の解析に入ります！」

各自が各自の動きを読んで連携する、それがフリーオーダー。
慣れない内は隙が生まれたりしたが、今はそんなミスはしない。
まずは近距離戦者が距離を詰める。
光ってる足…これか！

マリー「ナギサ！右前足！」
ナギサ「ああ！」

これだけ動いて外れない面だ。強度も高いに決まってる。
面の目の部分、僅かな隙間に剣影を差し込み、捻る。
ピシッ、と音を立てて面にひびが入る。

ナギサ「…！マリー！回避だ！」

マリー「!?わかった!」

ナギサの警告を受け、すぐさま回避行動をとる。
標的の面に触られて黙っているような相手ではなかったらしい。
ヤオロズは一瞬姿勢を低くしたかと思うと、前方に向かって突進した。

マリー「……!!」

軽く掠っただけで吹き飛ばされそうになる。
直撃していたら軽傷ではすまなかっただろう。

ナギサ「はぁぁぁぁっ!!」

突進の後の硬直を狙ったのだろう、ナギサが一気に距離を詰める。
と、その時。後ろから神獣を観察していたエイダから報告が入る。

エイダ「マスター!解析完了しました!神獣ヤオロズの属性は『炎』です!」

マリー「ありがとう!作戦はそのままで!」

エイダの報告を受け、武器を無属性の剣影から持ち変える。
私の氷属性の武器は双魔剣と呼ばれる『デモンズディザスター』。
これならいける!

マリー「せい……やぁっ!」

低い姿勢から駆け出し、距離を詰める。

ナギサ「マリー行くぞ!」

マリー「その気で来たよ！」

軽口を叩きながら各々フォトンアーツを発動させる。
ナギサは変わらずスピニングブレイク。
私は武器に合わせてアーツを切り替えていた。
『ブレードデストラクション』。刃を自身の周囲に回転させ、敵を連続で切り刻む大技だ。
怒濤の勢いで発動される技の前に、お面は砕け散っていった。

ヤオロズ「…お見事！」

と叫んだ神獣は、横向きに体を倒してきた。

エミリア「マリーそこ危ない！避けて！」

その声に反射して、背中の矢倉に潰されないように緊急回避をする。

マリー「セーフ！…あ！矢倉のお面が光ってる！」
ナギサ「好機だ！」

エイダ「私もいきます！」
エミリア「総攻撃ぃ！！」

ナギサのスピニングブレイクにエミリアのライジングストライク。
私のブレードデストラクションとエイダの3連ディーガ。
決して仲間には攻撃を当てず、それでいて相手に蓄積されるダメージ。
各自の本気の総攻撃の前に、とうとう面にヒビが入った。

ヤオロズ「やるのう…だがまだこれからじゃ！」

そういって起き上がり空高く吠えたヤオロズの背中の矢倉に…人影。
ナギサが、乗っていた。

ナギサ「わざわざ手の届かない矢倉に配置するなんて、この大事そうな
　　お面を破壊すると、どうなるのだろうな!?」
ヤオロズ「!!!お主いつの間に…!!」

吹き荒れる青の光。ナギサのインフィニティブラストだ。
その直後、パリィン、と。
綺麗な音を立てて矢倉の面が散っていった。
その直後。
神獣の体が青白い光に包まれて霧散した。

ヤオロズ「まさか矢倉の面が壊されるとはのう…天晴れじゃ!
　　妾の試練に打ち勝ちし者たちよ。そなたらに妾の力
　　『神威』を授けよう」

ナギサ「これは…ハンドガンか?」

ヤオロズ「妾の魂は常にそなたらと共にある。この後も迷わず進め」

その言葉を最後に、会場を一陣の突風が包んだ。
立っているのも精一杯の風に、思わず目を瞑る。
…しばらくして風が収まった後、会場に残された青白い光も消えていた。

……ウワァァァアアア！！！

ハル「この歓声が聞こえるでしょうか！かくも鮮やかな手つきで試練に
　　打ち勝ったのは、チームリトルウィングスでした！！」
エミリア「ハルさん！？…とゆーことは…」

イーサン「あっちゃー。先越されちまったかぁ。すっげーなあんたら」
ヒューガ「ん？なんですかそのハンドガンは…『神砲ミコト』！？
　　神獣ヤオロズの力の宿った伝説の武器じゃないですか！！」

さすがはＧＲＭ社の代表取締役。
この武器に関しては思うところがあるみたい。

ハル「なんと、ここでビッグスクープです！優勝チームにはヤオロズの
　　力の宿った武器が贈られていました！」
エミリア「あ、あたしなんもしてないけどね…」

マリー「それをいうなら私もだよ…」
エイダ「右に同じです」

ナギサ「なんだ、もう少し間を持たせた方が良かったか？」
カレン「な、なんなんだこの余裕さは…」

カレンさんが呆然とした目でナギサを見つめる。

エイダ「…そういえば絆の力ってなんだったんでしょう？」
マリー「あれじゃない？総攻撃～！とかフリーオーダーとか？」
エミリア「な、なんだかヤオロズが哀れになってきたね…」
ハル「こほん、…さて！大注目のヤオロズレースもこれで閉幕です！
大星霊祭会場からお送りしてきた特番もこれで終わりとなります！
ここまでリポートしてきたのはグラールチャンネル５、
ニュースキャスターの、ハルでした！またお会いしましょう！」
マリー「完全に締めにかかってるよ！？」
ナギサ「いいんじゃないか？別に」
エミリア「淡泊だねぇナギサ…」
エイダ「まぁ…お祭りですし最後はあっけないものですよ？」
ルミア「こ、これが勝者の余裕って奴ですか…」
イーサン「まぁ、負けは負けだしな。仕方ねぇか～」
マリー「あ、そうだエイダ、この後……あれ？」
急に、エイダの姿が見えなくなった。
小さいからとはいえ私がエイダを見つけられないわけがない。
…目を凝らして探すと、ヒューガさんの後ろにその姿を確認できた。
ヒューガ「さてさて…そのハンドガンを詳しく調べたいところですが…
罰が当たっても嫌なのでやめておきましょうか」

カレン「そうしておけ。なんなら３０年後にまた参加すればいいじゃないか」

ヒューガ「さすがの僕でも戦闘の最前線は隠居してますよ…」
カレン「はは、冗談を言え。お前なら３０年後でも…ん？何だイーサン？」

カレンさんの注意がヒューガさんから離れた時を見計らったかのように。
エイダがヒューガさんに接近した。

エイダ「ＧＲＭ社代表取締役のヒューガ・ライト様でよろしいでしょうか？」
ヒューガ「はい、ヒューガは僕ですが…って何だ、エイダじゃないですか。
一体どうしたんですか、畏まっちゃって」

エイダ「…記憶しておいて頂けたとは光栄です。内密なお話があるのですが」
ヒューガ「……表情から察するに、あまり良いお話ではなさそうですね？
ここではなんですし、場所を移しましょうか」

エイダ「お心遣いに感謝します。ではこちらへ」

そういった二人は、談笑しているふりをしながら森の中へと入っていった。
…エイダのあんなに真剣で、困惑した目は初めて見た。

マリー「エイダ…？」

誰ともしれず呟いた言葉は宙に消え。
気づいたら私は木陰に隠れながら二人の後を付けていた。

エイダ「走りましょう！」（後書き）

長い上にヤオロズ戦が想像以上に短くて笑えない…

ハルの突撃リポートをプレイしながら書いていたんですがなんせヤオロズさんを瞬殺してしまいまして…（。ε。;）

ｇｄｇｄｄｒｄｒですみません（ー＿ー;）

何かありましたらご意見等くださると泣いて喜びます＜＞;

※９／１４あまりに短いかな、と思ったので加筆修正しました（汗

よければ読んでいただけると嬉しいです＞＜

マリー「…エイダ…？」こそこそ（前書き）

おはようございます戦闘が上手に描写できない作者です↑

何故かシリアスになりそうな空気…

それではどうぞ！

マリー「…エイダ…？」こそこそ

ーーー大星霊祭会場の外れ・深い森の中

もうすでに森の中を結構分け行ってきた。
祭りの音楽は遠く、ささやき声でも会話できそうな静寂。
その中で、１０メートルほど前を歩く２人は歩みを止めた。

ヒューガ「…さて、この辺で良いでしょうか？」
エイダ「はい…ご足労いただきありがとうございます」

ヒューガ「いえいえお礼には及びませんよ？…さて、そろそろ
　　本題に入りましょうか。一体、話とは何です？」
エイダ「もうお気づきかとは思いますが」

エイダの表情は暗く、とても入っていける空気ではなかった。

ヒューガ「ですがそれも推測に過ぎませんからね。やはり直に
　　本当のことを聞くに限ります」
エイダ「お優しいように見えて厳しいのですね…ええ、話とは
　　私たち…私とマスターの。生産プロジェクトについて
　　です。掘り下げて言えば、なぜ私はマシナリーとして
　　生産されたのか？どうして、私はキャストであっては
　　いけなかったのですか？それを伺いたく思いまして」

マリー（エイダ…）

エイダが自分の立場をそんな風に思っていたなんて知らなかった。

…いや、気づかない振りをしてきた。
エイダに甘えて。エイダがいることを当たり前だと思って。
この話を聞くことが、何かの罰のように思えて仕方なかった。

エイダ「お答えいただけないのですか？全てのキャストは貴方の社で
社を通してのみ生産されるのに。そして私も貴方の
生産されたというのに。なぜ？」

何故、の後はさっきの会話と合わせると容易に想像がつく。
何故、私はキャストではないのか、だ。

ヒューガ「…いえ。聞かれようによってははぐらかして帰ろうと
思っていたのですが。そこまで直球に聞かれてはもう
答えるしかないじゃないですか。いいでしょう、私の
知る限り全てをお答えしましょう」

エイダ「お願いします」

エイダの目に希望と、失望が混ざる。

ヒューガ「少し長くなりますが…いえ、貴女は気にしませんね。
……貴女がキャストでない理由ですが。これに明確な
目的はありません。強いて言うならば、ですが…これ
は残酷な結果となるでしょう。それでも聞きますか？」

エイダ「ええ。続けてください」

ヒューガ「…いえ、まずは貴女の知識を伺いましょう。貴女は、貴女方についてどこまで知っていますか？」

ヒューガさんの目に明らかに暗い色が宿る。

エイダ「私とマスターの対生産まで。私がマスターの足りていない部分を埋め、私にできないことをマスターがするという所と、私達の生産目的が、『完全に人のようなキャスト』を作るということまで。」

そうだ。そこまでは思考の根幹にインプットされている。

エイダが知りたいのは、多分、その先。

ヒューガ「ええ、そこまでは基礎知識として入っていたはずです。それではそこから先をお教えしましょう。…貴女方は、本当はキャストとしてを作られることが目的とされてはいないんです。本質はその先、『ヒトの手で完全に新たなヒトを生み出す』ということ。ですから貴女方の相互補助の関係は最初から一人の『ヒト』を作り出すためのものなのです。そして各々に自我を持たれてしまって、別行動をされては困るということから片方がキ

ヤスト、
もう片方をパートナーマシナリーとして生み出
すことに
されました。…理解できますか？貴女がマシナ
リー区分
なのは、片割れたるマリーさんの方にキャスト
の椅子が
回っていったからなんです。特別な意味はあり
ません。
貴女がエイダで、彼女がマリーであることに意
味はない
のです。ただ事実としてあるのは、彼女が『キ
ャスト』
だから貴女が『マシナリー』なんです。もし仮
に貴女が
キャストであったなら、今はマリーさんがその
体で貴女
のパートナーマシナリーをしているはずなので
す。残酷
なようですが、全ては運がなかったと。それだ
けです」

…全身から血の気が引くのがわかる。
つまりは、私がキャストだからエイダがキャストになれなかった？
足に力が入らなくなる。
へなへな、と。音を立てる激しさすらなく。
私はその場に座り込んでしまった。
立とうとしても立てない。視界がぼんやり滲んでくる。
気がつくと私は、嗚咽すらあげずにただただ涙を流していた。

エイダ「…その計画は誰の推進で行われたものですか？」
ヒューガ「…恨んでも仕方がありませんよ。この計画を進めた博士はＳＥＥＤ事変でこの世を去っていますから」

エイダ「…そうですか。最後に一つ、聞かせてください」
ヒューガ「どうぞ」

考えるような間を置いて、エイダは静かに言った。

エイダ「その計画は続いていますか？」

返答は早かった。

ヒューガ「まさか。貴女方のように苦悶に思うペアがとても多くいましたから。博士の死後計画は凍結され、資料も全て廃棄されました」

エイダ「ありがとうございます。それだけで充分です。…わざわざ私にお時間を割いてくださったのに申し訳ありませんでした」
ヒューガ「いえ、私に謝られる資格はありませんよ。…では、そろそろ皆の所に戻ります」

エイダ「ありがとう…ございました」
ヒューガ「いえいえ。…それでは」

ヒューガさんは私の側を通らずに帰っていった。

エイダは、お辞儀をした姿勢のまま。
顔が見えないから、何を考えているのかわからないけれど。
…多分、私を恨むだろうな、ということだけは理解できた。
私がキャストでなければエイダはキャストになれたのに。
普通に喋り、笑い、私の世話なんてする事もなかったのに。
…目からこぼれる雫を止める方法はわからない。
辛うじて顔を上げると。エイダはいつの間にかいなくなっていた。

マリー「…帰、りたく、ない、なぁ…っ」

一言呟いただけで嗚咽が止まらなくなる。
隠れていた木に背を預け。
足を抱いて座り。
ただただ地面にこぼれる雫を眺めていたら。
…不意に、目の前にハンカチが差し出された。

マリー「…ひっく…だ、だれ…ですか…？」

まともに機能しない喉を、必死で震わせる。
顔を上げて差出人を見ようとするも、顔が上がらない。
だから仕方なく。
差し出されたハンカチを受け取ることもできないまま。
下を向いていた。

？？？「…泣き顔は似合いませんよ、私は貴女の笑ってる顔が
一番好きですから…マスター」

マリー「！！！」

不意にかけられたいつも聞いている声、呼ばれた名前。
体中に電撃が走った。

マリー「エ、イダ…？なん、で……」
エイダ「何で、とは…？ほら、とりあえず涙拭いてください」
エイダがすとん、と目の前にしゃがみ。
私の顔をごしごしと拭き始めた。
マリー「…！？…う……ぷはぁっ！」
エイダ「さてマスター。何で、はこっちの台詞なんですが…
マスターの言う何で、とは何ですか？」
不思議なことに、エイダの笑い顔を見ると。
…感情が落ち着いて。
マリー「……なん、で…あの話、聞いたのに…まだ、私に。
…そんなに、優しく、して、くれるの、かな、って
…」
言ってる途中から涙が溢れてきて。
最後の方は消え入るような声になっていた。
エイダ「はぁ……マスター？私はキャストになりたかった訳じゃ
ないんですからほら涙拭いてくださいって」ごしごし
え？
いやいやおかしい。
エイダはキャストになりたかったんじゃないの？
その私の心の声を見透かしたかのように、彼女は続けた。
エイダ「いいえ、私は1度もマスターを差し置いてまでキャストに

なりたいなんて言ってませんよ。私はただ、今回のように特別な理由は無くても、ずっとマスターと一緒にいたいと思っただけですから…マスターが私の立場になっては意味がないんです。私は、ただマスターと対等にありたかっただけ…本当に、ただそれだけなんです」

エイダの言葉はとても優しくて。
だからこそ嘘ではないと確信できて。
…勘違いでここまで泣いた自分が可笑しくて。
自然と、泣き笑いのような表情になってしまった。

マリー「ぐすっ……エイダぁ～……」
エイダ「よしよし…」

この会社に入る前はよくこうして抱きついてたのに。
久しぶりに借りたエイダの胸は暖かくて。

エイダ「…それで、その…ものは相談なんですが…」
マリー「ん？…いいよ、何でも言ってみて？」

もう涙は止まっていた。

エイダ「えと、その…今まで通り家事とかしますので、できるだけたくさん帰ってきてくれると嬉しいなぁ…とか思ったり、
なんかしてみたり、ですね…」

珍しく私より高いところにあるエイダの顔を見て。
自然に口角の上がった顔で。

マリー「うん！」

考える前に返事は決まっていた。

エイダ「あ、ありがとうございます…さ、さて！そろそろ私たちも
　　皆さんの方に帰らないと心配されてますよきっと！」
マリー「…もうちょっとこうしてたい…」

久しぶりにくっついたからか離れたくなくて。
気づけば駄々をこねていた。

エイダ「…あ、後で家でまたこうしてあげますから！」
マリー「…絶対だからね！」

たまにはこれくらい許されるだろう、と。

エイダ「ほらほら立ってください行きますよ！」
マリー「うん！」

私達は来た方に向かって歩きだした。

マリー「…エイダ…？」こそこそ（後書き）

……いやはー、設定作っておいたは良いんですが。
見事にだしちゃいましたねぇ…

キャラの走るのに任せるとこうなってしまって…はい、反省してます（泣

ご意見・ご質問等ありましたらよろしくおねがいしますm（＿＿）m

エミリア「二人ともどこ行ったんだろう？」（前書き）

こんにちは、この土日に就職試験があって燃え尽きてる作者です…

相変わらずの乱文長文ですみませんがお付き合いいただけると嬉しいです＜＞；

それではどうぞ！

エミリア「二人ともどこ行ったんだろう？」

ーーー大星霊祭会場

エミリア「ナギサ、二人がどこ行ったのか聞いてない？」
ナギサ「いや、私も聞いてないぞ？…エミリアこそ、本当に
表彰される段階になるまで彼女らがいなかったこと
に気が付かなかったのか？」

エミリア「それは面目ない…けどさ、二人でどこかにいなく
なるってどうしちゃったんだろうね？」
ナギサ「さぁ…まぁ、ここで待っていれば帰ってくるか、
最悪連絡くらいはあるだろうからここで待とう」

エミリア「そうだねぇ…」

二人が地面に座ろうとしたその時。
すぐ近くの茂みの中から長身細身の男性が出てきた。

ナギサ「何奴！……は？」

敵襲と思ったのか、ナギサが腰を落としてソードを構える。

ヒューガ「いたた…さすがに木の枝が引っかかるのは痛いな…
おや、エミリアさんにナギサさんではないですか。
どうしたんです？こんな時間まで会場に残って」
エミリア「…ヒューガさん！？」

茂みの中から木の葉まみれで出てきたのは、何とグラール太陽系屈指の大企業の社長だった。

ナギサ「…貴方こそそんなところで何をしていたんだ?」
ヒューガ「やだなぁナギサさん。そんなに睨まないでください…いや、ちょっと人生…いやマシナリー生相談に乗ってあげていたんですよ」

エミリア「マシナリー…ってことはエイダ、ですか?」
ヒューガ「ご名答!…このことは内緒にしておいてくださいね?」

ナギサ「わざわざ口止めとは…何か重要なことか?」
ヒューガ「ちょ、ちょっとナギサさん?とりあえず武器をしまってもらえますか…どうでしょう、重要かどうか、とは僕の物差しで測ることではありませんから」

渋々、といった表情でナギサが構えを解き、武器を格納する。

エミリア「…その口振りじゃ重要って言ってるようなもんじゃ…」
ヒューガ「いえ、僕からしたらそうとは限りませんが。…ですが、価値観というものはヒトそれぞれということですよ」

ナギサ「エミリア、つまりどういうことだ?」
エミリア「ええっと…首突っ込むな、ってことよ」

ナギサ「向こうから言ってくるまで待て、か…必ずしも言ってくる
とは限らないんだがな…」
ヒューガ「それも含めて彼女達に委ねてほしいんですよ？何せ彼女達
のこれからに関わる可能性すらある問題でした
からね…」

ナギサ「その問題の解決方法は？」
ヒューガ「ありません。…とても歯がゆいことですが」

ナギサ「わかった。では待とう。貴方はついさっきまで二人とともに
いたんだろう？どこにいるか教えてもらえないだろ
うか？」
ヒューガ「いえ、僕はエイダさんとしか話してませんよ？…マリー
さん
があそこまで隠れるのが下手だとは思いません
でしたから、
そういうことにしておいてください。位置は…
いえ、必要は
なさそうですね」

ヒューガがそう言った時、またも近くの茂みがガサガサと鳴った。

ヒューガ「では脇役は消えるとしましょう。それでは、またどこか
で」
エミリア「え、ちょっと待っ…」

エミリアがそう言い終わるより前に。
茂みから見覚えのあるコンビが出てきて。
…そのままその場に倒れ込んだ。

マリー「や、やぁっと出れたぁ…」ぜぇぜぇ
エイダ「ま、まさかマップが表示されないなんて…」はぁはぁ

エミリア「…まぁ、いっか。…二人とも！心配したんだからね！？」
エイダ「す、すみません…」はぁはぁ

ナギサ「そうだ。席を外す時は一言伝えろと教えてくれたのは他ならぬ
　　貴女じゃないか」
マリー「ご、ごめんなさい…」ぜぇぜぇ

エミリア「何してたのかは、聞かないであげる…から、
　　後で一食奢ること！」
マリー「は、はいっ！」

ナギサ「あ、私はデザートにエイダの作ったものが食べたいのだが」
エイダ「わかりました、ご要望がありましたらそれを作ります！」

エミリア「じゃ、帰ろうか！…っていっても今日は宿に、だけどね？」

エイダ「もうこんな時間ですか…」（前書き）

ここ更新がこんなにも遅くなってしまいすいません＞＜；
週末ごとに就職試験があったりだとかで忙しくて（泣

久々の更新だというのに今回は物語をつなげる接続詞的な回ですので短めです（汗
いやでも続けて投稿するので堪忍してください（。ε。；）

それではどうぞ！

エイダ「もうこんな時間ですか…」

ーーー午前2時、民宿『雅』

エイダ「お湯頂きました…って、マスターはもう夢の中ですか」
エミリア「あ、お帰りエイダ…うん、布団も敷かないで寝るもんだからあたしとナギサで布団出して運んじゃった」

エイダ「すいません、ありがとうございました」
ナギサ「何、礼を言われるほどのことでもないさ」

エミリア「ナギサかっこいー、その台詞言ってみたいなぁ」
ナギサ「…誉めても何も出ないぞ？」

わーわーきゃいきゃい、年相応にはしゃぐ二人。
今笑っているこの二人には共通する点が一つある。
それは年齢にそぐわない、悲しい過去を持っているということ。
二人とも、大人たちに道具のように扱われていたという。
この二人なら…あるいは。
マスターの、『マリー』の過去も受け入れてくれるかもしれない。

エイダ「…お話中すいません、お二人に話しておきたいことが」

言ってしまった、もう言うしかない。

もしかしたら予想は外れるかもしれない。
けれど。

エミリア「もーナギサったら！…って、ん？」
ナギサ「エイダが話に割り込んで来てまで伝えたいことか。
…わかった、聞こう」

エミリア「…まじめな話っぽいね、うん、あたしも聞くよ」
エイダ「お二人ともありがとうございます。お二人は、先程の
レース中にマスターの過去をマスター自身に聞きたい、と
おっしゃってましたね？」

エミリア「ああ、言ったねぇそんなこと…もしかして、結構
マズかった？」
エイダ「いえ…いや、或いはそうかもしれません。私はマスターとずっと一緒に過ごしてきました。ですから申し上げます。
…彼女もまた、貴女方と同じく辛い過去を持っています。
彼女が語りたがらないこともあるかと思います。ですから
その時は急かさず、彼女が話し出すのを待っていて欲しい
のです。この通り、お願いいたします」

そう言って私は頭を下げる。
…彼女の辛い思い出は同時にまた、私の辛い思い出でもあるから。

エミリア「ちょちょっ、顔上げてよエイダ！」
ナギサ「そうだ、私達はそこまでマリーのことを解っていないわけではないぞ？」

エイダ「…ありがとう、ございます」
ナギサ「約束は守る。だから今日はもう休むといい。エイダだって疲れているだろう？」

エミリア「わ、もうこんな時間…あたしも寝るからさ、エイダ？安心してよ。あたしだって約束守るからさ」

二人は私を気遣ってくれているのだろうか？
…気遣われるほど酷い表情をしていたのだろうか。
ともあれ、この言葉には甘えておこう。

エイダ「…すいません、お先に休ませていただきます。お休みなさいませ」

そう言い、手近にあった布団にもそもそと潜り込む。
…私の意識はそこでフェードアウトした。

エミリア「あたしも、寝るかな～…ナギサは起きてるの？」
ナギサ「ああ、ちょっと月を見ようかと。今日は外が明るいから
満月かと思ってな」
エミリア「そっか。んじゃま、お休み～」
ナギサ「ああ、お休みエミリア。いい夢を」

ーーー民宿『雅』、前庭

ナギサ「なんだ、まだ満月じゃなかったか…でも9分月位か？
それにしてもエイダは気付いているだろうか。いや、
気付いてないだろうな…エイダ自身がマリーのことを
マスターではなく『彼女』と呼んでいたことなんて。
何の気無しに言ったのだろうな…それにしてもまさか
エイダが私たち相手にあそこまで緊張して話すとは。
これは生半可な気持ちで聞いたら痛い目を見そうだ…
…これは独り言なのだろうな、端から見たら怪しい…
ワイナールさえいれば独り言ではなかったのに奴め…
…ううう、さすがに冷えるな。部屋に戻って布団にでも
くるまって暖まるとしよう」

ーーー翌日、民宿『雅』

マリー「ふぁぁ…おはよう…」
エイダ「おはようございますマスター。朝食の準備ができているようです
　　ので、お召し上がりになってください」
ナギサ「一番の寝坊助はマリーだったか。私はてっきりエミリアかと
　　思っていたのだが」
エミリア「いやいやナギサあんたあたしより後に起きたでしょう！」
ナギサ「細かいことはいいんだ。それよりほら、最後の一人が起きた
　　だから朝ご飯を頂こうじゃないか」
マリー「あれ、もしかして待たせてた？…ごめんね？」
エイダ「いえ、朝食を準備したのは私ではなく宿の方ですし問題ありません。
　　それよりほら、ご飯が冷めちゃいますよ？」
マリー「ああはい今行きます…お待たせっと」
エミリア「じゃ、いい？いっただっきまーす！」
ナギサ「頂きます。…うん、美味しいな」
エイダ「ええ、栄養もとれて塩分控えめ。和食ですか…私もまだまだですね、
　　練習し直します」
マリー「…朝からお米は重いのって私だけ…？」

ナギサ「？…ああ、貴女は朝に弱いのか」
エミリア「ちゃんと食べなよマリー？これ食べたら出発だかんね？」
マリー「あ、そうか今日帰るんだっけ…うん、食べる食べますから
エイダさん
　そんなにこっちを凝視しないでください…」
エイダ「…この量がいけるならいつもの朝食をもう少し増やしても
…」
マリー「ちょ、それは勘弁してください…」
ナギサ「…ごちそうさまでした。ほら、早く食べないと
　シャトルが出てしまうぞ？」
マリー「が、がんばります…」

マリー「…聞いて面白いものでもないよ？」（前書き）

ここからマリーの過去語りが入ります、正直どうしてこうなった…
さてさて作者も制御できてないこのキャラたち、終着点はあるんですかねぇ…？

それではどうぞ！

マリー「…聞いて面白いものでもないよ？」

ーーークラッド6、マリーのマイルーム

マリー「帰ってきたねぇ…懐かしの我が家に！」
エイダ「そんなこと言って正味3日も離れてないじゃない
ですか…」

エミリア「あー、疲れた～！」
ナギサ「全くだ。だが、楽しかったな」

マリー「ん？…あれ～？…お二方、どうして私の部屋にいるん
でしょう…？」
エイダ「私はもう慣れました」

エミリア「だってあれじゃん、あれあれ」
ナギサ「そう、あれだ。…エミリア、あれって何だ？」

マリー「漫才かっ！」
エミリア「おお、素早いツッコミありがとうマリー！
…いやほら、忘れないうちに聞いとこうと思っ
て？」

エイダ「…ああ、そういうことですか。私はお茶の準備をしてきます」
ナギサ「ありがとうエイダ。…貴女のここに至るまでの経緯を知りたい
と思ってな。正直なぜ貴女ほどの腕の者がガーディ

アンズでも
なく同盟軍でもなくこの小さな民間軍事会社にいる
んだ？」

マリー「それは、海底レリクスでクラウチさんに誘われて…」
エミリア「ううん、そこよりもっと前。あの調査にガーディアンズは
不参加だったし何よりあんたはフリーだった。
…あたし達の
過去をあんたが知ってるように、私達にもあん
たの過去を
教えて欲しいの。勿論、言いたくなかったら言
わなくていい
んだけどさ」

ナギサ「そういうことなんだ。…まぁ、正直興味本位だから受け流
して
くれて全くかまわないのだが」

…私が返答に困っていると、エイダがお茶を持ってきた。
それもきちんと４人分。
これは…うん。

マリー「…二人になら、話す、よ。けど！…他の人には…言わない、
で？」

勿論だ、と異口同音に二人が応える。
うん、彼女たちなら。

マリー「私ね？ーーー

マリー「…聞いて面白いものでもないよ？」（後書き）

はい、次から回想になるんで文体が少し変わりますがご容赦ください。
今回の方が前回より短いという大誤算…連投しますすいませｎ（殴

ヒトか、キカイか（前書き）

先述の通り、文体が変わります＜＜；
こうしたほうがいい、こうしたら読みやすいんじゃないか、等ありましたら教えてくださるととても嬉しいです小躍りして喜びます（笑

それではどうぞ！

ヒトか、キカイか

私ね、よく皆から『キャストらしくない』って言われるじゃない？
それもそのはず、私は…『キャスト』として作られてないんだもん。

あ、驚いた？そうでもない、か。うん、大丈夫だよエイダ、だから
そんな顔しないで？そうそう、いつも通りでいて。お願いだから。

ああ、ごめん。それで、ええとうん。私が作られた理由だったっけ。
私ね、『ヒト』に限りなく近い『キャスト』を作る計画の産物なの。

…私のイニシャル、全部『M』なの覚えてる？うん、そう。
『マリー，M，ミスラ』…真ん中のMはね、製造番号なの。１３番
目のM。

でもね、私は運が良い方なの。どうしてかって？他の姉たちは、皆が
どこかに欠陥を持ってて。起動して１週間で廃棄されたんだって。

１週間だよ？…私は、奇跡の１号目。研究所では『プロトタイプの
M』
って呼ばれてたの。おかしいよね、１３番目なのに１番目みたいに。

とにかく、わたしは欠陥がなかったんだって。この『欠陥』って一体
何だと思う？…おかしいよね、『欠陥がないこと』なんだってさ。

人間と機械の境目って物事を間違えるかどうかなんだって。…私は、
１週間のうちに間違いを起こしたから廃棄されないで済んだの。

間違いって何かって？簡単、世話をしろって言われてた猫のおトイレ

を掃除するの忘れてただけなの。それだけなのに、私は生かされた。

…ちゃんと生きてたのかって聞かれると、よくわかんない。研究所は私にとって檻だったから。行動は制限されて。言動は全て録音。

…でも私が頑張れたのは、エイダが居たからなの。エイダは私と同時に起動されて、私とエイダのプログラムは基本的に同じなの。全部。

性格、思考傾向、好み、適正。全部一緒だったんだ。…あ、今性格がエイダみたいだったって嘘だ、って思ったでしょ？でも本当なの。

エイダみたいに喋って、エイダみたいに悩んでたの。…本当だって。最初はぎこちなく言葉を交わすくらいだったけど、…何だろうね。

いつの間にか、私はずっとエイダと一緒に居るようになってたの。ずっと、ってどれくらい？かぁ…まぁ、今の生活ならこの部屋にいる時くらいじゃないかな？まぁとにかくずっと一緒。…検査以外は。

検査って？かぁ…うーん、脳波？を測ったり？よくわかんないんだ、何をしているのかは教えてくれなかったから。でもとりあえず、私の体中に電極が付いてたね。うん。

そんな検査が週に一回あって。それ以外は外出も許可されないで。飼ってた猫は取り上げられちゃった。…その晩は食べたことないお肉が食事として出されたけど。

食事？食事は基本粗食だったね。えーと、あれ、う～ん…そう麦！麦と、あとはお茶と最低限の栄養をとるためだけのおかずかな。

だから食事を沢山食べられるのが今考えるとすっごく贅沢なの。

…エイダの料理、もっと味わって食べるね？いつもありがとう。

痛い痛い！照れ隠しだからって叩くのは痛いですエイダさん！

…と、とにかく粗食が基本だったの。贅沢は検査の後の飴かなぁ…

…とまぁ、この部屋くらいの大きさの部屋で、壁が一面鏡張りでね。

…あぁ、そうかあれはマジックミラーだったのかな。観察用の、ね。

まぁ、服も布切れ一枚を一応ワンピース型に縫いました、くらいで。

…いやぁ、そんな生活を一月くらいしたある日ね？いきなりだよ？

いきなり部屋から出ろって言われて、部屋から出たら何か質素だけどちゃんとした服に着替えさせられて、言われるままに車に乗り込んだわけですよ。かなり頑丈な…うん、同盟軍の輸送車みたいな？

…あの、先に言っとくけど売春とかそういうのじゃないからね？

…エミリア、もう少し心を綺麗に持とうよ…顔真っ赤だよ？あははっ

まぁ、そのまま輸送されまして。そこでエイダと一旦引き離されて。後で聞いたらエイダはグラール教団総本山に連れてかれたんだって。

ここで戦闘スタイルが分かれたの。前衛と、後衛。…予想は付いてるだろうけど、私は同盟軍に連れてかれたの。パルムの中にあるしね。

それでそこで…うーん…半年くらい？1年？あ、3年…私軍にそんなに
いたんだ…うん、3年間みっちり戦闘をたたき込まれてね。んー、でも
主に射撃だったなぁ。同盟軍だし。ちなみに私今でもツインハンドガン

は得意なんだよ?…あ、知ってましたかそうですか…

その間に色々あってね。…んー、一つ例を挙げるなら浄化かなぁ…

あ、

私ＳＥＥＤ事変の初期は同盟軍にいたんだ。言ってなかったっけ?

あ、はい言ってませんでしたすみません…で、でね、ラフォン草原

って

解る?そうそうＦＭ草原の支配者で行くところ。あそこの浄化を担

当して

隊の先行部隊に配属されてね。…うん、原生生物を殺し回ったの。

視界に入る全てを。ＳＥＥＤ汚染?確認してたら原生生物と一緒に

後続部隊

に燃やされちゃうって。…むしろ溶けるかな、うん。

あとは暴徒鎮圧かな。結局、鎮圧には成功。最悪の結果で、だけど

ね。

…解ってるくせに。暴徒を射殺したの。この手で。うん、長距離狙

撃?

スコープ越しに見た光景、今でも思い出すよ。真っ直ぐな火線、気

配でも

察したのかこっちを向く標的。右目に弾が到達して、後頭部から飛

び出る

血と、脳漿。

その時かな、自分に疑問を持ったの。私、何でヒトを殺してるんだ

ろう?

って。何で殺さなきゃいけなかったのか?って。

そこからかな、本当の意味での自我が生まれたのは。遅いよね、でもそう
なの。それしか知らないの。初めて自分で考えたことの記憶は。

それからはもう毎日がイヤだったの。殺しはする、でも自分は生きる。
…それがイヤで。でもＳＥＥＤ事変の真っ最中だったから辞められなくて。

…だから私はガーディアンズからオファーが来たことは暁光だと思った。
うん、暁光だ、乗るしかない、って思った。まぁ、乗ったんだけどね？

…ここでちょっとお茶でも飲んで落ち着こっか。
ほらエイダ謹製、お茶菓子もあるよ。てなわけで。

ちょっと一休み、一休み。

ヒトか、キカイか（後書き）

おもっ！
くらっ！
ぐろっ！

はい、３拍子揃っちゃいましたぁ…
グダグダだけど許してくださいぃ＜＜；

ヒトか、キカイか（2）（前書き）

はい、どうも今晩は毎度毎度夜遅くにしか更新しない作者です↑
んー、内情書くのって難しいですねぇ…

手探りしながら頑張りますんで生ぬるく見守ってやってください＜
＞；

それでは、どうぞ！

ヒトか、キカイか（2）

…ふぅ。あ、やっぱり続きが聞きたい感じですか…はい。
解りましたようちゃんと話しますよう…

えーと、どこまで話したんだっけ?あ、ガーディアンズから
オファーが来たところまでか。じゃぁ、その続きからね。

当時、『合の時』の作戦がまだ計画段階だった頃かな。オファーが
来たのは。
正直その頃にはもう同盟軍にいたくなくてねぇ…

だってさ、軍って何のためにあるんだと思う?…はい、ナギサさん。
うん、そうだね。敵の攻撃から自分と自分の仲間達を守るためだね。

でもその頃の同盟軍はまだキャスト至上主義が根強くて。…酷かっ
たんだ。
私が居た部隊の隊長の思想が特に顕著だったの。どれくらいかって?

んー…火事になった建物があったとして。中のキャストを全員救出
したら、
延焼を防ぐために建物は破壊しろって、ヒトはどうでも良いって。
実際の命令ね。

勿論表口にキャストを全員避難させて、私は中を確認するって名目
で残って
裏口からヒトを避難させたりして。

…いやぁ、助けたヒトの目つきが忘れらんないなぁ…

あ、ううん。良い意味じゃなくてね。

何で優劣を付けるんだ、それで人助けのつもりか、キャストのくせに。

そんな目で見られて。…や、あれは堪えたなぁ…

ああ、話がそれちゃったね。ごめんごめん。

ええと、そうだオファーが来て、からだったね。

オファーが来て、私はそれを喜んで受け入れたの。…私は、ね。

勿論そんなの研究員達が黙ってなくて。交渉は難航。

その間私は隊の中で孤立しながら訓練や任務をこなしててね。

…汚れ仕事は当てつけみたいに回されたなぁ…ん、大丈夫だよエイダ。ありがとう。

交渉が終わるまで3週間。その間に殺したヒトの数は両手の指じゃ数え切れないの。

…忘れられる訳ないじゃん、全部覚えてる。

暴徒鎮圧任務3回、立てこもり犯射殺任務4回、強奪犯射殺任務2回。

極めつけは…死刑執行12回。全射殺。

私がヒトともキャストともつかない思考回路をしてるっていうのを隊長が知ったからなのかは私は知らないけど。

3週間でパルムを4周くらいしたかなぁ…移動中は貴重な睡眠時間だった。

でまぁ、3週間したらいきなり知らない研究者が来てね。こう言っ

たの。
『計画は廃止、無期限の凍結となった。君は今から私の権限で自由にする。
ここに残るも他へ行くのも自由だ。縛り付けてすまなかった。』
急に無責任だよね。仕方ないんだけど。…私達の研究の責任者がね？ＳＥＥＤ事変で死んじゃったんだって。これは最近知ったんだけどね。
今思えばあれは当時のＧＲＭ社の武器開発担当顧問みたいなヒトだったのかな。
…引率者が死亡したプロジェクトの中身を整理しようとしたんだろうね。
それでまぁ、荒んだ心でガーディアンズ入りするわけですよ。うん。ここからが長くてね？色々あったなぁ…
まず、私の教官になったヒトが誰か解る？…絶対知ってる。ナギサは…多分？
正解は、現ガーディアンズ総裁のライアさんでしたー。驚い…てるね。
そう、彼女がまたスパルタでね？よくひっぱたかれたよ。スピアで。
…でもその当時の私はエイダみたいな意地っ張りだったからさぁ…地味に痛いんでヒールで足踏むの止めてくださいエイダさん…
いたた…まぁ、殆ど喋らなかったね。任務中も。
ただ、マイルームではぎこちなく喋ってたよ？エイダと。
…ああ、エイダがそこにいる理由、かぁ…

うーん、まぁ簡単にいえば教団からひっこぬいた、みたいな？

マイルーム支給時にマシナリーを選べるのだけど、私はカタログからじゃ
なくてエイダが欲しいって言ったの。うん。無意識に。

そしたらルゥが私の身辺調査してくれて、『エイダ』に該当する子を探して
きてくれてね。いやぁ、エイダと再会したとき思わずボロボロ泣いちゃってさ。

エイダはエイダでおろおろしだすしさ。で、落ち着いたら私が、私がだよ？
お見苦しいところを…とか言っちゃって。わ、笑わないでよエイダぁ…

こほん。とまぁそれで無事ガーディアンズに入隊して訓練受けてですね。
私にもパートナーが付いたの。ウサギさんみたいな。

誰かって？…ウサギじゃ解らないかなぁ…ヴィヴィアンだよ。白い旅人さん。
えーって…そんなに驚かなくても…いや、なぜ妙に納得してるんですか
ナギサさん？…え？類は友を呼ぶ？…ああ、なるほど。

でまぁ何だかトラブル体質なような私のことだからトラブルに巻き込まれるよね…
ほら、何年か前にヒューマン原理主義者の起こした騒動あったじゃん？うん。

そうそうイルミナスの。あれに見事巻き込まれてね…

ダークファルス倒したり…ダルク・ファキス倒したり…うん、倒してばっかり。

ライアさんが近距離専門だったから、私もハンターに変えて。

くやしながらも同盟軍で体の動かし方は覚えてたから。まぁ楽だったかな。

…それに、剣の方が奪った命の重さを噛みしめられるからね。手応えあるし。

大変だったのはヴィヴィアンと戦ったときだったかなぁ…

初めて殺さないように戦ったから、ね。

…ヴィヴィアンと戦ったりナギサと戦ったり何?私は身内と戦う運命なの?

ああ、そんな自分を責めるような顔しないでナギサ…

んで、まぁ色々あってヴィヴィアンが独り立ちして。私も…と思った矢先に

連れ戻されて。　その辺りは勘弁してください…

…ん、何エミリアどうしたの?

お手洗い…はいはい待ってたげるから行ってらっしゃい。

大丈夫、その間はお話進めないから。

だから安心して、行ってらっしゃい。

ヒトか、キカイか（2）（後書き）

書いてる途中に寝落ちとはこれ如何に…

できれば連日投稿したいと思ってるんですがいやはやたいへんですね（＾―＾；）

それではまた次回！

ヒトか、キカイか（3）（前書き）

書き上げようとするといつも邪魔が入るＡｎｇｅｌｉｃａです＞（｜　｜）＜

いやはー、いきなりフリーズしたりしまして…

ここで長々語ってもあれなんでどうかお付き合い願います！

それではどうぞ！

…マリーさん…（ー｜ー；）

※１０／１８　重要な部分が間違っていたので修正を加えました＜＞；

お手数ですが読みなおしていただけると嬉しいです（泣

ヒトか、キカイか（3）

あ、お帰りなさいエミリア。…大丈夫だよ、話は続けてないから。
ええと、ヴィヴィアンと別れたところからだっけ…

ヴィヴィアンと別れた私は、ライアさんと二人で任務に当たる事が多くなったの。彼女は教官兼パートナーでね、うーん…

最初の頃の私とエミリアの関係って言えば分かりやすいかな？まぁ、前衛二人で突撃部隊みたいな感じだったんだけど。

その頃は私、今みたいな性格じゃなくてね？いや本当に！私はひねくれてて、それですごく…愚か、だった。

ーーーーーーーーーーー

『私は被献体として生み出されてきたにすぎない』
『私には物事を選ぶ自由が与えられていない』
『私にはただモノを壊す力しか与えられていない』
『私は周りに流されて生きているにすぎない』
『私には…私が生きている意味が分からない』

ーーーーーーーーーーー

…うん、本当に。世界で私を理解してくれるヒトはいなくて、だから私は世界で独りぼっちなんだ、って馬鹿みたいな事。本気で考えてたんだよ？…あはは、笑っちゃうよね。

…うん。笑わないで聞いてくれてありがとう。…本当に。

そんな私の考えを変えたのが、ある一つの事件だったの。

『ガーディアンズコロニー落下事件』。

コロニー中枢に、同盟軍の戦艦が突っ込んできたの。
…正確には、突っ込まされたの。コントロールを乗っ取られて。

私たちはその時パルムにいたんだけど、コロニーに対する制御権を持ってるルゥのホスト機をコロニーの中に連れていったの。

状況は限りなく厳しくなってきていた。
動力のＡフォトンリアクターの損失。…失われたコントロール。

生き延びる方法は居住区画での脱出とコロニーの放棄。
居住区画に全員を避難させて、避難の準備は進んでた。

私たちの家だったガーディアンズコロニーは、そのままだとパルムに落下するコースに入ってたの。…住民全員と一緒に。

…その状況の意味を本当に理解して、区画の切り離し作業を行った、その一人の犠牲者が私を変えたの。

…名前を、オーベル・ダルガン。
ガーディアンズの前総裁で、ライアさんの養父だったヒト。

コロニーは、電気回路に仕掛けをされてて。制御が居住区画から遠隔操作出来なかったの。…彼は、独りで。コロニー側から。

制御権の解放は、早すぎても遅すぎてもいけなかった。
…解放したら、脱出に間に合わないことを彼は承知していた。

…彼が、コロニーと心中するつもりだったことは、一目瞭然だった。
もちろん義娘のライアさんはパニックを起こして。…私は。

私は。…何も出来なかった。声をかけることさえ。
区画を切り離す時に点いたブースターの重低音が、空しく響いた。

私は落ちゆくコロニーの中にいるダルガン総裁と目の前にいる
ライアさんの通信を。…ただただ、聞いていることしかできなくって。

…落ち着く間もなく後処理が舞い込んできて、感傷に浸る間も無かった。
そりゃそうだよね、コロニー一つ落とされて。

…落下点でも死傷者がでたって、聞いた。
私は、仕事を続けることで無力感から逃げてたの。

でも。仮にもキャストが本気で時間を忘れるほど働いたから。
仕事は、すぐになくなってしまったの。

襲いかかってくる無力感。
同時に、組織の拠り所を亡くした喪失感。

…彼は、とても立派な。総裁、だった。
…それから、色々あって、ライアさんが。総裁に…なって。

私は、戦闘任務ばっかり回してもらって。…傷つけて、傷つけられて。
とにかく胸にあいた穴を埋めたくて。朝から晩まで1日中任務受け

てた。

…エイダ、覚えてるかなぁ。そんな生活を1週間くらい続けてたら、たまたま帰っててベッドに座ってるときにエイダに叱られたの。

『無理な戦闘ばかりして死んじゃったらどうするんですか！』って。

…バカで頑固だった私はそれに対して、下を向いてこう叫んだの。

『壊すしかできないこの私なんて死んだ方がいいんだよ！！』

…あの時のエイダの本気のビンタ、痛かったなぁ…

それで、本気で泣きそうな顔してこう言われたの。

『何かを壊してまでしてヒトを守ってる貴方がいなくなったら、

貴方に今まで守られてきたヒトはどうなるの！！

貴方が今まで壊してきたそれらはどうなるの！！』…って。

…私、その時に本当に『生まれた』んだと思う。

いや、何を言いたいのかって私も解らないんだけど。

私を否定しないで見ていてくれるヒトがこんな所にいたんだ、って。…そしたら私、これまでにないってくらい涙が出てきて。

嬉しくて。自分がしてきたことに意味はあったんだって。

救われたような気さえして。

気付いたら、エイダにすがるようにしがみついて泣いてた。

いつの間にか、泣きつかれて寝ちゃってたけど。

…次の日、頭を撫でられる感覚で起きたらね？

エイダに、膝枕されてた。

それから、こう言われたの。
『おはようございますマスター。よく眠れましたか？』

あの日が初めてマスターって呼ばれた日。…覚えてるよ？
そして支えてくれるヒトの存在に気付いた私は、今みたいに。
笑って、はしゃいで、たまに泣いて。…結構泣く比率高めかな？

ーーーーーーーーーーー

『私はきっと誰かのためになるために作られた』
『私にはこんなにも選択肢が開かれていて』
『私には壊すしかできなくても、それで何かを守ることが出来て』
『流されそうな私には、流されないための仲間がいて』
『私は、仲間達と彼らの生きるこの世界を守るために作られた！』

ーーーーーーーーーーー

偶然会ったライアさんに驚かれちゃって。
『あんた…変わったねぇ…』なんて言われちゃって。

それからはもうあんまり語ることは…ない、かな？
あの戦いはガーディアンズに行けば記録があるしなぁ…
あ、ガーディアンズを抜けたときのことがあったか…

…聞きたい？
…えへへ、そんな大したことでもないんだけど。

…ちょっと話すぎちゃってのど乾いたかな。
エイダ、紅茶おかりお願いして良い？…ありがとっ。

ふぅ。美味しいねぇ…ちょっと休憩して良い？
あはは、焦らしちゃってごめんね？

大丈夫、ちゃんと話すから。
…そうだねこの1杯を飲みきるまで休憩で。

じゃ、一旦のんびりしよ？

ヒトか、キカイか（3）（後書き）

…や、どうでしたでしょうか？（汗
出来れば連続投稿したいなぁ、って思ってますが…
出来るか解りません（―＿―；）

感想・ご指摘等ありましたらよろしくお願いします！
それではまた＞（＿＿）＜

ヒトか、キカイか（4）（前書き）

一旦マリーさんの過去語りはここで終わる…と思います＜＞；

ぐだってはいますがどうかおつきあい願います！

それではどうぞ！

ヒトか、キカイか（4）

ふぅ、やっぱり美味しいなぁ…
何かコツとかあるの？…ジャンピング？へぇ…

…あ、飲み終わっちゃった。さて、休憩終わり…と。
ここからはもうあんまり話すことが…あ、空白期間か。

まぁそれまでの事件は開示されてるからそっちでお願い。
…色々ありすぎて語ってたら明日になっちゃう。

ええと、それじゃ私がガーディアンズを辞めたきっかけね。
…ううん、すっごく下らないよ？それでも…良い？

…はい。わかりました白状します。まぁ色々あったんだけど、
直接辞めるきっかけになったのはね？

…制服の着用義務が、できちゃったことなの。
もー！笑わないでー！だって仕方ないじゃん！

ルゥみたいなパーツなら見た目好きだったのに普通の制服
渡されちゃったんだもん！おしゃれしたいじゃん！

…いえすいません制服をけなしたいんじゃないです…本当に。
でもね？でもだよ？キャストでもルゥだけ特別って！？

制服試用期間に着けてみたらエイダに爆笑されるし…
お腹抱えて笑われたのは後にも先にもあれだけだよ…

もう！そろそろ笑い収めてよエミリア！…もう！
とにかく！ガーディアンズ辞めて、他の部屋借りようと、
ガーディアンズのいない街にでたの。

マイルームも引き上げなきゃだったし、キャストだったから
パルムが条件的には一番良かったし？
5年契約だったかで部屋を借りて…3年くらい住んだかな？

ん？なんで3年だったのかって？
この会社に引き抜かれちゃったからだよぅ…

それまでよろず屋みたいなことしてて、そこそこ儲かってた。
家計のやりくりがエイダ担当だったって言うのもあってね。

やー、何でか依頼のほとんどが恨み事の調停だったり？
あとはベビーシッターに、デイケアに…司書もやったかな？

あ、勿論公共図書館じゃなくて個人図書館のね？
…や、今思えば紙媒体ってまだあったんだねぇ…

忙しいなりに楽しかったなぁ…
小さな部屋だし、壁は薄かったけど帰ると安心したの。

エイダ、何でだと思う？…ん？耳打ち？はいはい。
…すみません照れ隠しでも頬をツネるのはいたたたた！？

…はぁ…いひゃい…はい、すいません…
ええと、そんな生活してたら。割のいい仕事が入ってきて。

…ええ、そうです海底レリクスの調査です。それで調査に

挑もうとしたんだけど、さすがに武器は売り払っちゃってて。
…ＧＲＭ本社にセイバーと、当時新製品って売り出されてた
割に安価だったシールドだけ買いに行ってね。
やー、購入するときに武器所持用のライセンス見せるじゃん？
受付のヒトにこのランクでこの武器！？って顔で見られて…
いや、恥ずかしかったなぁ…

貯金も豊かだって言える程じゃなかったし。仕方なかったの。
でまぁ、レリクスに行って。それからは知ってるとおり。

まぁ、５年契約の部屋を３年で解約だから違約金で貯金が…ね。
お金はすっからかんだし、武器は初期武器だし。

やー、苦労したなぁ…あはは、今となっちゃ良い思い出よ。
いや、入社断ろうとしたら１００万メセタ請求されそうになった
時はさすがに焦りましたけどね…

んー、こんなものかなぁ…聞きたいことは何かある？
はい、エミリアさん。…恋人、ねぇ…

変人なら身の回りにいっぱいいたけど恋人はいなかったなぁ…
他には？…はい、ナギサさん。…ソードは買わなかったのか？

うん、貯金あんまり崩したくなくてね…
報酬に対して出費が大きくちゃ意味ないしさ。…他には？

ないみたいかな？…うん、これで私の話は終わり。
ご静聴ありがとうございましたー…ふぁあ、喋りすぎてちょっと

疲れちゃったかな。

…仮眠とっても良いでしょうか?…ほんと?ありがとう!
じゃぁ、私ちょっと寝るからさ、まぁ3人で喋っててくださいな。

…ヤバい、本格的に眠くなってきた…
うん、じゃ、おやすみなさい…

ヒトか、キカイか（4）（後書き）

…これでマリーさんの過去編終わりになります＜＞
や、最終回は明るく終われ…ましたかね？

この小説自体はまだまだ続きますのでご安心（？）ください！↑

ご意見、ご感想等お待ちしてます☆
それではまたｍ（＿＿）ｍ

エイダ「…私は、」（前書き）

さてこれからどうしよう、やっぱりプロットとかって大事なんだなぁ、と
作家の方々の偉大さをひしひしと感じているＡｎｇｅｌｉｃａです
（￣-￣；）

まぁ私は彼女たちの走り出すままにキーボードを叩くだけなんですが（ｗ
さてさて多くを語るのは好まないのでどうぞおつき合い下さいｍ（＿＿）ｍ

それではどうぞ！

エイダ「…私は、」

ーーーマリーのマイルーム

彼女は、隣の部屋のベッドで（隣と言っても特別敷居があるわけでもないのだけれど）、安らかに寝息をたてている。

この眠りの深さなら明日まで寝通しか、夕飯もとってないのに。

…なら朝にしっかり食べてもらおう、と踏ん切りをつけ。

…私は見知った二人の方に向き直る。

一つの質問と、多少の覚悟とともに。

エイダ「…お二人に、少しだけ相談したいことがあるのですが」

言ってしまった。もう、後には戻れない…いや、戻らない。

エミリア「ほぇ？何さ、今更改まっちゃって」

ナギサ「…今晩の献立、などという話題ではなさそうだ。

エイダ、私たちで力になれるなら何でも言ってみて欲しい」

エイダ「ありがとうございます。…唐突で申し訳ないのですけれど」

一瞬、心が逃げに走る。

エミリア「気にしないってば、ほらほら言ってごらん？」

ナギサ「そうだ。私は口が軽くはないと自負しているぞ？」

ああ、きっと彼女は。
こんな何気ないサポートに助けられてきたのだろう、と感慨深くなる。

エイダ「…はい。逃げません。相談…とは言いますが、意見をお伺いしたくて」

彼女たちは言葉を発しない。
私が続けるのを待ってくれているのだろう。…言外の言葉に甘える。

エイダ「先ほどのマスターの話にもありましたように、私とマスターの中身…根幹に根ざすプログラムは同等の物です。…ですから、私はキャストの身体に入っていればキャストであったと、そう先日知りました。…『心』はヒトのそれであるのに、私のこの『身体』は機械の区分にされるものです。そこでお二人にお伺いしたいのです。…私は、」

ヒトですか、キカイですか。

最後の言葉は声になっていなかったかもしれない。
緊張で喉が灼けるようで、胸が張り裂けそうで、他に感じる余裕がない。

言い捨てて…そう、言い捨てて。
やっとの思いで言葉を発して心が折れてしまったのか？わからない。
ともかく、私は顔を上げることさえ出来なくなってしまっていた。
…不意に、頭を小突かれる。小突く、というには些か強すぎるタッチで。

エイダ「いたっ…」

反射で頭を押さえて顔を上げると、エミリアが握り拳を作っていた。

エミリア「…よーし解った。エイダが何とはなしにあたしたちを避けてた
　　理由、それだね？」
エイダ「え、と…はい。」

図星を突かれて言葉に詰まる。
と、今度は別方向から同じような衝撃。

ナギサ「はぁ…エイダ、貴方は何を言っているんだ？もう一度言う。
　　エイダ、『貴方は何を言っているんだ？』」

やはり右手には握り拳。
彼女は説明を求めている？ならば、答えなければ。

エイダ「え、その…私はマシナリーなのに、皆さんにこんなにも…まるで
　　『ヒト』であるかのような扱いを受けていて良いのかな、って…
　　所詮は機械でしかないのに…替えの利いてしまう私

なんか…が、
替えの利かないものであるかのように…良いのかな、って…」
エミリア「エイダに替えなんか利かないよっ！！」
エミリアが椅子を蹴り倒すようにして立ち、言い放つ。
ナギサ「…エイダ、貴方も私からすれば大切な『仲間』だ。意味は、貴方ならば解るだろう？」
エミリアは俯いてしまって、ナギサさんは真っ直ぐにこっちを見つめて。
エイダ「私、…私。本当はずっと彼女にあこがれてて。
本心からサポートはしていました。手を抜いたこともありません。
けどふと、彼女が任務に行って、危ない思いをしているかと
思うと眠れなくなってしまって。近くで補助をしてあげられたらな
って何回も思って。でも、私は任務には着いていくことが
出来なくて。…私、私っ…！」
言葉にすることが出来ない。
私は何が言いたかったんだっけ？思いだそうとするも、思考が纏まらない。
でも思考の中心に光る顔がある。
彼女の、笑顔、泣き顔、ふてくされ顔。滅多に見せない、決意に満

ちた顔。

そうか、私は。

エミリア「…ていうかここまで気が回るマシナリー、あたしは知らない」

ナギサ「というか、最初から何度も言っているじゃないか。エイダは本当に

マシナリーなのか、と」

言葉にしないその気遣いが、『心』に染みる。

そうか、この心を持つものなら誰でも。…ヒトだ、って、名乗っていいんだ。

エイダ「…おかげさまで必要のないことにも気付いてしまいました」

悪態をつくマシナリーなんて初めて見た、とはエミリアからの初評だ。

エミリア「…あー、気付いたかぁ…頑張って！応援するよ！」

エイダ「や、あの…応援は、いい、です…」

ナギサ「…何だ？応援が必要なほど困難な道か？」

エミリア「さぁ？そうでもないんじゃない？」

私は。

彼女のためになりたくて。

彼女の無事を、気付けば祈っていて。

連絡がなければ帰ってきたときに飛びつくくらい心配して。

エイダ「…エミリア様、やっぱりこの感情っていけないものでしょうか？」
エミリア「ん～…いけなくはないんじゃない？むしろ頑張れ！応援する！」
でも、と繋げられた。
エミリア「様っていい加減どうにかならない？…堅すぎるよ、エイダ」
ナギサ「あぁ、それなら私も様付けはやめて欲しいな。出来るのなら敬称略
でお願いしたいくらいだ」
エイダ「敬称略はさすがに…はい、それでは『さん』で呼ばさせて頂きます」
よろしい、と満更でもないようにエミリアが無い胸を張る。
…思考の中ではさんすらつけないのは内緒にしておこう。
エイダ「…お二人ともありがとうございます。やっと整理がつきました」
エミリア「礼には及ばないよ？ほら、エイダが自分で気付いたんだしさ」
ナギサ「…ああ、その問題だったのか…時間がかかったな？いやでもしかし、
なぜこの会社はここまで出会いがないのか…」
エミリア「えっ！？……あのナギサが出会いを気にするなんて…！？」

ナギサ「ん?…あ、いや、ちがっ…わわわ私にはワイナールが!!」
エミリア「でもさ、今はもういないじゃん?」
小鳥のように自由にさえずる…にしては音量の大きい二人を見て。
私は。

エイダ「…私は、」

見ない振りをしていた。
蓋をして無かったことにしていた気持ち。

エイダ「…大好きだよ、マリー」

私は、誰にも聞こえないように、そう呟いた。
この気持ちは、決して彼女には明かすまいと自分の『心』に誓って。

エイダ「…私は、」（後書き）

…どうしてこうなった…
もう一度言う、どうしてこうな（略

あれです、多分授業中ですら有川浩さんの本を読んでるからですそうだからに違いない！

…この回がお気に召さなかった方はこの回のことを忘れてくれて構いません（汗
おかしいなぁ、エイダの過去も書こうと思って立ち上げたのになぁ…

ご、ご意見ご感想等お待ちしております！
それでは＜（＿＿）＞

マリー「…亜空間飛行の試験？」（前書き）

恋愛回の後って書きづらいなぁ、Ａｎｇｅｌｉｃａですｍ（＿＿）ｍ

…いやぁ、前回の展開がまさかの恋愛で…

いよいよキャラが私の言うことを聞かなくなって参りました…！

が、頑張って制御していきますんでおつき合い願います（汗

それではどうぞ！

マリー「…亜空間飛行の試験？」

ーーー翌日、マリーのマイルーム

彼女の襲来は、突然だった。
午前６時５０分、私とエイダで朝食をとってた時のこと。

エミリアがいきなり満面の笑みで入ってきた。彼女曰く亜空間がどうとか。
…懐かしい上にあまりに早口で喋られすぎてよく解んない…

マリー「…落ち着いてエミリア、唐突に亜空間飛行がなんたらとは一体
何でしょう？」

エミリア「ああ、えっとね、さっき亜空間飛行の試験の日取りが決まったって連絡があったんだよ。そのテストパイロットにあたしが選出されたんだ！」

ああ、そうか亜空間って現在進行形の技術だったっけ…
…ん？私バカなのかな、まだ状況が飲み込めないや…

マリー「ええと、はい。で、それで何を私に言いに？」
エミリア「ああ、そっか。それでね、あと二人だけテストパイロットの同行が認められたんだけど……
マリー、一緒に来てくれない？」

ごくん、とシリアルを飲み下し、スプーンを止めて一言。

マリー「…どうして私が？」

エミリア「ん～、なんていうの。マリーが一緒にいてくれると
　　安心するっていうか…」

ぞくっ、と背筋に冷たいものが走る。
いや、エミリアにいわれたことが原因ではなく。

おそるおそる、対面に座っているエイダの顔を伺う…と。
…かつてないほど静かに冷たい目ぇしてるぅ…！！

その気配をさすがのエミリアも感じたのか、一気に顔に焦りが入る。

エミリア「とととと…とにかく！テストパイロットに選ばれること
　　自体がけっこう栄誉なことなんだし、一緒に行こ
うよ！」
マリー「え、ああ、うん…え？」

エミリア「よしっ！これで一人は確保できた、と。あと一人は…」
マリー「え、確定？…すいません、エミリアさん？ちょっと！？」

エミリア「…ナ、ナギサ誘ってみるね？じゃ、マリーまた後で！
　　詳しくはまた連絡するね！！」

脱兎の如く、という表現が的確か、嵐のように来て嵐のように去る
といった表現が的確か。多分あれは嵐。…向かいの低気圧刺激して
帰っていっちゃったところとか。

エイダ「…マスター？」
マリー「はいっ！」

思わず背筋が伸びる。…声が何だか怖いよエイダさん!?

エイダ「亜空間飛行試験が危険かもしれない事、解ってますよね？」
マリー「そ、そりゃあの亜空間だしね…」

亜空間には結構痛い目を見させられている。
…『アライブ砲』で突っ込んだときは正直生きた心地がしなかった。

感慨に耽るというよりはあんな思いはもうしたくないという気持ちを思い出していると、不意に通信モジュールが鳴った。

マリー「あ、ちょっと待って…エミリアからだ」
エイダ「…」

エイダの後ろにダークネスウィングが生えた。気がする。
…正直怖い。何でこんなに怒ってるのかとかが解らないのが怖い。

マリー「え、ええと。今回の試験は実際に宇宙に出るわけじゃなくて研究施設に設置されてる試験機に搭乗して亜空間軸との接続が成功するかを有人状態でテストするっていうだけなんだ、ってエイダに説明と弁解をしておいてくれって…」
エイダ「…そうですか」

説明と弁解って…あれ、ちょっと空気緩んだ？
台風が大型低気圧に変わったくらい、だけど。

なんて思っていると、当のエイダが口を開いた。

エイダ「…マスター、何だか嫌な予感がします。危険がないとはいえ
　　万全の装備と補給をしてから臨んで下さいね？」
マリー「心配性だなぁ、エイダは…わかった。そうするよ」

ならいいんです、と今度は低気圧が高気圧に変わるくらいの変化。
…これは心配してくれるあまり、って奴なのかな？

マリー「エイダ、心配してくれてありがとうね？」
エイダ「いえ、マスターが安全なら私はそれでいいんです」

そう言ったエイダは澄ました顔をしていたけれど、耳まで真っ赤に
なったのは見逃さない。

エイダ「食器、お下げします」
マリー「あ、ありがとう…やば、これから適性検査だって！」

エミリアからのメールの最後に、出来るだけ早く研究施設まで
来てくれ、との旨。

エイダ「そんなせっかちな…マスター、出かける前に着替えちゃって
　　くださると嬉しいのですが」
マリー「あ、はい…」

気付けば部屋着のまんまで出かけようとしてて。
…大人しく、エイダの出してくれたパーツに換装する。

なんだかんだエイダに甘えちゃってるなぁ、なんてため息。

エイダ「…マスター？ため息なんてついて大丈夫ですか？」

マリー「あ、ううん大丈夫！行ってきます！」

現在時刻を確認して、マイルーム前の通路を走り出す。

…と、後ろからエイダの声が。

エイダ「マスター！研究施設は逆方向ですよ！？」

マリー「うぇ！？あ、いけない！ありがとうエイダ！」

エイダ「全くもう…気をつけて下さいね？」

マリー「えへへ、申し訳ない…行ってくるね！」

エイダ「お気をつけて」

エイダに見送られて研究施設へ走る。

遅刻じゃなかったらいいな、と幾ばくかの希望を抱いて。

マリー「…亜空間飛行の試験？」（後書き）

…はい、次章はＥＸミッション『時空を越えて』になります。

いや、とりあえずはＥＰ２のサイドストーリーをすませておこうかと（。ε。；）

…元のミッションが長いのでこの章も長くなるかもしれませんが何卒ご容赦
願いますｍ（＿＿）ｍ

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします！

ではまた＜（＿＿）＞

ナギサ「…嫌な予感がする」（前書き）

こんばんは、どうしても会話文が多くなりがちなＡｎｇｅｌｉｃａです（，・ω・）
途中の文で繋げようとすると説明口調になってしまって…難しいです（汗

やっぱり作家の方々は偉大だなぁ、と今更ながらに思いつつ。

それではどうぞ！

ナギサ「…嫌な予感がする」

ーーー試験当日、亜空間研究施設、亜空間航行試験機内部

ナギサ「エミリア、やはり嫌な予感がするんだ。この亜空間の試験
　　とやらをやめることはできないだろうか？」
エミリア「もう、まだそんなこと言ってんの…心配しなくても
　　大丈夫だって！」

はい、やってきてしまいました試験当日。
私たちはもう試験機に乗り込んでいて、あとは開始を待つだけ。
…なのだけれど。ナギサが言うには『嫌な予感がする』って。
なんだかんだで我が社の社員の勘は当たるから（ユート然り）、
ここまでナギサが引きずるのはさすがに心配かなぁ…

あ、そういえばエイダにも再三『気をつけて』って言われてたん
だっけ…ほ、本当に不安になってきたよ…？

なんて言ってる間に、エミリアがナギサを説得しきったみたい。

エミリア「それじゃ、全員運転席に座ってベルトをして。いい、
　　準備はできた？ハッチを閉めるよ」

カシュ、と軽く気圧式のハッチが閉まる音がする。
…エミリアの学者な面、久しぶりに見たけど生き生きしてるなぁ…

エミリア「亜空間軸計測機、オールグリーン。これより試験運行

を開始するよ。システム、ドライブ！」

聞きなれた転送音の後に、一瞬視界が白く染まり、即ブラックアウト。

…あれ？何だか物々しい雰囲気？

ナギサ「こ、これは……」

エミリア「え、なになに！？」

赤色回転灯と一緒に響く警告音。

…これはもしかしてもしかしちゃった！？

マリー「…えっと…エミリア？これって…」

エミリア「わ、わかんない！ちょっと！何が起こったの！？」

ガクン、と一気に…落ちる！？

ナギサ「……くっ！」

エミリア「きゃあああああ！！」

マリー「嘘でしょぉぉ！？」

間もなく、機体が激しく打ちつけられるような衝撃。

…そのまま、何処かを滑っていくような感覚。

マリー「…と、止まった…？エミリア、ナギサ、大丈夫！？」

エミリア「う…うぅん…」

ナギサ「くぅ…」

マリー「よ、よかった…生きてる…」

エミリア「あたしたち…何が起こって…？」
ナギサ「ここは…どこだ？」

壊れて開いたハッチの外に広がっている風景。
…そこには現実のものではなかった筈の『見覚えのある風景』が。

マリー「ね、ねぇエミリア…ここって…」
エミリア「うん…あの時のＶＲ空間だよ！」

そう、私たちはここを知っている。
ユートとルミアと私とエミリアで戦闘訓練の試験で来た、ＶＲ空間。

恐る恐る、ハッチから這いだし『地面を踏みしめる』。
…おかしい。どう見ても、どう感じても。この空間は人工物じゃない。

エミリア「何で亜空間飛行の試験機がＶＲ空間と繋がったんだろう…」
マリー「…エミリア、外に出て来てみて。この草木、本物だよ…」

ざく、という音を立ててエミリアが地面に立つ。
ナギサも続いて外に出て来て、小首を傾げる。

ナギサ「…？よく解らないのだが、ＶＲ空間とは風景を現実に実体化させるものなのか？」
エミリア「ううん、違う…ＶＲはあくまでプログラムだもん…ここまでの
精度で空間を具現化するなんてできないよ…！」

マリー「…エミリア、ここって…」
エミリア「多分、そう。VR空間じゃないんだと思う…何、ここ？」

ナギサ「エミリア、話についていけないのだが…」
エミリア「ああ、ごめん。えっと…」

エミリアがナギサに事情を（解る範囲で）説明する。
その隙に、私は周辺の調査。…主に草木や土質の、だけど。

結果として、ここは『グラールじゃない』という仮説が立ってしまった。
草木の植生、土に含まれる微量の鉱物、全て見たことがない。

ナギサ「…つまり、仮想のものが現実になった場所に私たちはいる、と」
エミリア「うん、そういうこと…とにかくさ、早く戻ろう。時間が経つと
　元のポイントに戻りづらくなるから。原因はその後に…」

ボン、と軽い音がする。…試験機の方から。

ナギサ「その…私たちが乗ってきた試験機から、黒煙が立ち昇っているんだが…」
エミリア「えええええーっ！？…ってね。でも大丈夫！こんなこともあろー
　かと、ちゃーんと試験機には自動修復システムを搭載してある
　から、しばらくすれば自動的に故障部分が直るわよ？」

と、エミリアが言い切らないうちに試験機を淡い光が包み…
光が晴れた機体には、傷一つ残っていなかった。

マリー「すっごーい！さすがエミリア！」
エミリア「ふふん、どんなもんよー！これでグラールに帰れるよ！」

すると、いち早く中に入っていったナギサがハッチから顔を覗かせた。

ナギサ「あの…モニター部分にバッテリーエンプティと表示が…」
マリー「嘘ぉ！？」

エミリア「えええええーっ！？…って、なんちゃって！こんなこともあろーかと、大気中にあるフォトン粒子を収束させて、エネルギーに変換する装置をつけておいたの。これでバッテリー切れに対応できるわよ！」

エミリアがハッチに入っていったかと思うと、少しもしないうちに試験機が見覚えのある暖かい光に包まれた。

マリー（ここにもフォトンあるんだ…）
エミリア「ほら、もうエネルギー充填完了ー！これでグラールに戻れるよ！
マリーも早く入って入って！」

マリー「あ、ごめんごめん！今いく！」

何か、何か心に引っかかるものを感じながら。
試験機の中に滑り込んで、ハッチを閉める。

エミリア「さて、これでもう安心ね。さっさと研究施設に戻ってこのトラブル
の原因を究明しなきゃ…あ、あれ？亜空間計測器が誤作動を起こし
てる！？通信システムもダメじゃん！」

何だか、とっても嫌な予感……
エイダ、予想、的中かもよ…？

エミリア「な、なんだろう、これ…故障部分は直ってるはずなのに何かの影響
でシステムに障害が発生してる…？」
マリー「…こんなこともあろーかと！？」

半分涙声で私が言う。
いや、連絡も取れないなんて……エイダ…！

エミリア「……そう言いたいのは山々なんだけど。データベースを開こうにも
それにも影響してて原因が分からない…うー、困ったなぁ…」
ナギサ「く……」

マリー「……ん、あれ？…ナギサ？」
エミリア「…ナギサ？」

ナギサが、欠片騒動以後一回も見せなかった表情。
エミリアは気付いてない。この表情は。

ナギサ「ぐっ！！」
マリー「ナギサ！！」

どうして、終わったはずなのに、何で今も！？
頭の中のクエスチョンマークを振り払う前にナギサが機体の外へ歩きだした。

ナギサ「……何かが…何かが私を……呼んでいる…こっちだ」
エミリア「え、ちょ！？ちょっとナギサ！」

マリー「エミリア、追うよ！」
エミリア「あ、うん！…そうだよね、もしかしたら誰かに会えるかも！」

機体を置いていくための口実だろう。エミリアがハッチをロックする。
ふらふらと歩くナギサは明確な目的を持っているかのように進んでいく。

…まるで、本当に呼ばれているかのように。

ーーーーーーーーーーーー

…このとき私たちは、多分誰かの掌の上で踊っていたんだと思う。
今にして思い返して、そう思う。
神様って存在がもしいるのなら、多分性格は最悪。

…私たちをこのとき導いていた神様は、破壊を司る神だったのだから。

ナギサ「…嫌な予感がする」（後書き）

…最後の文はネタバレになっちゃいますかね？（汗
いえ、一応奴と直接対峙する訳じゃない…から、大丈夫、の筈！（殴

何か不都合がありましたらご指摘お願いします＞（＿＿）＜

いや、サイドストーリーの中に主人公混ぜるのって案外構成変わっちゃいますね（。ε。；）
というかもともと主人公が空気すぎるからなんですけど…（ｗ

いかがでしょうか、なにかご意見ご感想等ありましたらよろしくお願いします！

ではでは☆

Ａｒｅａ１：森（前書き）

こんばんは、いざ書こうとするとどうしてもマリーさん達が動いてくれないＡｎｇｅｌｉｃａです＞（｀＿´）＜
メッセージカプセルの内容収集したり色々したりで資料が…！

久しぶりの投稿ですしここでだべってるのもあれなんでどうかおつきあいください！

それではどうぞ！

Ａｒｅａ１：森

ーーー森エリア１：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

エミリア「…それで、ここ、どこ？」
マリー「すっかり迷っちゃったかなぁ…」

ナギサを追って来たのはいいんだけれど。
知らない土地で迷子になってしまうなんて…

ナギサ「す、すまない…」
エミリア「あ、いや謝んないでよナギサ！大丈夫、きっと何とか
してくれるって…マリーが」

マリー「え、私！？ちょ、ちょっとまって道なんて覚えてな…い…」

言い終わるか終わらないかのそのときに。
視界の端に、何かオレンジ色の…光？なんだろう？

ナギサ「ん？どうしたんだ、マリー？」
マリー「あ、いやちょっと気になるものが…」

そう言うと私は、そのオレンジの光の方へと駆け寄った。
光を出しているのは…何だろうこれ？カプセルみたいな…

マリー「ね、エミリア！ちょっとこっち来て！」
エミリア「お？早速あたしの出番？何々～…って、何これ？」

マリー「さぁ…何か機械っぽい…よね？」
ナギサ「触ってみればいいじゃないか？」

エミリア「そうだねぇ…？おろ、スイッチみたいなの発見！ポチっとな」
マリー「ポチっとな、って…」

エミリア「な、何よー！」

次の瞬間、思いも寄らないことが起きた。
…オレンジのカプセルが、喋りだした。

『あー　あー。』

「「喋ったぁ！？」」

私とエミリアとで驚いて肩を寄せあっていると。
ナギサが近づいてカプセルの側にしゃがみ込んだ。

ナギサ「何だ、喋れるのか？」

ナギサ、その冷静さはどこからくるの…！？
なんて思っていると、そのカプセルは言葉を続けた。

『ゴホン！』

『あたしは　リコ。ハンターのリコ＝タイレル。』

マリー「あ、ど、どうも…」
エミリア「…？マリー、よく聞いて。これ録音じゃない？」
マリー「え？…えちょっ、恥ずかしっ…！？」
顔が熱くなるのが判る…まさに、穴があったら入りたい…
カプセルはそんな私の考えなんて意にも介さず、続けた。

『これから　このカプセルを記録として　残していくことにする。
後に　あたしに続いて来る者のために。』

『今、これを聞いてるなら　判るはずよ。この惑星ラグオルに
何らかの異変が　起きつつあることを。』

『忠告しとくわ。気を抜かず、常に周囲に気を配ること。
もし　生き抜くことを望むなら、ね。』

音声はそこで終わっていた。
私達に突きつけられた唐突な真実。

マリー「…惑星ラグオルって、どこ？」
エミリア「ええと…ごめん、わかんない」

ナギサ「要するに他の星だろう？言葉が理解できるだけ良いじゃないか」
マリー「あ、そっか…グラールじゃないのに言葉が判るってことは

…」

エミリアがうん、と力強く頷いた。
…目が輝いてるのは科学者故の本能、なのかな…

エミリア「誰かここに住む人に会えれば何とかなりそう！」
ナギサ「…だが、どこに人がいるんだ？こんな森の中に」

マリー「あ、そのカプセル追いていった人捜せばいいんじゃないかな？」
エミリア「ナイスアイディア！じゃあこのカプセルを探してこの…リコ？の
足取りを追おう！」

ナギサ「リコ…リコ、か…」
マリー「ん～、ここから見える範囲には…あ、あれかな？」

エミリア「行ってみよう！」

ーーー森、セントラルドーム近辺ーside：エミリア・ミュラー

エミリア「…ふぅ。結構歩いたけどあんまり無いもんだね」
ナギサ「そうだな、ここにあるので３つ目か。…ところでエミリア、マリーは
さっきから後ろの方で何をしているんだ？」

ナギサにいわれて振り返ると、何やらマリーが…土をいじってる？

エミリア「さぁ、なんだろうね？さっきまでカプセルがあったところにしゃがんで
　　るけど…」

ナギサ「珍しいな、彼女が私達から離れて歩くなんて」

確かに言われてみればそうかもしれない。
マリーがあたしたちと離れて歩くなんてそうそう無いことなのに。

エミリア「…まぁマリーなりに何か考えてるんじゃない？それはそうと、これ先に
　　片づけちゃおうよ」

そう言うとあたしは、回収してきたメッセージカプセルを足下に広げる。
数は全部で3つ…内一つは元からここにあったものだけど。

ナギサ「ああ、そうだな。どうする？順番にまとめて聞いてしまおうか？」

エミリア「その方がいいね…おーい、マリー！カプセルの中身聞くからこっち
　　おいでよー！」

マリー「…っと。はーい！今いくよ！」

たったった、と小走りでマリーがこっちにくる。

ナギサ「さあ、再生を…エミリア、どうやってやるんだ？」

エミリア「ああ、ほれほれ貸してごらん？…ここを押すと…」

ピッ、と軽快な音とともにメッセージカプセルが起動して、最初に見つけた
カプセルの中身と同じ声が再生される。

『おかしいとは　思ったんだ。森の動物が　こんなにも
人を襲うようになるなんてさ。』

『この間までは　どの動物も　みんな　おとなしかったのに。』

『何か　きっと原因があるはずだから、それを探ることにする。』

『ほとんど　商売抜き。あたしも　酔狂なことだ。』

『こんなことやってるから　祭り上げられるのかしらね、
レッドリング・リコとかいって。』

『でも　あたしは、そんな大層な人間じゃないし。』

『みんな　英雄が欲しいんだ。そこに　あたしが　たまたま
ハマっちゃっただけ。』

マリー「…あれ、終わり？何とも半端な…」

エミリア「まぁまぁ。二つ目行くよ…っと」

ピッ

『どうだろ?その辺の動物の死骸は。』

『あたしら　ハンターズの使う火器といえば、いいとこ
レンジャーの使うアームズ系。でも　これは…』

『あたしらの手によると思えない強力な火器で　倒されてる…!』

ナギサ「アームズ、とは?レンジャーが使うなら銃なのだろうが…」
エミリア「あー、はいはいストーップ。三つ目流すよ~?」

ピッ

『大変なことが起きた…!大きい地鳴りと共に　地下から
何かが　吹き上がってきて…』

『セントラルドームで大爆発が…あれじゃ　中は…!』

『…何を言って良いか　判らない。』

『この惑星に降りて　7年、せっかく　みんなで　ゼロから
環境を　整えてきたのに…』

『いったい何があったの?ここんとこの異変と　何か　関係がある
の?』

マリー「…えーと、エミリア?ちょっとだけ単独行動して良い?」

エミリア「…珍しいね。りょーかい、あたしたちここにいるからさ、用事
ちゃちゃっと済ませて来ちゃってよ」

マリー「ありがと、すぐ戻るね！」

そう言うとマリーはさっき来た道を駆け戻って行ってしまった。
…ちょっとだけ、心配だけど。マリーなら大丈夫だよね。うん。

かと思いきや、さっきまでしゃがんでたところで…また何かしだした？
本当何してるんだろう、マリーってば。

なんて考えていたら。

ナギサ「…リア？エミリア？」
エミリア「はぇっ！？ああ、はいはいなんでしょう？」

ナギサ「少し気になる点があって…あれはモニュメントだろうか？」
エミリア「え？どれどれ？」

そう言い、ナギサが指を指す方を見ると。
成る程、そこには明らかに人工のモニュメントらしき柱があった。

エミリア「うーん…調べてみよっか」
ナギサ「しかしここを動いてはマリーが…」

エミリア「あ、じゃあナギサはちょっとだけここで待っててよ！あたしが
ちょいちょいって調べてくるからさ！」

ナギサ「…それなら。すまないなエミリア」

エミリア「なぁに水くさいこと言ってんのよ！じゃ、ちょこっとだけ待っててね？」

ナギサ「ああ、行ってらっしゃい」

とはいえ、そんなに離れてないんだけど。

距離にして５０メートルくらい、軽く走ったら本当にすぐ着いてしまった。

エミリア「んー……ん？何だろこの柱、随分経年劣化してるなぁ…」

確かさっきのメッセージカプセルによるとリコ達がこの星に来たのは7年前。

でもおかしい、この柱の劣化の仕方をみると明らかに7年どころじゃない。

エミリア「おっかしいなぁ…」

といいつつ手を触れると。

ゴゥン、という音とともに柱がオレンジの光を放ち始めた。

エミリア「うわあ！？…び、びっくりしたぁ…何ともないから触っても大丈夫

だとは思うんだけど…っと、あれ？」

さっきまで何もなかったのに、柱のオレンジの光とともに文字のような物が

浮かび上がってきていた。

エミリア「ふふーん、あたしに読めない文字など！…あり？何だろこれ、全然
読めないや…」

悔しいけど、持ち合わせの翻訳ツールを試してみる。
…知らない言語、か。…絶対解読してやるんだから…！

エミリア「…断片的にしか判らないなぁ。光…影…対……無く…？」

何だろう、何かのを示唆しようとしているのは判るんだけど。
…首を傾げていると、後ろから足音が二つ。

ナギサ「エミリア、マリーが帰ってきたから連れてきてみた。何かわかったか？」
エミリア「ああ、ナギサ。んとね、何かを示唆しようとしてるのは判るんだけど…」

マリー「光、影、対…無く…？んー、何だろうね？」
エミリア「え！？マリーあんた読めるの！？」

つい声を張り上げてしまう。
だって、マリーは今翻訳ツールなんて立ち上げてないんだから…！

マリー「ひぁっ！？あ、何かごめん！」
エミリア「あ、いや、怒ってるわけじゃないんだけどさ…」

マリー「あ、そ、そうなの…いきなり大きな声出すから驚いちゃって…」
エミリア「ああ、ごめんごめん。え、でもあんた何でこれ読めたの

…？」

マリー「んー、正直言うとわかんない。何かこんな感じかなーって…」

エミリア「ちょ、直感ですか…」

全く、マリーにはいつも驚かされる。

…気が弱いかと思ったら我が強かったり、ヒトみたいでキャストだったり。

…まぁ、嘘が下手っぴなこいつが言うなら本当に直感なんだろう。

エミリア「あんたのそういうところ、凄いと思うわ…」

マリーがきょとん、として小首を傾げる。

エミリア「ああ、気にしないで。…ええと、じゃあ探索続けようか？」

ナギサ「エミリア、それならあの洞窟の方に行ってみないか？」

マリー「洞窟の方？…っていうと、ＶＲだったら確か奥にはドラゴンが…」

エミリア「うーん…でもまあ、ＶＲではあんな状態でも勝てたし。行ってみよう？」

マリー「う…ん。あんまり、気が進まないけど…」

ナギサ「何だ、怖いのか？」

ナギサがマリーを煽る。…いつもならマリーがムキになって進み出すのだけれど。

マリー「うん。怖いよ？」

…何かがおかしい。

エミリア「マリー、大丈夫？本当にイヤならあのセントラルドームだっけ？の方に
　　行くけど…」

ナギサ「…マリー、挑発してすまなかった。だが、私は向こうに行かなければ
　　ならない気がするんだ」

マリー「……」

マリーが俯いて何かを呟く。

小さすぎて一部しか聞き取れなかったその単語は。

エミリア「…依り代？」

はっ、という顔をしてマリーが顔を上げる。

…目には、静かな決意の色。

マリー「…ううん、何でもない。こっちこそごめんねナギサ、行こう…か」

ナギサ「…感謝する。進もう」

ーーーーーーーーーー

あたしはこの時、彼女たちが何かを感じ取っていることに気づいて

はいた。
気づいてはいたのだけれど、それが何かは判らなかった。

今にして思うと、それはあたしも感じていたのだ。
本能が鳴らす警鐘。

メッセージカプセルにあった凶暴化したモンスター達とあたし達は出会ってなく。
…あたし達は本物のドラゴンの恐ろしさをその身を持って体験することとなる。

Ｇｒｏｗｌ，ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｄｅｐｔｈｓ　ｏｆ　ｅａｒｔｈ（前書き）

今回はドラゴン戦だけになりますＡｎｇｅｌｉｃａです＞（＿＿）＜

直接戦闘する訳じゃないイベントなので…
ストーリーの筋は結構変わると思います。これから。
…原作通りにやると主人公が空気過ぎｔ（黙

そ、それではどうぞ！

ーーーセントラルドーム地下：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

『移住のための　急激な開拓で、知らず知らず
惑星の生態系を　破壊してしまっていたのかもしれない。』

『それで、原生生物が　侵略者を　排除しようとした…
そんな推測は　できる。』

『でも、だったら　あの爆発は？』

『情報が足りない。もっと　調査が必要だわ。』

ナギサ「地下に入った途端にメッセージカプセルか。やはりリコは
　この先のようだな」
マリー「そうだね。でもこの先は確か…」

そう言いながら歩いていると、ドーム状の広い空間にでた。
エミリアと顔を見合わせ、苦笑いを交わす。

エミリア「ＶＲだとボスだった、よね？」
マリー「うん。これ倒せたら帰れたりしないかなぁ…」

ナギサ「？二人とも、何の話を…」

ナギサの言葉は最後まで続かなかった。

理由は一つ。

倒さなければこちらがやられる敵の存在に、彼女が気づいたからだ。

マリー「あー、あの時より一人少ないけど…倒せる、かな？」
エミリア「倒せるかどうかっていうかやらなきゃやられる感じだね」
ナギサ「二人がそこまで警戒する相手なら私も気は抜くまい。
…全力を出さないとやられてしまいそうだしな」

思い思いの言葉を交わしながら、それぞれが武器を具現化させる。
もちろんスタンモードなんて入れていない。

エミリアはクラーリタ・ヴィサスを。
ナギサはスティールハーツを。

そして私は、剣影を。
鞘から抜き放ち、気を張りつめる。

敵はどこから来るのか、これは訓練ではないから判らない。
けれど今まで磨いてきた戦闘センスを発揮できれば、大体は掴めてくる。

私は静かに目を閉じて、呼吸を整える。
足の下に伝わる小さな振動。前後左右どこからでもない、ということは…！

マリー「二人とも今すぐここから離れて！ドラゴンは下から来るよ

！」

返事はない。彼女たちは返事をする前に待避を始めたからだ。
言いながら私も走り出していた。足下に伝わってくる振動が大きくなり、そして。

グルルァァアアアア！！！

耳をつんざく轟音と、それとともに吹き出す溶岩。
強襲の回避に成功した私がみたドラゴンは、ＶＲのそれとは全くの別物だった。

外見の問題ではない。ひしひしと伝わってくる「狩る側」の生物特有の威圧感。
それは紛れもなく本物で、思わず膝が崩れそうになる。

と、そこに。

エミリア「マリー！大丈夫！？」
マリー「…っ！うん！大丈夫！」

そうだ、私は一人じゃない。
背中を押してくれた声に応えるように、背筋を伸ばす。

…エミリアに戦闘のノウハウを教えたのは私なのにな、そんな基本のことを今
教わるなんてまだまだ、だね。

ズシン、という振動と同時にドラゴンが空中から降りてくる。
もう、威圧感なんて感じない。

マリー「ナギサ！ドラゴンの翼をお願い！牙と爪に気をつけて！」
ナギサ「了解した！…はああっ！」

エミリア「後方支援は任せて！」
マリー「ありがとう！火球と突進には注意してね！」

私の仕事は何か。
攻撃力だけならナギサが上だろう、なら。

マリー「ふっ！」

私は尻尾を切り落としてドラゴンの戦力を落とす！

ナギサ「はあああああ！」
マリー「やあああああ！」

と、こちらの出鼻をくじくように突然。
ドラゴンが、くるりと少しだけ向きを変えた。

マリー「あっ…ナギサ！ダメ！」

私の制止は間に合わず、ナギサはグランドクラッシャーの動作に入ってしまう。
ドラゴンが、頭をナギサの方に向けた。

少しだけ開かれた口から炎が漏れているのが見える。
まずい、あのままでは…！

ナギサ「なっ……！」

一瞬ためらってしまったナギサの一撃は、ドラゴンの角に弾き返される。

ナギサ「……しまった！」

エミリア「ナギサ、今助けに…！」

マリー「ばかっ、エミリア！今はダメ！！」

エミリア「えっ？…きゃあ！」

マリー「くっ！」

考えるよりも先に足が動いていた。

驚くほど冷静に状況が見えていた。

エミリアとナギサの距離は三メートル弱。

ドラゴンの炎は大きくなっていく。

時間がゆっくり流れるような錯覚に囚われながら、必死に足を動かす。

ここからなら、エミリアの方が近い！

走りながらエミリアを脇に抱え、ナギサの方に向かって一気に頭から跳ぶ。

最悪私なら、修理すれば今ここで炎を食らっても問題ない。

けれど彼女たちはこのドラゴンの炎には耐えられないだろう。

機械の体でよかったと、そう静かに思いながら二人を下にして倒れ

込む。

…けれど、私達に炎が浴びせられることはなかった。

？？？「たあああああ！！」

…この声はどこかで、なんて思っていると。

私達のすぐ後ろにドラゴンの頭が落ちてきた。

マリー「…え？」

エミリア「ご、ごめんマリー…」

マリー「いや、大丈夫…だけど、これ」

私が二人の上から体をどかしてドラゴンの頭を見えるようにすると。

エミリア「す、すごっ！ドラゴンを一撃で……」

マリー「いや、これは私がやったんじゃなくて…」

なんて話していたら、後ろからいきなり声をかけられた。

？？？「見慣れない格好ね。お前たちもハンターズか？」

エミリア「え？」

？？？「まぁ、いいわ。とにかくここは危ないからすぐにパイオニア１

に戻りなさい」

エミリア「あ、あの！ちょっと待って！…って、行っちゃった。

ハンターズ？パイオニア１？なにそれ？」

エミリアが一人で考え込んでいる間に、ナギサが一切言葉を発していないことに気がついた。

…頭でも打っちゃったかな、意識が飛んでるみたい…

マリー「…あー、エミリア？」

エミリア「ん？どったの、マリー？」

マリー「ナギサがさっきの衝撃で気絶しちゃって…ちょっとここで休憩
　してもいいかな？」

エミリア「ああ、結構な勢いで飛び込んだもんねぇ…うん、それなら
　ちょっと休んでいこう。さっきの人は気になるけど…」

マリー「あれ？エミリア、気づかなかった？多分さっきのがリコさんだよ。
　声がメッセージカプセルのと同じだったじゃん」

エミリア「…えぇーっ！？え、ちょっと追おうよ！早く！」

マリー「や、でもナギサが…」

エミリア「…う～っ、わかった。じゃ、ナギサが回復したら出発ね？」

そう言い、エミリアがドサッ、という音を立てて座り込む。

…地面に、ではなく…

マリー「了解、っと……エミリア？」

エミリア「はいはいなんでしょう？」

マリー「ドラゴンの首をイス代わりにするのはさすがにどうかと…」
エミリア「…うぇっ？きゃああ！！」

いつもは見せないような速さで立ち上がり、スカートをはたいて、
そして
またいつもは見せないような速さで、倒れているナギサの隣に座り込む。

これだけ騒いでも目を覚まさないナギサをみると、ここに待機するのは
長そうだな、と少しだけ苦笑い。

…彼女が本当にリコだとしたら、できれば早く追いつきたいのだけれど。
でも、ナギサを気絶させてしまったのは私だったりするので…

…やっぱり、強くは言えなかったりするのだった。

Ｇｒｏｗｌ，ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｄｅｐｔｈｓ　ｏｆ　ｅａｒｔｈ（後書き）

…こんな風にしてみたり。
戦闘描写は苦手です…でも上達したいので、ご意見、ご指摘、ご感想等ありましたらよろしくお願いします☆

それではｍ（＿＿）ｍ

Ａｒｅａ２：洞窟（前書き）

おはようございます、
あるいはこんにちは、
もしくはこんばんは。
Ａｎｇｅｌｉｃａです＞（＿＿）＜

色々考えた結果、私はこれをＰＳＰｏ２ｉのマップ準拠ではなく、
ＰＳＯのマップ準拠にしようかと思いまして…
洞窟の奥の清流があるところがとても好きだったので、インフィニ
ティで出なくてショックでした…

今回は少し構成に自信がないのですが…
矛盾点や引っかかる点などありましたら教えてくださるととても嬉
しいです！

それでは、どうぞ！

Ａｒｅａ２：洞窟

ーーーセントラルドーム地下：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

…状況を整理したいと思う。
確か元はといえば亜空間航行のシミュレーションの実験だけだったはず。

それからまぁ事故があって亜空間航行をしてしまって。
時空を越えてこのラグオルという惑星に来てしまった。

そして危ないところをこの星のリコって人に助けてもらって。
彼女を追おうと思ったんだけどナギサが気を失っちゃって。

少しここで休憩していこう、ってなった。
そこまでは…うん、まぁ、なんとか納得できる。

けど今なんで私は左足にエミリア、右足にナギサで二人も同時に膝枕してるんだろう？

いや、ナギサを膝枕ならわかるんだけど。気絶させちゃったの私だし。
何でエミリアまで…って、寝息たててるし。

マリー「律儀に膝を貸しちゃう私も私なんだけど…はぁ」

そんなこんなでもう10分くらい。そろそろ足がしびれてきたなぁ…
なんて思っていると、ナギサの瞼がピクリと動いた。

ナギサ「ぅ…うん…」
マリー「あ、ナギサ気がついた？」

頭の中ではまだ戦闘中だったのだろう、飛び起きようとするナギサを
抑えて膝枕の状態に戻す。

ナギサ「痛っ…頭がガンガンする…が、大丈夫だ。すまない、私は
気を失って
　しまっていたのか」
マリー「あはは…いや、元凶は私っていうか…ごめんね？」

ナギサは一瞬記憶をたどるような目をして、合点したように言った。

ナギサ「…ああ、いやこっちこそ庇ってもらってすまない。感謝す
る。
　そうだ、ドラゴンは？倒したのか？」
マリー「そう言ってもらえると助かるよ…倒した、って言っても私
たちは
　何にもしてないんだけどね？リコさんが来て、倒して
くれた」

ほら、とドラゴンの生首を指で示す。

ナギサ「…彼女はとんでもない実力者のようだな」
マリー「全くだよ、と。ほら、エミリア起きて？そろそろ行くよ？」

ムクッ、とナギサが起き上がったのを確認して、エミリアを起こす。

エミリア「ん…あと5分…」
マリー「そんな古典的なボケいらないから！…そろそろ足が痺れて来ちゃって
限界なんだって…」

ナギサ「貴女は足まで痺れるのか…難儀なことだな」
マリー「むしろ何で他のキャストが足痺れないのか不思議でたまらないよ…」

エミリア「…ぅう、わかったよ起きるよう…ふぁ…おはよ」
マリー「はいおはよう。さて、確かリコさんはあの転送装置から先に進んだよね？」

エミリア「うん、確かそうだったはずだけど…ナギサ、もう動いて大丈夫なの？」
ナギサ「ああ、おかげさまで。私のせいで待たせてしまったんだ、さぁ行こう」

マリー「失神状態から目覚めてすぐ動けるとかナギサって結構規格外だよね…」
エミリア「キャスト全体からみて規格外のあんたには言われたくないと思うけどね」

エミリアから鋭い切り返し。くそ、反論できない。

マリー「それを言われると痛いなぁ…」
ナギサ「ふふ、貴女こそ足は大丈夫か？」

マリー「逆に心配されちゃったよ！？大丈夫大丈夫、行ける行ける

！」

…明るく振る舞ってはみるが、どうにも心の中に残っている不安は消えない。

だって、このまま進んでしまったら取り返しのつかないことになってしまいそうで。

でも進むしか道はないなら。

精一杯あがくだけ。

マリー「…うん、大丈夫。行こ！」

そう言って、私は先頭に立って転送装置へと近づいていった。

ーーー洞窟：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

転送装置を抜けた先で私達を待っていた物は、想像し得なかった光景だった。

おびただしい数の原生生物の死骸。灼熱の溶岩。血液が蒸発し、発する悪臭。

いるだけで体力を奪われそうなこの空間は、ＶＲでは体感していない「現実」だ。

エビルシャークからナノノドラゴまで、死屍累累と表現するのがふさわしい。

そのすべての原生生物の致命傷であろう傷跡はとても鋭利で。
一撃でドラゴンの首を落とした、あの切り口を彷彿とさせた。

けど、何より私達の頭を満たしていたのは。
普段絶対に巡り会わない、この暑さのことのみだった。

エミリア「あっつぅ…」
ナギサ「言うなエミリア…よけいに暑くなる…」

マリー「パーツが灼ける…熱暴走しそう…」
エミリア「そっか、あんたは人工皮膚とはいえその下はさすがに金属か…
ご愁傷様です」

マリー「拝まないでエミリア…あ、あれ」
ナギサ「メッセージカプセルか。よく見つけたな…回収しよう」

エミリア「多分それ今とてつもなく熱いと思うから直接ナノトランサーに
入れちゃった方がいいと思うよ…」
ナギサ「わかった、ありがとう…よし、回収した」

マリー「幸い原生生物は皆リコさんが掃討していってくれたみたいだし、
死体の続く道を進めばリコさんに会えるかなぁって思ったり…」
エミリア「賛成。このあっつい中戦闘なんてしてたら倒れちゃうっての」

ナギサ「…リコは、私や貴女より規格外かもしれないな、マリー？」

マリー「なぜ私に振るのか…あ、ここ右に曲がるみたいだね」

通路を曲がって少し広い部屋にでる。
そこには、見覚えのあるモニュメントが建っていた。

エミリア「あり？これは確かさっきの森にもあったよね？」
ナギサ「ああ、覚えている。エミリアが調べに行ってくれたやつだな」

マリー「あ…ええと…あれ？何て書いてあったんだっけ？」
エミリア「『光…影…対…無く…』だね。マリーはあれ読めたじゃん！」

マリー「あはは、面目ない…」
ナギサ「しかしこれはまだ起動されていないのだろうか？森のは周りが光に
包まれていたと記憶しているが」

エミリア「ああ、あれは…この辺をちょちょいっとな！」

相も変わらない面白かけ声とともに、エミリアがモニュメントに触れる。
すると、森にあった物と同じような不思議な光が柱を包み込んだ。

マリー「さっすがエミリア！ええと、なになに？…存在…無限…？」
エミリア「解読はやぁっ！？あたしの見せ場とらないでよ！」

マリー「…てへっ」
エミリア「『てへっ☆』じゃない！もう、無駄に可愛いのがまたムカつく！」

ナギサ「誉めているのか、それともけなしているのか…よくわからないな」
マリー「私、星まで飛ばした覚えはないんだけどなぁ…」

エミリア「天然!?」
マリー「ああ、ほらほらモニュメントの解析終わったんならそろそろ行こう?
早いとこリコさんに追いついておきたいしさ」

ナギサ「マリーのスルー能力は高いな…」
マリー「いえいえそれほどでも?」

エミリア「それこそ誉められてるのかわかんないよ…」

あはは、と笑って受け流し、モンスターの死骸をたどって歩き出す。
足下にあったメッセージカプセルを拾い、代わりに一つ物を置いて。

…こそこそやっているわけではないんだけど、なるべくなら知られたくない。
これは、一種の賭けだから。

ーーー洞窟、最奥部：ｓｉｄｅエミリア・ミュラー

あっついあっつい言いながら歩いてきた洞窟も、最奥部まで来たら空気が一変した。
溶岩ではなく、清らかな小川が流れているのだ。

驚いたことに、植物の自生までしている。…この花、なんて言うんだろう。
ふと花から目を上げると、目をそらしたくなる光景がそこにあった。
ナノノドラゴからギルシャークまで、ありとあらゆる生物が変わらず死んでいる。
中には見たことの無いようなモンスターまで死んでいる。

調べたくないかと聞かれれば調べたい。とても。
けど、隣で何かを思い詰めたような顔して歩いているマリーを見たら…

時間とらせて、ちょっとこいつらのこと調べるから。
なんて、言えない。

マリー「…」
ナギサ「…」

エミリア「…空気がとてつもなく重い…」
マリー「…?ん、ああ、ごめんねエミリア」

エミリア「いや、謝られてもあれなんだけど…あれ?」

モンスターの死骸をたどり続けて数十分。
私たちの眼前に広がってきたのは、大きな水路のような場所と。

その水路の上に浮いている、貨物運搬用と思われる…いかだ?
あれ、なんかこの光景見覚えが…

エミリア「これ、さ。イヤな予感しか…」
マリー「しないよねぇ…」

ナギサ「…ディー・ロレイでも出てきそうだな」
マリー「その気持ち痛いほどわかるよ…」

はぁぁ、と三人で揃ってため息。
でも手分けして周りを探して見てもこれ以外の移動方法なんて見あたらない。

渋々と私たちはいかだに乗り込んだ。
すると、こちらからは何も操作をしていないのに、自動的にいかだが動き出した。

…思ったよりは速いけど、目的地がわからないため何とも言いがたい。
三人で黙っているのもおかしいな、と思いつつふと、ナギサの方を見る。

…良い暇つぶしを発見した。

エミリア「そうだナギサ。あのメッセージカプセル再生しない？」
マリー「そうそう、それなら私も道中拾い上げてきたから聞いておきたいなって」

ナギサ「良い考えだな。よし、なら私の持っているやつから順に再生で良いか？」
「「異議な～し」」

マリーときれいにハモる。

顔を見合わせて、ちょっとだけ照れ笑い。

ナギサ「仲がいいことだな…じゃあ、再生する」

マリー「お願い！」

ナギサはおっかなびっくりカプセルを床（？）に置き、スイッチを入れた。

Ａｒｅａ２：洞窟（後書き）

こんな強引なところで何故切るかというと、終わらなくなりそうだからです（。ε　。；）
このままだと坑道まで行ってしまいそうで…
ＰＳＯ準拠と言いましたが、あくまでリコのメッセージカプセルとマップ構成のみだと思ってくださると光栄です（（（・・；）

なにかご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします（―｜―；）

ではでは☆

Ａｒｅａ３：坑道（前書き）

まだまだ続くよ時空を越えて、Ａｎｇｅｌｉｃａです＞（＿　＿）＜

今回は私史上一番長くなってしまったかもしれません…

超長文になってしまうと途中でぐだってしまわないかが心配で（（・・；）

あと、これまでのエミリアの名字の表記がパーシバルになっていたのをミュラーに修正しました。

細かいですが、ご連絡までに。

それではどうぞ！

Ａｒｅａ３：坑道

『すごいわ。この洞窟は　新しい発見にあふれてる。』

『見たことも聞いたこともない生物。この星で　これまで
存在を知られていない生物。』

『原生生物の亜種というか、突然変異したもののようにも思える。』

『政府が　ラグオル生態系の情報を隠蔽していたってこと?』

『だとしたら　なぜそんなことを?』

ーーーーーーーーーーーー

『思えば、パイオニア１には　おかしなことがいくつかあった。』

『あたしがたまたま見たデータでは、記録されている総人員数と
物資の消費量がかみ合ってなかった。』

『つまり、ＩＤを持っていない人間が　少なからず　いるってこと
?』

『なんで?どんな目的で?』

ーーーーーーーーーー

『ドキドキしてる。怖さと興奮が　ないまぜになった　この感情！』

『科学者としての探求心？』

『それとも、ハンターとして未知の敵に挑む　高揚感？』

『脚が　自分の脚じゃないみたい。…でも、確実に向かってる。』

『もっと　地下深くへ…何かに　導かれるように。』

ーーーーーーーーーー

『そもそも　これだけ環境が整った惑星に　知的生命体がいないのが不思議だった。』

『でも　見て　このモニュメント！森にあったのと　同じ！』

『あれは　やはり　我々が建てたものじゃなかった。やっぱり先文明はあったんだろうか？』

『でも、森のアレ以外　惑星表面にその痕跡はなかったように思える。』

『先文明があったならそれも　おかしい話…』

『この文字　解読できるかな。手元には　貧弱なツールしかないけど…』

ーー地下、大下水道：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

メッセージから得られる情報の質は、地上にあったものとそれほど変わらなかった。

現行政府への猜疑心と、彼女個人の興味。
…それと、この惑星にいる何かへの推測。

ただ一つ収穫があったものといえば、先文明の無かったであろうこの惑星にどこかの文明の手が入っているという事実。

何かに心を締めあげられるような感覚は消えないまま、再生は終わった。

マリー「…モニュメントの近くにあったので最後、かな？」
エミリア「うん、そう。でも…んー、何か引っかかるんだよなぁ…」

珍しく、というわけでもないが。
エミリアが妙に神妙な顔をする。

ナギサ「どうした？」
エミリア「いや、ええと…はっきり言える訳じゃないんだけどさ…」

ナギサ「？珍しいな、歯切れの悪いエミリアは」
マリー「きっと雨が降るんだよ」

エミリア「何よー！あたしが歯切れ悪くちゃ悪いってのー！？」

エミリアが神妙な面もちから一転、いつものように表情豊かになる。
うん、やっぱりエミリアはこうじゃなきゃ。

マリー「あはは、冗談冗談。ゆっくりでいいからさ、話してみてよ」
ナギサ「悪いのは歯切れだけで、エミリアが悪いとは言ってないぞ？
　　マリーの言うとおりだ、ゆっくりで良いから続けてほしい」

エミリア「二人揃って全く…」

ぶつくさ言いながらも説明を始めてしまうのはエミリアの良いところだと思う。多分。

エミリア「ええっと、リコのメッセージの中にさ、『何かに　導かれる
　　ように』ってあったじゃない？」
マリー「ああ、『奥深くへ～』、ってやつだね」

エミリア「そうそう。それさ、最初にこの惑星に来たときナギサも同じ
こと言ってなかったっけ？」
ナギサ「ああ、確かに私も引っ張られるような感覚はあったな」
エミリア「でね？ナギサのその感覚って…あたしが実際に見た訳じゃなくて
こいつからの伝聞なんだけどさ？」
といい、エミリアが私を指さす。…ヒトを指さしちゃいけないのに。でもあえてつっこむような雰囲気でもないし、じとっとした視線を送る。
エミリア「ナギサ、欠片を探すときもその感覚あてにしてたよね？」
ナギサ「！…ああ、まさにその通りだ。そして、地上で感じたのも…非常に少しではあるが、あの感覚に似ていたような気もする」
マリー「…嫌ぁな予感がいっぱいだねぇ」
エミリア「できれば外れて欲しいねぇ…」
ナギサ「だ、だがアレは滅ぼしたはずじゃ…！」
エミリア「ワイナールはこう言ってた。『これは滅ぼすことのできないお前を
永久に閉じこめておくための棺だ』、ってね？」
マリー「…うん、エイダの言うとおり万全の装備をしてきておいて本当に
よかったって今心から思ってる…」
エミリア「ま、一つの仮説にすぎないんだけど。…あんまり気にし

ないでね？」

ナギサ「何、もう一度対峙することがあったらまた打ち負かせばいいだけだ」
マリー「おお、ナイスポジティブシンキング！」

エミリア「そゆこと！…あれ？いかだが減速してきたね」
マリー「あそこに桟橋みたいなのがあるよ！着いたかな？」

さっき乗り込んできた方向とは逆の岸に、いかだの高さの桟橋があるのを発見。
やっと降りられるのか、と腰を上げようとしたそのとき。

ナギサ「そうらしいな…な、何だっ！？」
エミリア「うわぁ！い、いきなり叫ばないでよナギサ！心臓に悪い…」

ナギサがいきなり叫び、武器を構えて戦闘態勢に。
何事かと一応武器を構えてはみるものの、敵の生物の気配はない。

マリー「…何も、いないみたい？」
ナギサ「いや、さっきまさにディー・ロレイほどの大きさの影が水面に浮かんで
　　また沈んでいったのが見えたのだが…」

エミリア「…またボス級っ？」

エミリアが杖を構えて、器用なことに静かに叫ぶ。
…水面にナギサが見たという影が浮かんでこないまま、いかだが桟橋に着いた。

嵐の前の静けさとでも言おうか、異様な静寂が空間を支配していた。

マリー「ゆっくり降りて、1人ずつあの扉まで進もう。で、最初の一人が
　　扉が開くかどうかをチェックして。開いたら、そのまま中に。
　　開かなかったら…」

ナギサ「最後の一人が来るのを待って、扉を破壊して突破だな。了解した」

桟橋から扉までは長めに見積もって15メートルくらいだろうか。
走れば何て事無い距離だが、走った音で見つかってしまっては元も子もない。

エミリア「おっけー…最初あたし降りるね？」
マリー「じゃ私最後に行くよ」

ナギサ「私は2番目か。エミリア、いつでも良いぞ」

おっけ、と声になっていない声でエミリアが返事をする。
どこかで、魚が跳ねるような音がした。

マリー「…やばい、かも」

エミリアが扉までたどり着き、ロックの有無を確かめる。
ジェスチャーは…両手で大きな丸。

ドアに鍵はかかっていない。

ナギサ「続く。…貴女も、できれば速く来た方がいいと思う」
マリー「同感。…でも、順番は順番。速く！」

足音はなく、滑るようにナギサがエミリアのところまで行き着く。
…このまま何事もありませんように、と願って一歩を踏み出す。

…現実は、いつだって非情なものだ。

桟橋に片足をかけたところで、乗員という重りを無くしたいかだが少し揺れ、水面に波が走る。

チャポン、という気の抜けた音とほぼ同時に、遠くから船が近づいてくるような音。

顔から血の気が引くのがわかった気がする。
…キャスト相応の色白さになっているだろうな、今。

水の中では音の波は空気中より3倍速く伝わるんです、なんてエイダが
言っていたような気がする。

ざばざば、と船の近づいてくるような音は段々大きくなる。
…船と違うのは、エンジン音がしないということ。

マリー「……走ってえ！！」

叫び、自らも走り出す。

ざばっ、と何かが飛び出す音を冷静に聞きながら、頭の中は大混乱。

脚がもつれそうになる。

脚がもつれたら終わり。

極度の緊張、死の恐怖。

私の脚は、…ちゃんと仕事をしてくれた。

エミリア「マリー！ヘッドスライディングして！！」

返事をする余裕なんてない。

おそらく『何か』の攻撃が私の頭を狙ってきている。

ほとんど反射で、私は扉の中へ頭から滑り込む。

後頭部を何か細長い物がかする。

起きあがる前に、ナギサが私を引っ張り奥へ引きずり込んだ。

それとほぼ同時に、エミリアがドアを閉める。

…パネルをいじっているところをみると、恐らく手動でしか開かないように設定しているのだろう。

何はともあれ、一難は去った。

マリー「あ、ありがとう二人とも…」

ナギサ「いや、礼には及ばないさ。一番危ないところを貴女に
やらせてしまったからな」

エミリア「そゆことそゆこと。ほら、立てる？」

エミリアが手を貸してくれる。
その手を取って、何とか立ち上がる。

マリー「あはは、膝笑ってるや…でもまぁ、大丈夫。進めるよ」
ナギサ「無理はしないでほしい…まぁ、大丈夫というなら進むが」

エミリア「キツくなったらいいなよ？じゃ、進もう！」
マリー「うん！」

ーーー坑道エリア：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

緊張が解け、襲いくる疲労感との戦いになる。
アドレナリンが分泌されるところまでヒトに近いと、こういう時に辛い。

ナギサを先頭に、エミリア、私と続く。
黙々と歩いているだけだと、何だか余計に疲れる気がする…。

何か目的を、と探したら目に付くのはやはりリコさんの残していったメッセージカプセル。

それらを回収し、二人から少し離れてこっそり置き土産。
…役に立つかは、わからないけれど。

マリー「それにしても、代わり映え無いねぇ…」

先ほどのモンスターから逃げて転がり込んだこの場所は、研究所のよう。
無機質な通路と部屋を交互に見ていると、同じ所を回っているかのような
錯覚に陥る。

エミリア「大丈夫大丈夫！地図つけながら来てるけど、まだ迷ってないよ」
ナギサ「何だ、てっきり私はもう迷っているものかと思っていたぞ」

マリー「ナギサ、そういうときは言おうね…？」
ナギサ「ああ、次からはそうする」

あっけらかんとするナギサに、エミリアと顔を見合わせ、ため息。
ていうか、それなのにナギサ先頭歩いてたの…？

ナギサ「というわけで私は道がわからないんだ。エミリア、案内してくれ」
エミリア「はいはい…じゃあこの部屋から向こうに行ってみよう！」

エミリアが指で示した方向に歩いていくと、今までとは違う、Ｌ字の部屋にでた。
Ｌ字の角に、見覚えのある…

エミリア「あー！またあのモニュメントがあるよ！」

マリー「これで合計3つ目か…そろそろ全文解読できるかな？」

私が言い切るより前に、エミリアが柱に駆け寄る。

ナギサ「さあ。私にはさっぱりだ。難しいことは任せた」

エミリア「ええと、この辺を…」

会話が成り立ってないなぁ、なんて考えていると。

例によって例のごとく、モニュメントが光に包まれる。

エミリア「お！今回で全部解読できそう…」

そういうと、エミリアがなにやらしゃがんでぶつぶつ言いだした。

…しゃがんだのに、気付かないのかなぁ？

マリー「…エミリアの足下にあるメッセージカプセルには突っ込まない方が
　　いいかな？」

ナギサ「エミリアが喋りきったら拾い上げよう。邪魔をしては悪いからな」

マリー「それもそうだね」

そうして待つこと数分。

エミリア「読めたぁ！」

ガバッ、と擬音付きでエミリアが立ち上がる。

マリー「おめでとう！それで、何て書いてあるの？」

エミリア「ふふーん、えっとね？『光ありて　影を成し　対ありて
対無く
不在の在　かかる姿の　転生の　宴　無限なる　律
ここに　印
結びなさん　ムゥト　ディッツ　ポウム…』って書
いてある。
んー、どういう意味なのかな？」

ナギサ「それなら印とは多分、この柱のことではないだろうか？
このマークとか、いかにもそれらしいのでは？」
マリー「うーん…わかんないね。エミリア、リコさんのメッセージ
カプセル
再生してみる？」

エミリア「そだね。何かヒントあるかもだし。…道中拾ってきたの
もついでに
聞いちゃいますか！」

ーーーーーーーーーーーー

『このあたり…明らかに　手が入っている。あたしらの文明の。』

『何のために　こんな地下まで　穴を　掘ったんだろ。』

ーーーーーーーーーーーー

『そいいえば、地上のものと別に地下工場を建設する予定があったはず。
そう　聞いたことがある。』

『それと　何か関係があるのだろうか。
その工場で新しく開発されたメカとか。』

『それとも、地下工場建設といって　何か　別のことをしていた？
…それは　考え過ぎかな？』

『いや、情報操作なんて　無い話じゃない。』

『結局　あたしらは　何も聞かされちゃいない。』

『政府筋は　あたしらハンターズにキビシイしなぁ。
利用するときは　利用するくせにさ。』

ーーーーーーーーーーーー

『これで　三つ目。複数で　何かの意味を　成すのかなぁ。』

『光…影…対あり…存在…無限…律…印…』

『いくつかの単語の意味は絞れても、文脈がつかめるまでは至らない。
くやしーっ！』

ーーーーーーーーーーーー

マリー「…ヒントらしいヒントもなかったね？」
エミリア「うん…この辺の端末に何か情報無いかなぁ？」

ナギサ「ああ、ここは見た目研究所だからあるかもしれないな」
マリー「じゃ、端末探しに行ってみる？」

エミリア「頼めるなら！」
ナギサ「道すがら、ここに来るまでも幾つかあったしな。ならば、先に
進んでいけば見つかるのではないだろうか？」

マリー「そうだね。じゃあ、さっさか進みましょうか！」
エミリア「おー！」

と、威勢良く歩きだしたはいいものの。
さすが研究所、次の部屋に端末はあった。

エミリア「なぁんか拍子抜けだなぁ…」
マリー「あはは、まあ探し回ってくたくたになるよりはいいんじゃ

ない？」

ナギサ「ああ、マリーの言うとおりだ。今はまだ遭遇していないから良いが、
もし警備のマシナリーなどに見つかったら面倒だからな」

エミリア「それもそっか。…うーん、何かここは生物学的な研究所っぽくて
めぼしい情報はないなぁ…お？何だろう、これ」

何だろう、って、何だろう。
何か、とてつもなく嫌な予感がする。

マリー「あ、あの、エミリア？よくわかんないキーは押さない方が…」

エミリア「…もう押しちゃったよぅ…」

と、その時。
壁に備え付けてあった赤色灯が、けたたましいサイレンとともに回りだした。

『ＡＩボル＝オプト、ハッキング検知。侵入者ヲ、排除シマス。非戦闘員ハ、
退避シテ下サイ。繰リ返シマス…』

マリー「…エミリア、何しちゃってるのよぉ！！」

エミリア「ごめんってぇ！！」

ナギサ「はは、凄まじい量だな。これは…」
「「「逃げるが勝ちっ！」」」

珍しく3人できれいにハモる。
けれどそんなことに感心している暇は、残念ながら、ない。

マリー「ちょちょちょ、ギャランゾがこんなにいっぱい！？嘘でしょ！？」
エミリア「後ろからはシノワがいっぱいだよ！！速く速く！！」

ナギサ「ここまで来ると壮観だな…！」
マリー「ナギサ感心してないでほら！こっち！」

何だか逃げてばっかり。
そんなことを思いながら右へ、左へ。通路を、部屋を、駆け抜ける。

すると、エミリアがふと部屋の隅を指さし、叫んだ。

エミリア「あの転送装置使えないかな！？」

見ると、確かに転送装置らしきものがある。
…勝手が分からないけれど、どうせ走り続けるなら少しでも遠くへ！

マリー「試してみよう！行こう！」
ナギサ「了解した！」

赤い光を放つ転送装置に駆け込み、どうにか起動する。
追いかけてきているシノワのうち1体が飛びかかってきたのが見えて…

景色は、急転した。

Ａｒｅａ３：坑道（後書き）

ながっ！いですねやっぱり…（。＿。；）

ですが自分にできる最短ルートがこれなものでどうかご容赦願います（汗

なにかご指摘やご感想等ありましたら一言くださると嬉しいです！

ではでは＞（＿＿）＜

Ａｒｅａ４：遺跡（前書き）

改めましてこんばんは、Ａｎｇｅｌｉｃａです＞（＿　＿）＜

いやあ、もうこの時期は精神がすり減ってすり減って…

勉強なんて大嫌いっ！（，；ω；）

さて、そろそろ現実から逃避行を繰り広げながらキーボード叩くのでよければおつきあい下さい！

それではどうぞ！

Ａｒｅａ４：遺跡

ーーー遺跡入口：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

マリー「う…酔った…」
エミリア「ちょ…何でこんなにぐらぐらするの…？」

ナギサ「…だめだ、目が回る…」

グラールのそれとは違う転送の浮遊感が私たちの平衡感覚を奪う。
いつもの転送をフリーフォールとするなら、この感覚はさながら
コーヒーカップのよう。

…つまり、とっても目が回る。

エミリア「ちょ、ちょっとタンマ…」
マリー「大丈夫、私たちも動けないから…」

ナギサ「そういえば、この星に来てから転送装置に乗るのは初めて
　　だったな…次はないように願いたいものだが…」
エミリア「本当に。柄にもなく心からそう思う」

マリー「…ふぅ、私はもう大丈夫かな。二人は？」
ナギサ「なに、これくらいどうということはない。慣れたぞ」

エミリア「え～…ナギサ、順応早いって…」

よくよく考えればエミリアは近頃研究ばっかりで体が鈍っているの

かもしれないかな、なんて思ったけれど。

そういえば祭りの警護とか星霊祭とか出たじゃん、と思い直し。
衰えをからかうのは無しにした。

マリー「もうちょっと待とうか？」
エミリア「いやぁさすがにそこまでは…うん、もう大丈夫。よーし、
じゃあちゃっちゃとリコのこと探し出しそうか！」

おー、と続いた声は私だけで。
…恥ずかしくなって拳を振りあげるのは途中で止まった。

そして、続かなかったナギサがおずおずと口を開いた。

ナギサ「あ～、エミリア？その、実に言いにくいのだが…ええと。
こ、この…何だろう遺跡だろうか？…入るのか？…
いや、
どうしても入らなければならないのか？」

自慢ではないけれど私は人の心情の動きには聡い方だと思う。
ナギサが入りたがらない理由は…焦りと、怯え。

ナギサらしくない、と茶化して強引に入るのは簡単だけれど。
あのナギサが引いているという事は、確実に何かがある。

マリー「ナギサ…何か感じるの？」
ナギサ「紛れもない、ヤツだ。ヤツが、この場所の奥深くにいる」

エミリア「…ダークファルス？」

ナギサが、無言でこくんとうなずく。

マリー「…中からリコさんだけ連れて帰って来るじゃ、ダメかな？」
ナギサ「事態は、常に最悪を想定しておくものだろう？」

ナギサの一言が全てを語っていた。
つまり、入ったら何らかの形でダークファルスと接触がある。必ず。

エミリア「…それでも、中に入らなきゃあたしたちはグラールに帰れないかもしれない。あたしは、入るべきだと思う」

ナギサは？と、エミリアが目で訴える。
それに対し、ナギサは目を伏せがちに言った。

ナギサ「正直なところ、私は入りたくはないんだ。今思い出しても…体の中を這われ、内側から闇に食われていくような絶望感。
ヤツは必ず素体を欲する。一度体内にヤツを飼った私は…」

言葉は、続かなかった。
自分の腕を抱き寄せ、小さく震えているナギサは久しぶりに見た。

それほどまで、彼女の心には大きな傷があるのだろう。
決断は、私に委ねられた。

マリー「…」

適当に決められる問題じゃない。

マリー「…私は」

ナギサとエミリア、両方を視界に捉え、言う。

マリー「私は行くべきだと思う。理由は一つじゃないけれど…でも。
多分ここで行かなきゃダメなんだと思う。…ナギサ、素体の
条件って何？」

ナギサ「一番は優秀であること、だ。分野は問わない。頭脳、体力…
私は戦闘能力において、だった」

エミリア「…ちょっと待って？リコってさ…」

記憶を引っ張り出すような仕草をして、続ける。

エミリア「学者で、あの戦闘能力で、英雄視されるほどで…条件、
クリアしちゃってない？」

ナギサ「いや、まだだ」

ナギサが即答する。

ナギサ「彼女が希望を持って行動してたら素体とはなり得ない。
外からヤツが入るには絶望感、悲壮感、とにかく負の感情が
必要不可欠なんだ。だからワイナールは最後に欠片を使って
強引にヤツを…」

負の感情、と言われふと、思い当たる。

…メッセージの一節。

マリー「…『この惑星に降りて7年、せっかくみんなでゼロから環境を
整えてきたのに…』って、最初の方で言ってたよね？そもそも
リコさんが本格的に調査を始めたきっかけがここからだとした
ら、最初から希望なんてなくて、疑心暗鬼のままに探索してる
ようにしか思えないんだけど…」

エミリア「『政府筋はあたしらハンターズにキビシイしなぁ。利用する
ときは利用するくせにさ。』っていうのも、そうだよね？」

ナギサ「…なんて、事だ」

ナギサが絶句する。

…状況は、思っているよりマズいかもしれない。

マリー「私は、リコさんを助けに行くべきだと思う」

エミリア「あんたが行くなら、あたしも行くよ？まさか一人で行かせる
わけないでしょう！」

ふと、ナギサの方を見る。

マリー「…ナギサ、辛いなら…」

ナギサ「いや、行く。頼む、行かせてほしい。もう私は、私のような…

そして、彼のような被害者は出したくないんだ」

静かな、それでいて芯のある声。
例えるなら、青い炎のような。…それは。

マリー「ナギサらしい、ね。行こう！」

入口は開かれていた。
まるで私たちを飲み込まんとするかのように。

ナギサ「ああ！」
エミリア「うん！」

それでも、私たちは突き進んでいく。
…一人では、ないから。

ーーー遺跡内部、ブロック1：ｓｉｄｅエミリア・ミュラー

威勢良く駆け込んだあたしたちを待っていたものは、まるでＳＥＥＤの浄化中、というような部屋だった。

残っている死骸はなく、血痕のみ。
しかも、明らかに既存の生命体のものじゃ、ない。

今度は調べたいなんて言わない。

…もしかしたら、一人の命がかかっているから。

終始無言で走っていると、マリーがいきなり立ち止まった。

エミリア「…どうしたの？」

マリー「声が…声がするの。……こっち！」

唐突に、マリーが閉じられている扉に向かって走り出す。

ナギサ「何を…！？」

次の瞬間、いきなり閉じられていたドアが開いた。

ロックを示す赤いマークがアンロックを示す青に変わっている。

エミリア「……声って、誰のよ！」

半ばやけくそになり、マリーの後を追う。

…どうやら、科学以外の力が働いているらしい事はわかった。

マリー「…リコさんのカプセル…」

やっと追いついた、と一息ついていると、マリーがカプセルを捜し当てた。

おもむろに、再生が始まる。

『ここのトラップも　かかると　身動き　とれないわ。』

『ひとりが　うらめしいわね。』

マリー「ヤバい、よね？」
エミリア「結構、ね」

ナギサ「！向こうにもあるぞ、行ってみよう！」

ナギサの一声に反射で駆け出す。
このまま辿っていけば最短距離でリコの元にいけるはず！

『窓から　遠くが見える…』

『かなり　大きな遺跡のようだ。こんな文明が　あったなんて。』

このカプセルはかなり窓際においてあった。
確かに、遠くにまで見えるこの建造物はかなりの規模だ。

マリー「…先文明は無かったんじゃなかったっけ？」
ナギサ「だがこれはどう見ても遺跡だ。先文明があったとしか…」

そういいかけたナギサが、ふと動きを止める。

ナギサ「…あれは、何だ？」
エミリア「あれって？」

ナギサが、指で示したその方向には。
異常なほど大きい穴があった。

水脈を貫通してるのか、上に続く壁からは所々水が噴き出してる。

エミリア「…行ってみよう！」
マリー「…うん」

何か胸につっかえるものを感じながら、穴の縁まで駆け寄っていく。
想像に違わず、そこにはカプセルがおいてあった。

『この大きな穴は…？』

『なにか　すごいエネルギーが吹き出したような…もしかして…！』

『セントラルドームは　これのおかげで…！？』

ナギサ「…なんなんだこの穴は…底が見えないぞ…」
エミリア「天井も見えない…どれだけ地下深くなのよ…」

マリー「…二人とも、そろそろ…」

ごめん、今行く。
そう言って私はマリーの元へ駆け寄った。

Ａｒｅａ４：遺跡（後書き）

どうも中途半端ですいません（（・・；）
や、切れが悪いの何の…！

リコさんは、登場シーンを遅らせてもらいました。
カプセルの内容の改変が自分的に許せませんで…（一＿一；）

また翌日にでも更新したいと思ってますのでよろしくお願いします！
ではでは～☆

Ａｒｅａ４：遺跡／２（前書き）

夜遅くにこんばんは、Ａｎｇｅｌｉｃａです＞（＿　＿）＜
…ＣｏＤをやっていたらこんな時間に…！

今回は、ストーリー的に大きくは進みませんが…

とりあえずさかさか綴りますんでおつきあい下さい！

それではどうぞ！

Ａｒｅａ４：遺跡／２

ーーー遺跡最奥部：ｓｉｄｅリコ＝タイレル

リコ「この単純かつ入り組んでる構造、線対称な外見…動力部。
　…もしかしてここって…」

誰とも無く呟き、自己完結する。
隣に人がいないから、独り言。

…あたしはいつも、独り言で完結させている。
仲間がほしい、とはちょっとは思った。

でも、そんなの本当にほんのちょっと。
地下に潜る度強くなる敵に、心が挫けそうになってるだけ。

あたしには仲間と呼べる奴らなんていない。
…考えると、少しだけ胸が苦しいけれど。

でも、あたしはいつでも一人で成し遂げてきた。
だから、今回だって一人で大丈夫。

自然と重くなる足を軽く叩き、歩く速度を上げる。
叩くために振るった手が、すでにもう疲労の限界なのを感じる。

思えばもう何体原生生物紛いの敵を切っただろう。
…数えるのは洞窟で二百を越えたあたりからやめている。

リコ「…あった」

探していたのはここに備え付けてある端末。
…そう、端末なんてものがある時点でここは過去の遺跡ではないのだ。

リコ「ええと、新しい情報は仕入れられるかなぁっと…」

手元の端末を無作為にいじる。
どうせ、古代の文字で読めないのだからこういうのは勘に頼るに限る。

そして、見覚えのない文字列を見つけたら翻訳を試みる。
…手元の貧弱なツールじゃ、まともな解析なんて出来やしないけど。

リコ「…やっぱり」

新たに得られた情報は、想像するに難くないものだった。

リコ「ラグオルに先文明なんて無かったんだ…」

この遺跡の本当の姿は。
宇宙船だ。

巨大な、古代に建造された宇宙船。
しかも内部にご丁寧に封印がされていた。

何を閉じこめていたのか、きっとあたしらはそれを解放してしまった。
何かを封じ込める、まるで棺のような宇宙船。

ムゥト、ディッツ、ポウム。
思えば今までにあった三つのモニュメント。

あれらこそが、この宇宙船の扉を開ける鍵だったのかもしれない。
…一つの事柄がわかると、連鎖的に次々と推測が出来る。

リコ「…くそ」

一段落ついて気が抜けたのか、膝が折れそうになる。
反射で耐えて立ち続けようとするが、足が立つのを拒否している。

リコ「ちょっとだけなら、いいよね…」

せめて顔から倒れるのだけは嫌だ。
そう思った私は何とか体を捻り、横向きに地面に倒れる。

リコ「師匠…本当に、死んじゃったんですか…？」

一度気が緩むと、もうダメだ。
押さえつけていた感情が止まらなくなる。

リコ「寂しいなぁ…こんなところで独りで死にたくない…な…」

負の感情がほとばしる。
…弱い心は、闇を呼ぶと師匠に教わったが。

なるほどこういうことか、とたった今理解した。
壁際に倒れたあたしの視界には、敵の姿しか見えないほどに。

音もなくこいつらはやってくるのだ。
1、2、…ああ、だめだ。動くな、数えられない。
焦りはなく、ただ静かな心があった。
…のだが。

???「はぁあああああーーーーっ!!」

心の静寂は、ヒトのような、機械のようなどっちともとれる声に
一瞬でかき消された。

ーーー五分前、遺跡：ｓｉｄｅエミリア・ミュラー

マリー「エミリア、何か嫌な予感がする」

歩いていると唐突に、マリーがあたしに言ってきた。
それはあまりにも唐突で、思わず間抜けな問いを返してしまう。

エミリア「具体的に言える？」
マリー「…何かが、手遅れになりそうで」
変わらず的を射ない答えを補足するかのように、ナギサが続ける。
ナギサ「壁や床に飛び散っている血痕の後が減っている。…倒される
頭数が減っているということだ。リコも、体力の限
界が近い
のかもしれない」
エミリア「というと…早く追いつかないとリコが危ないってこと？」
控えめに、けれどもはっきりとマリーがうなずく。
考える時間は要らなかった。
エミリア「それじゃ、道中の情報源は全無視で！リコとの合流を最
優先
しよう！異論は！？」
ナギサ「ない。早く行こう」
マリー「私もないよ。…走ろう！」
目指す扉は部屋の対角線上。
あたしたちは、各自の全力で進むことになった。
まぁ、一番遅いのは当然あたしなんだけど。
…あたしの目の前には、ナギサ。
もうすでにあたしたちとの差を引き離していくのがマリー。
あんなに必死なマリーは、今までに二回しか見たことがない。

…二回とも、世界を救ったときだ。

エミリア「マリーがあのモードに入ったら追いつけないよねぇ…」

ナギサ「…私もあれだけ速くなってみたいものだが」

エミリア「いやいや無理無理」

ナギサ「何、その程度は解っているさ」

何せあの速さは短距離の世界記録保持者並に速い。

一回計ったのだが、スピードガンが表示されるレベルだった。

…あたしたちは二人で、かつ出来るだけ速くどこにいるのか解らないリコの元へ向かっていった。

ーーー遺跡最奥部：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

風のように駆け抜ける、とはいえそこまでスムーズでもない。

なぜならドアが開くのには時間がかかるから。

早く開いて、とドアの前で念じていると。

…見たことのないモンスターたちが『何か』を壁際に包囲している部屋

に当たった。

マリー「！！」

モンスターがいて、侵入者の私に気を取られずに何かの方を向いている。
それだけで、答えは出た。

マリー「ッ……！はぁあああああーーーーっ！！」

携えた剣影を鞘から抜き放つ。
抜き放つ際に鞘の中で刀身を加速させ、居合い斬りを繰り出す。

上半身が下半身に別れを告げ、空中に霧散するモンスター。
同胞が殺されたことでやっと気づいたのか、他のモンスター達も皆こちら
に向き直った。

マリー「やぁあああああっ！！」

剣影のグリップを逆手に持ち変え、敵陣の中心を突破する。
壁際、最初に奴らが向いていたところまで歩みを進めると、赤髪の女性が
こちらを虚ろな目で見ながら倒れている。

マリー「リコさん！！」
リコ「あんた…誰…？」

なるほどごもっとも。
だが今はそんなことを話している時間じゃない。

マリー「しがない傭兵です！そんなことよりこちらへ！」

私は言うなりリコさんを半ば担ぐように肩を貸し、たった今きた道

を戻る。
幸い、まだモンスターの間の道はあいている。
そこを突っ切り、部屋の外まで一気に退避する。
その時、やっとエミリアとナギサが合流してきてくれた。

マリー「ごめん、先行っちゃって…」
エミリア「間に合わないより数千倍マシ。気にしてないよ？」

ナギサ「エミリアに同感だ」

二人とも優しいね、というのは声には出さずにおく。
…ふと、肩のリコさんの息づかいが変わったことに気づいた。

マリー「…リコさん？」

声をかけてみるが、反応がない。
手遅れだったの？嘘、そんなのって…

そう思ったところで、エミリアが言った。

エミリア「…よく寝てるねぇ～。よっぽど疲れてたのかな？」
マリー「え？ね、寝てる…？」

ナギサ「ああ、この息づかいは寝息だな。…ぐっすり寝ている」
マリー「えええぇぇ…」

エミリア「…とりあえず、起きるまで待とっか？」
ナギサ「ああ、そうしよう」

マリー「私の急いだ意味って…」

このあと、何故か三人を同時に膝枕する事になろうとは、
私はまだ思い至っていなかったのだった。

Ａｒｅａ４：遺跡／２（後書き）

ここ今回も中途半端ですすすすみません（（（＿　＿；）

正直終わる見込みが立ちません（。ε　。；）

次回はいよいよ奴が…？！

ご意見、ご感想などよろしくお願いします☆

ではでは☆

Ａｒｅａ４：遺跡／３（前書き）

こんばんは、
こんにちは、
おはようございます。Ａｎｇｅｌｉｃａです＞（＿　＿）＜

まぁた今回も引きの切れが悪い…
いや、ある意味いいのかな…？

戦闘に入っちゃうとなんだか文字数がおっそろしく増えそうなんで
（汗
とまぁ、どうかおつきあいください！

それではどうぞ！

Ａｒｅａ４：遺跡／３

ーーー遺跡最奥部：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

案の定、と言うところだろうか。
何故か眠りに落ちてしまったリコさんを硬い床に寝かせておく訳にもいかず、結局はまた私の膝枕。

仕方なく右膝で寝かしつけていると、ナギサがさも当然かのように左膝に。
その様子を見ていたエミリアが、あろうことか正面から膝の間に仰向けに。

…この子達には恥じらいがないのかな、私はちょっと…いや、結構恥ずかしいんだけど…？

一応キャストだし人工皮膚の奥は金属だから硬いと思うんだけどなぁ…
…エミリアかナギサに代わってもらおうかとも考えたのだけど。

「あたし（私）が寝れないじゃん（じゃないか）」とにべもなく…
私は正座でこれはいったい何の苦行だろう、と考えていたら。

リコさんの瞼がかすかに動いた、気がした。

マリー「…リコさん？」

声をかけてみる。

リコ「…ぅ…ん…？」
マリー「よかった、気がつきましたか？」

がばっ、と立ちあがろうとするのを緩やかに制して、座らせる。
…あれ？何だかデジャヴ…

リコ「ちょ、あ、え…んんん？」

リコさんが端正な顔をゆがめて頭の上に『？』を何個も飛ばす。
リコさんが起きたことに気づいたのか、二人がむくっ、と起きる。

エミリア「おはよう…軽く寝てた…」
ナギサ「おはようエミリアとマリー…ああ、リコもか。おはよう」

リコ「え？ああ、おはよう…って、お前ら誰だ？ハンターズか？」
マリー「…あの、ハンターズって、何ですか？」

リコ「え？」
マリー「え？」

思えば、私たちこの星の人に会うのって初めてじゃん！
しどろもどろになりながら何とか説明をしようとすると、エミリアがその役を買って出てくれた。

エミリア「ええと、まずあなたはリコ＝タイレルで合ってるかな？」
リコ「え、ああ。あたしがリコだが…何故あたしのことを知ってる？」

エミリア「あなたが置いてきたカプセルを聞いたの。それで、追ってきた」
リコ「ああ、そうか…そういえばあれはそのために置いてきたんだった…
あれ？おい、お前はあたし見たことあるぞ？たしか洞窟に入る前に…」

お前、と指さされたのはエミリアではなく私だった。

マリー「はい、助けてもらいました。あ、その節はどうも…」
リコ「ああいやご丁寧にこちらこそどうも…」

お互いに正座でふかぶか頭を下げる。
…何やってるんだろう、こんなところで。なんてことは、向こうも感じて
いるだろうと思う。

エミリア「ほらほら変な挨拶はいいから！」
ナギサ「ああ、それよりも今はそんなことをしている場合ではないだろう？」

マリー「そうだったそうだった…」
リコ「…いや、質問に答えてほしいのはあたしなんだが。お前ら一体何者だ？
見たことのない繊維の服装、見たことのない武器。それらは…？」

どこから説明すればいいだろうか、とエミリアに助けを求める。
…任せておきなさいってジェスチャーが帰ってきた。

エミリア「えっと、端的に事実のみを言うとね。あたしたち、この世界の住人
　　じゃないのよ」
リコ「…ごめん、頭は大丈夫か？」

エミリア「絶対言うと思ったよもう！」
ナギサ「…まぁ、怪しいセリフではあるな」

リコ「いや、すまない…続けてくれ。もう何があっても驚かないと思う」
エミリア「いいや、絶対驚くね。私たちが何でここにいるかというと…」

エミリアが簡潔に事情を説明する。
私たちはグラール太陽系からきたこと。そこでは資源の枯渇に貧窮しており、
その解決策として亜空間航行を発明し、実際に使用しようとして実験の最中に
トラブルでここにきたこと。

船が原因不明の故障で寄る辺がないこと。
現地の人にコンタクトをとろうとして辺りを探すが、あったのはリコさんの
メッセージカプセルだけだったこと。

色々あったようで、まとめてしまえばつまりはそれだけだった。

リコ「…にわかには信じがたい、が。嘘をつく理由もない、か。わかった。
　あたしはそれを信じるよ」

エミリア「ありがとっ。ええと、それで…リコはこの先に進むつもり？」

リコ「ああ、そうだよ。あたしは隠されている真実を暴かなきゃいけない。
　たとえ、自己満足に終わったとしてもね」

ナギサ「…そこまであなたを動かすものは何だ？」

リコ「正しいことを知りたいと思うことに理由が要るかい？」

マリー「…でも、全て独りでやらなくても！」

リコ「あたしだって…いや、何でもない。ともかく、あたしは先に進む。
　お前らは…」

エミリア「こっちから来たから、奥に進むならあっちだね」

リコの言葉を最後まで言わせないようにエミリアが割り込む。
…頑なになっている人の心を柔らかくするには先手をとる。これ重要。

リコ「…は？解ってるのか？これから奥は危険度も増すだろう。あたしでも
　お前らの安全は保障できないんだぞ？」

マリー「ああ、戦闘能力に関しては問題ないかも…です」

ナギサ「何故敬語なんだ…」

マリー「だ、だって…」

リコさんの眉間にしわが寄る。

…何だか不穏な雰囲気。

リコ「問題ない？このあたしでも苦戦する敵だぞ？ドラゴンで苦戦してたお前
らが太刀打ちできるとは思えない！」
マリー「ん～、とですね。あれは…以前戦ったこともあっての気の緩みとでも
言い訳しましょうか…」

リコ「以前！？」
エミリア「面目ない…でも、もう気の緩みはないから大丈夫！」

リコ「…いや、でも」
ナギサ「貴方は介抱してもらった恩を返さないつもりか？それはいけないな」

リコ「…わかったよ。その代わり、自分の身は自分で守ることが条件だ」

遂にリコさんの方が折れた。
…こんなでも傭兵だから、自分の他にも目を配る余裕はあるんだけどな…

マリー「それは大丈夫、です。じゃあ行きましょうか？」

今度は急いで走ることなく、私たちは遺跡のさらに奥へと進んでいった。

ーーー遺跡・動力室：ｓｉｄｅリコ＝タイレル

正直、こいつらを侮っていたかもしれないと思った。
この宇宙船の動力室らしい広い部屋に入ると、これでもかというくらいの
敵が現れた。…のだけれど。

カオスソーサラーのコアを的確に破壊し無力化し、カオスブリンガーの突進は
受け流しすぐに反撃に転ずる。

ダークベルラの腕を弾き、接近して背後をとる。
全て、戦いになれている者の動きだった。

エミリア「…リコ？大丈夫？ボーッとしてるけど」
リコ「あ、ああ。大丈夫。少し考え事をしていて」

ナギサ「何だ、私たちの実力に唖然としているのかと思ったのだが」
マリー「いや、さすがにそこまでではないと思うんだけどなぁ…」

ナギサの言うとおりだよ、とはなかなか言えない。
自分と同程度に強い仲間が嬉しいだけだ、とお茶を濁しておく。

リコ「…さて、生物のサンプルはゲットできたが。これはちょっと…
　　何というか。グロいな」
エミリア「単刀直入に言うねぇ…でもまぁ、グロいよね」

黒だか赤だか紫だか解らないマーブル模様がうごめいているんだ。
これをグロテスクと言わず何を言おう。

リコ「サンプル、情報…おかしい、もっと奥があるはずなんだが」

変異生物には多かれ少なかれ原生生物の原型があるのだけど。
ここの敵にそれらはないと言っていい。

…生物と言うより悪意の固まりと戦っている感じだ。
だが、その悪意に不純物が混ざっている。

生命体の細胞。それも、これは…

リコ「考えたくはないが…こいつら、元は人間か…？」

細胞からとれるＤＮＡ情報が不自然なくらい似通っている。
あたしたち人間と、だ。

マリー「ＳＥＥＤ汚染と同じ…やっぱり元凶は…」

ダークファルス。
マリーが呟いたその一言が、あたしの頭を貫いた。

リコ「うぁっ……くっ！！」
ナギサ「こ、れは…くぅ…！」

マリー「リコさん！？」
エミリア「ナギサ！！」

頭が割れる。

何かの思念が入ってくる。

怨み、哀しみ、怒り…

ありとあらゆる負の感情の波が押し寄せてくる。

ナギサ「く……そ、そんな…すでにこの段階まで…!?」
リコ「はぁ、はぁ…ナギサ、この感覚が何だか知ってるのか?」

ナギサ「ああ、嫌と言うほどな…くっ」

引いては寄せる、感情の波が次第に弱まっていく。
落ち着きを取り戻したあたしの目に、さっきまではなかった物が見えた。

リコ「…何だ、あの転送装置は?」
マリー「いつの間に…」

ナギサ「…この転送装置の先には、ダークファルス自体はいない。
けれど、
　なんだろう、同じような物がこの先で私たちを呼んでいる…」
エミリア「…行く価値は、あると思うけど。でも、いったら帰ってこれなく
　なるかもしれないってことも考えないと…」

エミリアの言い分はもっともだ。
しかし、あたしはあたしで感じている物がある。

リコ「…この先からだ。あたしを、ずっと呼ぶ声がするんだ。けど同時に、
　来てはいけない、とも言われているような…」
マリー「私はリコさんに任せる。進もうが進むまいが、結局はあの敵を倒さ
　なきゃ私たちは帰れない気がする」

ナギサ「私はこの装置の奥に進みたい。…導かれているなら、従おう。だが
　私と私の仲間に害なす物があれば私はそれを斬り伏せるまでだ」
エミリア「正直あたしはどっちでもいいんだけど…でも、この装置の先には
　何があるか解らない。慎重になってもいいかもしれないよ」

彼女らのリーダー格らしいマリーはあたしに判断をゆだねた。
…なら。

リコ「行こう。この装置の先に」

危険な敵でも、こいつらと一緒なら何とかなる。
そう思えたから。

「「「了解！」」」

私たちは未知の領域へと足を踏み入れた。

ーーー貨物運搬用エレベーター

エミリア「うっ…」
リコ「こ、ここは……？」

問いに答えたのは、三人のうちの誰でもなく。
空から降ってくる異形の物だった。

ナギサ「…見つけた！あそこだ！」
マリー「…！！あれって…！」

ナギサ「…奴も元はヒトだったモノのようだ。取り込まれてしまったのか…」

怪物が、一声何かを吠える。
聞いたことのない形容しようのない声。

けれどもしかしその声には、私のよく知る響きが混ざっていた。

リコ「うそ、でしょ……？まさかっ…！」
マリー「…リコさん？」

リコ「師匠！師匠ですか！？」
エミリア「え！？…あいつの元のヒトがリコの師匠！？」

怪物は答えない。
答えはしないが、この感覚を忘れるわけがない。

リコ「…あたしの師匠の名はヒースクリフ・フロウウェン。政府に公式に死亡を
　発表されていた軍の英雄。その死には不可解な点が多かった…もし、この
　姿にされてしまったがために死亡として隠蔽されたのだとしたら…！」
マリー「筋は通る、ね。でもそれが本当なら…」

ナギサ「ダークファルスに寄生されてしまった、のか。救う術は…」

この姿から救う術があるのか、とナギサの方を向く。
…ナギサの顔は、伏せられていた。

リコ「うそ、だよね…？ねぇ、ナギサ！」

帰ってきた声は、あたしが一番聞きたくなかった声だった。

ナギサ「寄生された人間を救う術は、その肉体を滅ぼすのみ、だ」

辛い現実、という生半可なものではなかった。
仲間もいず、親にも素っ気なく当たってしまった。

そんなあたしが唯一心を許したヒトが師匠だ。
その師匠を…殺す？あたしが、この手で？

師匠に教わったこの戦い方で？

リコ「……ダメだよ。あたしできないよ。師匠を殺すなんて…！」
ナギサ「このまま放っておくのは貴方の師のためにもならない！」

リコ「師匠は死んだと思ってた。でも怪物として生かされていて、その
　　怪物をあたしが殺す？…そんなの、できるわけ…ない…」

視界がにじむ。
あたしにも仲間ができたと思った矢先にこれだ。

仲間ができたなら過去の拠り所は要らないだろう、と言わんばかりに。
師匠を殺せ？弟子に？

…世界は、なんて残酷なんだろう。

エミリア「リコ…」
マリー「…」

聞き慣れた音が、私の後ろで聞こえた気がした。

リコ「ここまで独りでがんばってきたけど…結局あたし独りじゃ何もできやしないんだ！」

大切な人一人救えなくて何が英雄だ笑わせるな！
顔を伏せ、膝を突き、叫ぶ。

リコ「あたしは英雄なんかじゃない！！」

…ふと、背後から。
聞き慣れない男性の声が降ってきた。

？？？「お前は独りじゃない！」

Ａｒｅａ４：遺跡／３（後書き）

嘘だと言ってよバーニィ…

はい、ガンダムは当作品とは全く関係ありませんあしからず。
ハンターズの旦那も兄貴も嬢ちゃんも坊主も…彼らってパイオニア２の
メンバーなんですよねぇ…降りてくるの速いなヲイ（。ε。;）

突っ込んだら負けですね解ります（笑）

さてさてではまた明日！
お休みなさい～☆

，，ＩＤＯＬＡ，，ｈａｖｅ　ｔｈｅ・・・（前書き）

更新が遅くなりももも申し訳ないですＡｎｇｅｌｉｃａです（。ε。；）

いや、リアルがいきなり立て込みまして…
受験とか受験とか進路とかバイトとかいろいろ…

書き溜めがたまって行くばかりでなんと今回１万文字突破してしまいました＜＜；

…長いので、しおり機能など使いながら気長に読んでくださいますと嬉しいです☆

そそ、それでは、どうぞ！

，，IDOLA，，have the・・・

ーーー荷物運搬用エレベーター：sideマリー，M，ミスラ

私は、目の前の光景をそう簡単には信じられなかった。
だって、今リコさんに話しかけたのは。

リコ「ハンターズ…！？」

増援と呼ぶにふさわしい、見るからに戦闘職種の４人組。

リコ「どうしてお前らがここに！？」

問いに答えたのは、ライフルを携えた男性。

レンジャー「俺たちは、今までお前を英雄に祭り上げてお前の力に
　　頼りきっていた。だが、道中に残されていたメッセージ
　　が俺たちにお前の抱える不安や悩みを教えてくれた」

不可思議な表情をするリコさん。
…そうだよね、貴方の残したカプセルに入っていた内容はそういう類のモノじゃなかった。

リコさんが口を開くより前に、唯一の女性が歩み出て言った。

フォース「貴方はもう独りじゃない。私たちがいる！私たちがあなた

の力になる！だから……立ち上がって！」

ダブルセイバーを持った青年が言葉を続ける。

ハンター「そうだ！あんたは…英雄は一人じゃない！今この瞬間から、
俺たちとあんたは同じ仲間だ！仲間が集まれば、
奇跡は
起こせるんだよ！」

リコ「……」

リコが手の甲で目を拭って立ち上がる。

そこに、ナギサが声をかけた。

ナギサ「もしかすると、の域を出ない話だが。貴方の師匠の中の、
ダークファルスの細胞だけを取り除くことができれば…
彼を救える可能性は、あるかもしれない」

そこに同調したのはハンターズのうちの一人だった。

ハンター「話は早い、可能性はあるんだろう！？ならその可能性に賭け
ようじゃねえか！信じる心で、奇跡って奴を起こそうぜ！」

リコさんが返事をする暇は、なかった。

自分たちの遙か上に鎮座していたはずの敵が急降下してきたのだ。

エミリア「来るよ！気をつけて！」

各々が自分の得物を構える。
大剣、両剣、大鎌、長銃、片手杖、両手杖。

見事に種類の違う武器が揃う様は圧巻としか言いようがない。
しかしそんな中、私とリコさんだけが構えをとっていなかった。

リコ「師匠……」

瞳に映った一瞬の迷い。
けれど、そのすぐ後に宿った決意の色が、不安を吹き飛ばした。

マリー「リコさん…」
リコ「マリーか…なんだいその目。あたしなら大丈夫。ちょっと、
　　柄にもなく感動しちゃったり……何でもないっ」

くるりと、リコさんが皆の方へ向き直って言う。

リコ「ありがとう。あたし、戦う。奇跡を起こして…師匠を救う！」

その言葉を待っていたかのように、オルガ・フロウは雄叫びをあげた。
言葉になっているような、しかし聞き取れない何かを叫ぶ。

…私たちには、それが彼の発する救難信号のように感じられた。
ならば全力を尽くそう。私は、エレベーターの外側を落下してくる敵と
自分との距離を目測で測る。

マリー「…剣は届かないかな…なら」

使う武器は遠距離の物だろう。
私はナノトランサーの中から、ツインハンドガン…バトルストッパーを
取り出し構えた。

ほぼ同時にリコさんも赤のセイバーを取り出し、グリップを握りしめていた。
左手には、短銃ガルド。

リコ「やって…みせるさ！！」

リコさんが一声大きく叫ぶと、それが合図だったかのように戦闘が開始された。

ｌｌ，，ＩＤＯＬＡ，，ｈａｖｅ　ｔｈｅ　ｉｍｍｏｒｔａｌ　ｆｅａｔｈｅｒ

先手を打ったのはオルガフロウだった。
上方から落下しつつこちらに剣を突き立てる。

リコ「回避の時に縁まで行きすぎて落ちないように注意して！」
エミリア「了解っと！」

エレベーターの中心部分を貫いたその剣は、まるで実体がないかのように
傷跡を残さず抜けていく。

ナギサ「一体どういう仕組みなんだあれは…衝撃は伝わってきていたのだぞ？」
レンジャー「今は仕組みどうこうよりもどう奴を倒すかだ！」

マリー「むしろ足場が崩されないのは好都合だよ！でも食らわないように注意して！」
キャスト「ほう、お前…ククク。楽しくなってキタな」

唐突に、口を開いたのは今まで沈黙を貫いていた４人組の最後の一人のキャスト。

マリー「え？」
キャスト「いや、何でもない。…ほら、戦闘に集中しなければやられるぞ？」

その言葉で意識を戻す。
…何が面白いのかはさておいて。

フォース「下から来るよ！」

叫びが聞こえたその瞬間に感じる背後の凶悪な気配。
振り向きざまに、頭と思しき部分に向かってトリガーを引く。

連続で発射されるフォトン弾が効いていないかのように、オルガフロウは攻撃の

体勢をとる。

ハンター「前衛を代わる！あんたは下がってくれ！」
マリー「！…お願いします！」

そう言って私の横に駆け込んできたオレンジの影。
私はオルガフロウの方を向いて射撃をしながら後退した。

横をすり抜けて前に走っていく青い影と赤い影。
リコさんとナギサだ。

リコ「せいやぁっ！！」
ナギサ「はぁぁっ！！」

二人が繰り出したフォトンアーツは、近づいてきていたオルガフロウの頭に
クリティカルヒットした。

グゥゥゥッ

地の底から響いてくるかのような声を出し、ダウンするオルガフロウ。
ここぞとばかりに、全員の火力が集中した。

エミリア「燃えろっ！」
フォース「凍てつけっ！」

繰り出される上級のラ系テクニック。
その間をかいくぐって、紫のキャストが突撃をかけた。

キャスト「クハハハハ！！楽しいな、楽しいぞ！」

彼がふるう武器は命を奪うといわれているソウルイーター。
鎌ともとれるその武器を、的確にオルガフロウに叩き込んでいく。

ハンター「あんたに遅れはとらねえよ！」

ダブルセイバーが煌めき、鮮やかな軌跡を描いて振るわれる。
そこに、上から連撃を重ねてくる青い影。

ナギサ「…天つ閃！」

ナギサのスティールハーツが青い軌道を残してオルガフロウに切り込む。
微かにできたオルガフロウの装甲の傷を狙って、私とレンジャーさんの
弾丸の雨が降り注がれる。

マリー「いっけぇぇぇぇぇ！」
レンジャー「おらおらぁ！！」

傷が広がり、むき出しになる皮膚部分。
そこに向かって飛び込んでくる赤い影を確認して、私たちは射撃を別の
ところに向けた。

リコ「…師匠！私です！今…今助けます！！仲間とともに！！」

赤のセイバーが目にも止まらない速さで振るわれる。
連撃に次ぐ連撃。

それでもまだ、オルガフロウは倒れなかった。

オルガフロウの目に灯った光が強くなったかと錯覚するような威圧感。
それにひるんで攻撃が弱まった瞬間に、彼は上方へと移動した。

エレベーターの警告音が響く。
落下を続けているこのエレベーターの終着点が近づいてきているようだ。

マリー「時間がないよ！隙があったら逃さないで！」

言いつつ、真上に向かって弾丸を放つ。
2対の青い弾丸と、それを超すスピードの緑の弾丸1粒。

レンジャー「俺だって遠距離戦が得意なんだ！忘れんな！」

連続で頭を打ち抜かれて、オルガフロウが距離感を見失う。
徐々に落下してくるオルガフロウにめがけて、テクニックが打ち込まれ始める。

エミリア「あんたにばっかりいいカッコはさせないよ！」
フォース「お！言ったね？あたしだって負けないよ！」

ラ系の範囲攻撃が目隠しとなってか、遂にオルガフロウが着地した。
…体勢は整えられてしまったが。

そこに近距離部隊が追い打ちをかける。

ハンター「うおぉぉぉぉっ！」
キャスト「クッハハハハハ！」

ナギサ「ふっ…はぁ！！」
リコ「たぁぁぁぁっ！」

エレベーターに接地している４本の足すべてか崩れ落ちる。
…体勢が崩れた！

マリー「エミリア、ナギサ！ブラストリリース！」

私のＳＵＶは衛星からの転送なので使えないけれど。
彼女たちのブラストは使えるはず…！

エミリア「行くよっ、ミラージュブラスト！ヌイ！！」

呼び出される炎の化身。
片腕に力を込め、発射される。

それが終わったのと同時に。
ナギサの青い閃光がオルガフロウを包み込む。

ナギサ「はぁっ、はぁっ…あああああ！！」

止まらない連撃。休まらない手。
息も絶え絶えになりながら、ナギサが全力を注ぎ込む。
…すると。

グゥォォォォ…

遂に、自制を失ったオルガフロウがエレベーターの縁から落ちた。
眼下に広がる大空洞へと。

マリー「あぶなっ…！！」

叫んだ瞬間、エレベーターが急停止し、私たちはエレベーターに押しつけられた。

ｌｌｌ，，ＩＤＯＬＡ，，ｈａｖｅ　ｔｈｅ　ｄｉｖｉｎｅ　ｂｌａｄｅ

エレベーターから降りた私たちを待っていたモノは、動かなくなったオルガフロウ
と、その周りを回遊する白い光の玉だった。

エレベーターが上昇していき、帰り道がなくなったことを知る。

…おもむろに、リコさんが白い光に手を伸ばす。

リコ「師匠…」

師匠と呼ばれたからなのか、それとも光に触れたからか。
白い玉がもう動かないオルガフロウの中に入り、周囲にまばゆい虹色の光を放った。

マリー「まぶしっ…！」
エミリア「な、なに…！？」

ナギサ「…なん、だ、これは…」

足下に振動を感じ、反射で閉じた目を少しづつ開く。
そこには、巨人が立っていた。

ダークファルス・ディオスを越えるであろう背丈。
その背丈に見合った大剣。

両肩にマドゥーグのような、自立機動らしき2対のモノ。
バトルストッパーをしまい、剣影を取り出す。

マリー「あはは…どう、しようね？」
エミリア「どうしようもこうしようも…やらなきゃやられちゃうって！！」

ナギサ「まだ、戦うというのか…」

…ふと、気づく。
ナギサの様子がおかしいことに。

マリー「…ナギサ？」

ナギサは、返事をしようと片手を顔の高さまで上げ…そのまま崩れ落ちた。

マリー「ナギサッ！！」

エミリア「ナギサ！？」

すぐに、私とエミリアが駆け寄る。

頭は打っていないようだが、意識がないようだ。

ちらりとこちらを見たリコさんが、私たち二人に向かって言う。

リコ「あんたらはナギサを連れて部屋の隅まで退避して！」

マリー「…でも！」

リコ「でもじゃない！…師匠を、ラグオルを救うのにあんたらの力なしで
　　できないようじゃ無理だからね。心配はいらないよ！」

そうだそうだ、と続いたのは他のハンターズの面々だった。

…言葉の裏の、ナギサを心配する心が伝わってくる。

エミリア「…皆、頑張って！行くよマリー！」

マリー「…ありがとう、ございます！」

その心を無駄にしないためにも、私たちは動けないナギサを抱えて、壁際の、巨大な岩と岩の間に隠れられそうな場所を見つけて退避を始めた。

―side：マリー，M，ミスラ

慎重に、かつ素早く。
ナギサに振動を与えすぎないように、しかしできるだけ速く。
岩の間を目指して進んでいると、背後で戦闘が始まった。
一声大きく叫ぶオルガフロウと、それに対して立ち向かう5人。

銃声と、剣が空を切る音まで聞こえてきそうなほどの気配。
そして、何より大きく響くのは。

圧倒的大きさで彼女たちの前に立ちふさがっているオルガフロウの足音。

見なくても、後方何メートルのところにいるか大体解るほどの威圧感。
それに押しつぶされまいと、声を張り上げ必死に立ち向かうハンターズ。

彼女たちの身を案じていると、壁際まで無事にたどり着いた。

ゆっくりと、エミリアと息を合わせてナギサを降ろす。

エミリア「…呼吸は、ある。心音も、一応は正常。…ナギサ…」

マリー「…目立った傷、と言うよりも傷一つないのに…」

とりあえずは手持ちの医療セットで応急処置を施そう、という話になる。

…万全の装備、役に立つなぁ…なんて思っていると。

作業をしながら、エミリアが話しかけてきた。

エミリア「…多分、これは精神的な問題だと思うの。気の張りすぎ、倒したと思っていた相手の気配、それで蘇ってくるイヤな
思いでの数々。決着が付いたと思ったら第2形態。
…そりゃぁ、もう想像を絶する負担だったんだと思う」

マリー「…気づいてあげられなかったな、ごめんね？ナギサ…」

まだ目を覚まさないナギサの代わりに、エミリアが答えた。

エミリア「ナギサの心を読むのって難しいしね…でも、あたしのはあくまで
推測にすぎないから、できれば速く医者に見せた方がいいね」

マリー「でも私たちはここを離れられないし…」

エミリアと顔を見合わせ、頷きあう。

エミリア「信じて待ちますか…こっちの英雄のご帰還を」

マリー「信じれば奇跡は起きる…身を持って知ってるからね。帰ってくるときは、
　　６人揃って帰ってきてほしいな」

エミリアの頭の上にクエスチョンマークが飛ぶ。

エミリア「あれ？リコ、ハンター、レンジャー、キャスト、フォース…５人じゃ？」
マリー「一人大事な人忘れてるよエミリア…ヒースクリフさんがいるでしょ？」

ああ、とエミリアが合点したかのように言う。

エミリア「そうだ、あいつらリコの師匠さんを助けるためにも戦ってるんだっけ」
マリー「そういうこと。だから、６人。…信じて待とう？」

エミリア「そうだね。…ナギサも、きっと信じてる」

その言葉で、私とエミリアは岩の隙間から外を眺めた。
戦闘は激化しており、フォトンが舞う。

まだ目を覚ましていないナギサのまぶたが、ぴくりと動いたような気がした。

ーーーside：リコ＝タイレル

マリーたちが一応は安全な距離まで離れたところで、ハンターズに声をかける。
最後の打ち合わせだ。

幸運なことに…師匠、は視点が高くなったことで混乱しているのか、まだあたしたちに気づいていないようだ。

リコ「よし、まずはあの両肩のマグ…だったものを集中的に叩こう。性能が
　残っているなら、あれを倒せば多少は弱体かするはずだから」
ハンター「俺とこの旦那は近距離だからとどかねぇぜ？」

リコ「そしたら足だ。人型って言うことは足首と膝は効くはずだ」
ハンター「了解っと。…旦那、解ったか？」

キャスト「ふん」
レンジャー「なあに、旦那なら大丈夫だろうよ。それで、だ。マグを倒したら？」

リコ「ああ。マグを倒したら遠距離部隊は右肩か頭。無理のない方を狙ってくれ。
　攻撃の効きが薄いと感じたら別な場所に目標を変更してくれ。そこの判断は

任せる」

レンジャー「了解。嬢ちゃん、聞いてたか？」

フォース「もー！聞いてるよ！」

レンジャー「はは、悪い悪い。…さて。奴さんもそろそろ気付いたみてぇだぜ？」

レンジャーの言葉の直後、あたしたちに黒い影が落ちる。

後ろを振り返ると、師匠…だったモノ、がこちらの方を向いて止まっている。

通じないとは解っていても、思わず言葉をかけてしまう。

リコ「ご丁寧に待ってもらってすいません師匠…今、助けます！」

地の底から響かせてくるような叫びとともに、最後の戦いが始まった。

先手を打ったのはレンジャー。

レンジャー「でっけぇ的だなおい！！」

言いつつ、ライフルを連射する。

彼に後れをとるまいと、フォースがラ系のテクニックで追撃をかける。

フォース「はぁぁ…爆発しろっ！！」

先ほどとは違い、ラフォイエ…ニューマンにしか出せないような巨大な。

さっきは周りに気を使ってたのか、と考えつつオルガフロウの足下

へ駆ける。

…戦闘が始まっては情はいらない。自分の動きを鈍くするだけだから。

とはいえ、一瞬。ほんの一瞬だけ、切りかかる手が遅くなってしまった。

…そこを見逃さず、巨大な剣があたしを狙って来るのが見えた。

ヤバい。回避も防御も間に合わない。…このままじゃ死……！！

唐突に背中にドン、という衝撃。

誰かに後ろから突き飛ばされたあたしは、その勢いのまま吹っ飛び、剣のリーチから抜け出すことができた。

その直後、刃と刃の削れ合う音が響く。

リコ「…お前！」

ギャイン、という音を立てて剣の軌道をそらした彼が言う。

キャスト「生存を第一に考えろ。…そんな基本もできないか？」

リコ「…助かった。ありがとう。そうだな、あたしったらまだまだだ」

解っているならいい、といい残してキャストはまた攻撃に戻っていった。
あたしも攻撃に加わろうとしたが、ふと頭によぎる光景のために足は止まった。

まだあたしがコーラル本星で師匠の教えを受けていた頃。
一番最初に教わったのも生き残ること、だった。

そして今、あたしが対峙しているコレは。
仮にも「師匠」だったモノだ。

なら師匠の教えをすべてつぎ込めば、少しはあたしのことを思い出すかもしれない。
そうしたら隙ができるだろうか。…できるとしたら、それは師匠とダークファルスがまだ戦っているという証だ。

だとしたらそこを突けば師匠とダークファルスを切り離せるかもしれない！

希望は見えた。
あとは、やるだけだ。

リコ「師匠、今行きます！」

あたしの心は異様なほど平静だった。
まるで師匠と手合わせをしているかのような、懐かしさすら感じる余裕がある。

オルガフロウの思考、行動が手に取るように解る。
次に誰を、どう狙うのかさえ。

リコ「レンジャー！5歩下がってくれ！」
レンジャー「了解！…ぅおあ！」

彼がさっきまでいたところにグランツのようなテクニックが打ち降ろされる。
…威力は地面を軽くえぐるほど。

レンジャー「サンキュ！助かったぜ！」
リコ「礼はこの戦闘が終わって生き延びてからにしてくれ！」

それもそうだな、といいライフルを構えなおした彼の一撃が。
オルガフロウのマグを機能停止に追い込んだ。

一瞬、ほんの一瞬。ハンターが視線をガエルとギエルに向けてしまった。
…その一瞬を、突かれる。

リコ「…！ハンター！オルガフロウの後ろに回れ！今すぐ！！」

返事はない。
…けれど彼はあたしの声に一瞬遅れてオルガフロウの背後に飛び込んだ。

ハンター「あっぶね！」
リコ「大丈夫か！？」

思わず、身を案じる声をかける。

ハンター「ああ、助かった！…リコ、役職で呼ぶのやめてくんねぇか！？」

返ってきた声は十分に元気そうだった。

リコ「お前等パイオニア２のハンターズだろう！？名乗って貰ってないのに
　名前で呼べるかあたしはエスパーじゃない！」

一気にまくし立てると、ハンターが名乗ろうとする。
イヤ待て今名乗るな混乱する！

リコ「名前を聞くのは後でパイオニア２に無事帰れたら！あたしの居場所、
　しっかり確保しておいてよ！？」
ハンター「…ああ、任せときな！」

そうだ、あたしはパイオニア１の人間だから。
こいつら皆と一緒に帰らなきゃ居場所はできないんだから！

リコ「さあ、仕掛けるよ！」
ハンター「ああ！」

手応えは薄く、いくら切っても切っても倒せる気がしない。
まず、傷がつきやしない。

…こうなったら大技にかけるしかない、か。

リコ「ハンターズ！全員フォトンブラストは撃てるか！？」

自分のマグとシンクロして特殊な一撃を繰り出すフォトンブラスト。
マグを持たないあたしは撃てないけれど、マグとともにいる彼らならきっと。

ハンター「俺は大丈夫だ！」
レンジャー「俺もだぜ！いつでもいける！」

キャスト「出来るか出来ないかなら、俺は可能だ」
フォース「準備万端！合図ちょうだい！」

リコ「…おっけー！タイミングはあたしが見るからそれまで各自全力で攻めて！」

了解、という声がきれいに重なる。
…ここで、ふと思う。

エミリアもフォトンブラストのような技を出してはいたけど、彼女はマグを装備していなかったように見えた。

グラールという知らない文明の技術だろうか…ぜひとも研究してみたい。
そのためにはまず生きて帰らなきゃ！

リコ「レンジャー！回避の準備！」
レンジャー「あいよ！」

リコ「フォース！敵の視界を奪うように意識して攻撃してみてくれ

る！？」
フォース「お安いご用よ！いっくよー！」

オルガフロウの眼前に今までとは比にならないレベルでテクニックが連発される。
視界を埋め尽くす爆炎に、あたしたち前衛の足下への攻撃。

サポート役のマグもレンジャーが封じている。
…これで、少しでも隙が出来れば…！

グゥウオオオオ…

オルガフロウの叫びから、地の底から轟くような響きがなくなる。
顔を押さえ、一歩だけではあるが…ふらついた！

リコ「ハンターズ！今だ！」
ハンターズ「了解！」

４人の声がまるで一人のものであるかのように響く。
…彼らの頭上に、それぞれのマグの特性を出したモノが召喚される。

それらが連続でオルガフロウを貫き、そして…

ついに、オルガフロウが片膝を突いた。

リコ「ここを逃したら…！」

今以上のチャンスはもう巡ってこないだろう。
ハンターズは今の一撃の反動でまだ動ける状況ではない…あたしがやるしか！

リコ「師匠、あなたを…救ってみせます！」

想いを乗せた刃は白く輝く光を放ち、普段の倍以上のリーチを持つに至った。
救えようと救えまいと、関係ない。
あたしは、師匠に教わったすべての力を出すだけだ…！

リコ「はぁあああああああ！！」

戦いに終止符を打つため、師匠の作ってくれた『赤のセイバー』を握りなおし、
頭を狙って飛び上がる。

師匠、これで一本貰います。
まだあたしが師匠に稽古を付けて貰っていた頃の口癖。

ふと頭によぎったその口癖を、気付けばささやくように口に出していた。
その瞬間、あたしと師匠を残して時が止まった…ような錯覚を、受けた。

ひざまづいたまま、顔を上げてあたしの方を見るオルガフロウ。
その瞳に、師匠の眼差しを感じる。

師匠が目だけであたしに語りかけてくる。
とどめを刺せ、と。自分がこいつを押さえつけている間に、自分ごと…殺せと。

あたしはそれに返事をしない。
師匠がまだ自我を持って生きていて、あたしたちのために…あたしたちと一緒に
戦ってくれている。

それが知れただけで、十分だった。

リコ「…！！」

止まっていた時間が動き出すのを感じる。
振り上げたまま止まっている腕が、自分の込めた力によって振り降ろされる前に。

オルガフロウを隅々まで見る。
師匠とこいつの境界線は…どこに…

……首もとから腰にかけて斜めに、力の入り具合がおかしい。
見つけたァ！！

リコ「これでぇ…終わりだぁあ！」

頭を狙っていた腕を強引に捻り、左肩から袈裟切り。
さっきまでの堅さが嘘のように、切取線をなぞるようにすんなりと刃は通った。

その勢いのまま、オルガフロウの足下へ着地する。
直後、目の前にあった足が2、3歩下がった。

グゥァアアアア……

立ち上がり、仰け反るオルガフロウ。傷口から吹き出る高純度のフォトン。
やがて、肩を押さえていた手がだらりと下がり…

オルガフロウは、霧散した。

リコ「終わ、った、のか…？」

巨人の影はもうどこにもない。
あれほど巨大だった剣も…などと考えていると。

エレベーターの上っていった方角から、剣が回転しながら落ちてきた。
サイズ的にはセイバー。…しかし、見たことない型。

リコ「……ん？」

呆気にとられ、放心している仲間たちをよそに、ふと、気付く。
今降ってきた剣のそば。そこに…何か、ある。

あたしと対照的な青と白の2カラー。
ここからでも解る大きな背丈。

豊富な白髭と、彼の手に握られている独特のフォルムのソード。
見間違えようがない。あれは…あれは！

リコ「師匠っ！！」

叫び、駆け寄る。
反応はない。

諦めてやるものか。
師匠がこうして、体を持ってここにいる。

…絶対に助ける…！

リコ「師匠！師匠！！」

体を起こしてやり、何度も何度も呼びかける。
…すると。

フロウウェン「う……リコ、か……」
リコ「！！そ、そうです！あたしです！ご無事で本当に……よかった…」

だめ、こぼれるな、止まれ、涙。

あたしの頑張りもむなしく、透明な滴は頬を伝って流れ落ちる。

フロウウェン「D因子に蝕まれていく中で…お前のことは、感じていたぞ…

私を助けようなど、無茶なことをしおって…」

リコ「無茶だ、と、頭では、解っていても、あた、あたしは、諦めたく

なかったんです……」

こみ上げる嗚咽に、まともに言葉が継げなくなる。

それでも、生きていてくれたことが嬉しくて。ただ、嬉しくって。

リコ「…いや、みんなが、いてくれたから。…あたしは、諦められずに、

いられたんです…」

フロウウェン「この……バカ弟子が……うぐっ…！」

リコ「師匠！？師匠！」

後ろから、多くの足音。

涙でグシャグシャになった顔も構わずに、振り返る。

そこには、一緒に戦ってくれた仲間たちがいた。

ハンター、レンジャー、キャスト、フォース。

エミリア、マリー…そして、まだ目を覚ましていないナギサ。

フォース「傷が深いね…レスタで応急処置はするけど早くメディカルセンター

に連れていかなきゃ！」

レンジャー「先導する！転送装置は…ビンゴ！出現してるぜ！」

エミリア「ナギサも診てもらわなきゃ！」

マリー「フォースさん、こっちも応急処置お願いできますか！」

フォース「うっはぁ、今日あたし大人気だねぇ…張り切っちゃうよ！」

さすがに師匠はあたしじゃ運べないので、ハンターとキャストに運んでもらう。

ナギサは、マリーとエミリアに抱かれるようにして運ばれていた。

ーーーーーーーーーーーー

パイオニア２へと向かう道すがら、何人ものハンターズとすれ違う。

皆一様にこちらのことを心配し、声をかけてきてくれる。

あたしはこいつらを一方的に遠ざけていたのに、こいつらはあたしのことを気にかけていてくれることがなんだかむずがゆい。

…パイオニア２に着いたら総督室に顔でも出そうか。
たまには、親孝行しないとね。

なんて考えているうちに、地上にでた。
空気は澄み渡り、心地良い風が吹く。

パイオニア２への転送装置はすぐ近くに設置されていた。
あたしたちは、迷うことなくその中へと足を踏み入れた。

，，ＩＤＯＬＡ，，ｈａｖｅ　ｔｈｅ・・・（後書き）

いやはー、長い！ですね（。ε　。；）
読んでくださりありがとうございます、お疲れさまです＞（＿　＿）＜

次の話で『時空を越えて』は終了する…はず、です。
まぁ、私はマリーさんたちが帰ってからが不安で不安で…

彼女が何か見事にやらかしてくれそうです＜＞；
彼女、が誰だかはあえて明記しませんが…お察しの方もおられると思います…

そ、それではまた次回！
ありがとうございました☆

Ｐｉｏｎｅｅｒ２：Ｈｅａｌｉｎｇ（前書き）

どうもこんばんは、風邪で鼻がズビズビなＡｎｇｅｌｉｃａです（―｜―；）

…先に謝ります、完結しない…！

いや、書けば書くほど色々動いてくれるアグレッシブなキャラ達ばっかりで…はっはっはｏｒｚ

気、気長にお付き合いください！

それではどうぞ！

Ｐｉｏｎｅｅｒ２：Ｈｅａｌｉｎｇ

ｌーｌ？？：ｓｉｄｅナギサ・アーデルハイト

光の射さない暗さの中に、おぼろげな自分の輪郭を確かめる。
これは夢、だろうか。

自分で言っておきながら夢と言いきれるほどの不確かさがここにはない。
触覚・視覚・嗅覚・聴覚・味覚。五感のうち、今働いているのは４つ。

口の中に広がる鉄の味、味覚。
自らに触れて感じ取る、触覚。
頭に響きわたる耳鳴り、聴覚。
まぶたの裏の血の流れ、視覚。

ただ匂いだけがない世界。
口の中に感じる血の味。その血の匂いさえ、感じ取ることが出来ない。

これは不自然だ。
…ならばこれはやはり、夢なのだろうか。

だとしたら早く覚めてほしい。
かすかに自分が何をしていたのかは覚えている。

確か戦闘中だった。

それも、強大な敵と。

早く戻らなければ、皆に迷惑になってしまう。

…と、考えているとふと疑問が生まれてきた。

なぜ私は戦闘中であったのに夢なんかみているんだ?

???「それはお前が無様に倒れたからさ、ナギサ」

ナギサ「…何奴っ!」

空間に響く声。

ナノデバイスからいつものように愛剣を…

…取り出せない?

???「何をしようというのか?ここは現実ではないのだから武器など

出しても意味はないというのに」

ナギサ「…?」

余裕な声…こいつ、気配がどこにも、ない。

???「無駄だ無駄無駄、お前に私を見つけることは出来ない」

ナギサ「…お前は、誰だ?いや、質問を変える。お前は、何だ?」

上からのようで、下からのような。

頭の中に直接響いてくるような、不思議な声が響く。

???「何でも。俺には今や個の意味はなく、集まると俺ではなくなる」

ナギサ「…単体？集まる？」

？？？「お前らの言葉を借りるなら個人と集団、ってとこか。まぁ深い意味
などないさ」

ナギサ「…らちが開かないな。お前はここで何をしている？」

周囲を包む声の質が変わる。

…バカにしたような口調から、硬質な口調に。

？？？「それはこちらの質問だ。お前はこんなところで何をしている？」

ナギサ「さあ。私としては早く帰りたいのだが帰り方が解らなくてな」

…とたんに、またバカにしたような口調に戻る。

？？？「…はぁ。つまりは何か？お前はここに迷い込んだと？」

ナギサ「ああ」

今度は隠すそぶりもなく、盛大にため息を吐かれる。

？？？「なんっ、だお前…はぁ…イレギュラーにもほどがある…」

ナギサ「イレギュラー？」

？？？「お前には理解できない話だ、気にするな。…戻り方が解らない、
と言ったな？」

ナギサ「…言ったが」

とことんこっちの話を聞かない奴だ。
…私も普段を考えると人のことはいえないか。

???「今のお前には簡単だ。光の射す方向を見つけてその方向に集中しろ。
　向かっていく必要はない。ただその光に意識を集めろ。
そうしたら、
　光は勝手に向こうから近寄ってくるさ」

ナギサ「光、か…わかった。やってみるとしよう」

???「出来ればお前にはもうここには来ないでほしい。目障りだし、
　何よりお前の来るべき場所じゃない」

その一言で、ふとした疑問が首をもたげる。

ナギサ「そうだ、そういえばここはどこなんだ？」

???「…彼岸と此岸の境目、さ」

身を包んでいた気配がなくなる。
まさに雲散霧消、気配は掻き消えるようになくなった。

ナギサ「言い逃げか…全く…それはそうと光、だったか」

これ以上聞きたいことはなかったので気持ちを切り替えて帰る手がかりを探す。
光、射す方向…

ナギサ「…見つけた」

それは、色彩は違えどあの欠片のようで。
形を変え、色を変え、まばゆい『光』そのものだった。

じっとそちらを見つめ、意識を集中する。
気づけば手は胸の前で組まれていた。

やがて、光が私の方へと近づいてきてーーーー。

ーーーパイオニア２・メディカルセンター：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

集中治療室でナギサの容態が急変してから約２０分。
心音は弱くなり、元より色の白い顔から血の気が引いていく。

私たちにできることは、ただただ呼びかけることだけだった。

マリー「ナギサ！ダメだよまだ！そんなの私はイヤだよ！」
エミリア「頑張れナギサ！まだあんたといっぱいやりたいことあるんだから！」

ハンターズのみなさんはここには入れてもらえていない。
…あまりに大人数だとかえって悪い、との医師の判断で。

だから私たちは精一杯ナギサに声をかけ続けた。

エミリア「ナギサ！帰ってきてよ！」
マリー「ナギサ！まだまだ一杯！遊んで食べて笑って！まだ何もかもやり足りない
　　んだよ！？だから諦めないで！」

下がり続ける体温に、弱くなっていくパルス。
…それでも！

エミリア「ナギサ！」
マリー「ナギサぁ！」

ピク、と。
ナギサの指先が動いたような気がした、その直後。

医師「…信じられない…」

奇跡が起きた。

ナギサ「…はは、なぜ二人とも泣いているんだ…？」

弱々しく、しかしはっきりと発せられたその声に。
私たちの涙腺は決壊した。

エミリア「ナギサぁ…！」
マリー「ナギサぁ…！！」

自分でも思わぬうちに、ナギサに抱きついていた。
…エミリアも同じ事をしているんだから、許されるよね？

ナギサ「ちょ、どうしたんだ二人とも！？」
エミリア「うっさいバカナギサ！どんだけ心配したと思ってんのよ！」

マリー「良かった、良かったよぅ…うぅ…」
ナギサ「？？な、なんだかすまない…」

カシュ、という軽い音とともに開かれるドア。
流れ込んでくるハンターズの皆＋リコさん。

リコ「ナギサ！？あんた…！」
フォース「良かったねぇ！」

ハンター「おいおい冷や冷やさせやがって！」
レンジャー「いや俺は解ってたぜ？嬢ちゃんが生き延びることぐらいはよ？」

キャスト「…の、割には随分と目が赤いようだが？」
レンジャー「う、うるせー！」

ナギサ「皆…！」

日付が変わって午前2時すぎ。
約半日も昏倒していたナギサが、目を覚ました。

マリー「ナギサぁ…」
ナギサ「ああいや泣かないでほしい！すまない心配をかけたことは謝るから！
貴方に泣かれると私はどうしたらいいか…！」
エミリア「困っときなさいバカナギサ！…本当に、良かったよぉ…！」
ナギサ「ああうん…え、いや…あの…」
ポリポリと、頬を掻きながらナギサが言う。
ナギサ「その…これからは、倒れたりしないように、気をつけるから…
だからというのも何なのだが…許してほしい」
その言葉に、私より早くエミリアが反応した。
エミリア「バカ…許す許さないじゃないって…」
マリー「そうだよ……グスッ…怒ってるんじゃなくて心配してるんだもん…」
ナギサ「それは、その…」
堂々巡りの泥仕合に見かねたのか、リコさんが入ってくる。
リコ「あーもう！ナギサは無事だった！それで良いんじゃないの！？」
その一言に、涙でグシャグシャになった顔をエミリアと見合わせる。

もちろん、ナギサにしがみついたままで。

マリー「…えへへ、私はそれで十分かな。エミリア、顔、ひどいよ？」

エミリア「あたしも十分…ってマリー！ひどいって何よひどいって！」

ナギサ「ひどいというか…エミリア、鼻をかんだ方がいいと思うぞ」

エミリア「ちょっ！？ナギサまで！」

リコ「そう言ってるマリーもなかなかだけれど？」

マリー「えへ、自覚してます…」

ティッシュを箱でもらい、鼻をかみ、涙をふき取る。

…ハンターズの皆が何だかニヤニヤしてこっちを見てくる。

エミリア「ひ、人の顔見て笑わないでよー！」

マリー「…まだ、私の顔おかしいですか…？」

それに律儀に答えてくれたのはレンジャーさんだった。

レンジャー「いやいやそうじゃなくてな…マリー、だったか。お前さん、

表情がころころ変わるから面白くってよ」

返答に困っていると、フォースさんが続けた。

フォース「やー、エミリアちゃんとか戦闘中はそう見えなかったんだけどっ。

やっぱしふっつーの女の子なんだなって思ったり？」

エミリア「あたしは戦闘中も今も普通の女の子だよ!?」
フォースさんがぶんぶんと手を振って弁明するように言う。
フォース「やや、わかってるんだけどね?でもほら、戦いに慣れた緊張感の
ある顔と普段の顔って変わるじゃない?いや、うちのキャストの
旦那とか例外は例外でいるんだけどさっ」
エミリア「…キャストでも表情豊かなのはいるけどねぇ…」
…しらばっくれておこうかな?
エミリア、こっちをそんなに見ないで穴開いちゃうから穴。
と、フォースさんはエミリアをからかう方向にシフトしたみたい。
フォース「ほほぅ、まるで感情豊かなキャストが身近にいるかのような言い方
するねぇ?」
エミリア「だって身近にいるじゃん。ほら、マリーが」
マリー「あはは…しらばっくれきれなかったかぁ…」
場の空気が凍った気がした。
フォースさんやハンターさんの目が真ん丸に見開かれる。
フォース「…え、マジ?」
レンジャー「お、おいおい、冗談は…」
…あんまり好印象じゃないのかな。でも、私は私だし。

マリー「いえ、冗談でも何でもなく…私、キャストなんです」

1拍、2拍、3拍。

少しの間をおいて…

「「「「えぇえええええええええーーー!?」」」」

病室が絶叫に包まれた。

叫んだのは4人。キャストさんだけは合点したかのように顎に手を当てていた。

フォース「うっそ本当!?え、触っても良い!?」

マリー「あ、どうぞ…といっても人工皮膚なんであんまり変わんないですよ?」

フォース「お言葉に甘えて…ていっ!」

マリー「ふぁっ!?ほ、ほほれあははほほっへれすか…」

いきなりでしかも押す力が予想以上に強くて呂律が回らない…!

フォース「…今何て?」

エミリア「そこでまさかのほっぺですか、だってさ」

こくこく、と未だ押され続けてる頬に言葉を出すのを邪魔されながら頷く。

ハンター「え、ちょっ、ええ!?」
エミリア「…ってか、皆マリーの顎の部分のパーツに気づかなかったの?」

レンジャー「…俺、それはインカムの一種か何かかと思ってた…」
マリー「あはは…」

…フォースさん、そろそろつつくの止めてもらえませんか…?
と、思ったところで指が離された。ふぅ。

リコ「え!?え、…え!?」
ナギサ「リコ。落ち着いて深呼吸をすると良い。ほら吸って…吐いて…」

キャスト「…成る程な。お前に感じた違和感の正体はそれか」
マリー「…えっ、キャストさん気付かなかったんですか!?ええと、まぁ確かに
私今日はキャストらしからぬ服装してますけど!」

そんな私の今日の服装はファンタカスタムドレス。
カラーリングはエイダの趣味で赤でアクセントが入れてある。

キャストが服を着る、っていうのがこの世界ではまず違うのかな?
騒動の中心にいるのは慣れっこなので、そんなことばっかり気になった。

…フォースさんが、なぜか指で押すジェスチャーをしながら私の方を見ている。
ま、まだ押したりないのかな?何て考えていると。

フォース「ふにっふにだったねぇ…あ、でも言われてみれば目の奥まで見てみると
　　キャストっぽい！…かも？」
マリー「顔近っ！？」

いきなり急接近してくる顔。
…び、びっくりしたぁ…！

なかなか収まらない騒動に終止符を打ったのは、…まぁ、当然と言えば当然。
医師の方だった。

医師「病院ではお静かに！ほらほら無事が確認できたなら出てください。ナギサさん
　　が意識を取り戻されたので今から検査などをしますから！」
フォース「ちぇっ。はーい」

ハンター「あの見た目でキャスト…？いやでも、種族の差なんて…ぐぉぉ…」
レンジャー「おいこら出口で止まんな。なぁに色ぼけてんだ青二才！」

ハンター「ぐはっ！レ、レンジャーの兄貴蹴りは痛ぇって蹴りは！」
キャスト「いいから出ろ」

ハンター「！…はい…」
リコ「二人とも、先に出ててくれ」

エミリア「オッケー！…ぷくくっ！ハンターさん叱られた子犬みた

い！」
マリー「ちょ、エ、エミリア！…ナギサ、検査が終わったら連絡入れてね！」

笑いをこらえるエミリアをどうにか病室の外に押しだし…扉が閉まる。
あれ？リコさんは？

…私たちみたいに土地勘がないわけじゃないんだろうから大丈夫かな。
そう自答して、私たちはメディカルセンターの外に向かって歩きだした。

ーーーメディカルセンター：ｓｉｄｅリコ＝タイレル

ナギサ「…リコ？行かないのか？」
リコ「ちょっとね。医者に話があって」

ナギサ「？…そうか。なら、医師が来るまでここにいると良い」
リコ「ありがとうナギサ。椅子借りるよっと…ふう」

よくある3脚の丸椅子を引っ張りだし、とす、と腰掛ける。
そのまま、勢いでナギサのベッドに上半身を投げ出す。

ナギサ「はは、貴女もずいぶんとお疲れだな」

リコ「疲れないわけないじゃんか…今日一日でどんだけ出来事あったと思ってんの…」

ナギサ「うーん…まぁ、現に私は過労?で倒れてしまったわけだしな」

リコ「そうそう。倒れないあたしを誉めてほしいよ全く…まぁ、マリー達も倒れちゃ
いないからあたし一人で威張れないんだけどね?」

途中で気づいたら膝枕されていた、というのはあえてカウントしないでおく。

…単純にあたし一人でこいつら3人分の働きしてたって考えれば、良いよね?

ナギサ「はは、そうしたら私なんて皆に恐縮しなければならないな」

リコ「あんたのその立ち直りスキルは少し欲しいよ本当に…」

ナギサ「リコ、女たるものいつまでも過去を引きずってはいけないんだというぞ?」

リコ「…いや、あの3人の中で一番女っぽくないあんたに言われるとは…」

ナギサ「怒って良いか?」

リコ「ごめんなさい」

…一瞬の間をおいて、どちらからともなく吹き出す。

吹き出したらもう止まらない。病室で怒られない程度に笑い出す。

リコ「あははっ…あーおかしい。本心で笑ったのって何時ぶりだろう?」

ナギサ「…寂しいことを言うな。私は何時も本心で笑っているのだが…リコは
　そうではないのか？」
うつ伏せになったまま顔だけをナギサの方に向ける。
…そうか、こいつらは。
リコ「あたしは何だかおだてあげられちゃってね。周りが気を使って来てしまうような
　立ち位置になっちゃったからあたしから遠ざけてた。…仲間、って言えたのは、
　師匠をのぞくと今日まで一人もいなかったような気さえするよ」
ナギサ「ふぅん…だが、もう私やエミリア、マリーやさっきまでいたハンターズの皆は
　貴女の仲間だろう？」
ああ、だめだ。
ナギサの一言で胸につかえていた物が取れる。
あたしは、もう。
一人じゃ、ないんだ。
ナギサ「リ、リコ？ええと、何か傷つくようなことをいってしまっただろうか私は！」
リコ「え？」
ナギサ「え？って…いや、無表情できょとんとした顔で涙を流されても困るのだが…」
リコ「え、嘘！？…はは、本当だ。何でだろうな、あたしにも解ら

ない…」

頬を触って確かめると、そこは確かに濡れていた。
…塩辛いけれど、あたたかい雫。

リコ「わかんないんだ…でも、何だか、胸が暖かくて…嬉しい、んだな。あたし」
ナギサ「そ、そうか…嬉しいなら、まぁ、泣いても…良いんじゃないか？」

どんどんこぼれる涙に、滲んで見えなくなる視界。
顔を上げていられず、伏せて泣いていたらナギサが頭をそっとなでてくれた。

いつもなら子供扱いするなと跳ね返すところだけれど…今日くらいは、いいよね？
少しだけ人に甘えたって。

そうして少し時間がたって涙も枯れてきた頃。
呼びかけられた声に反応して顔を上げると、医師が申し訳なさそうな顔をのぞかせた。

医師「リコ、さんでよかったかな？赤い輪の」

ぐしぐしと涙を拳で拭って、返事をする。

リコ「ああ、あたしがそうですが…何でしょう？」
医師「ああ、本当にそうだったか。いや、この艦の総督から直接通信があってね？何でも、
君がいたらこちらに顔を出させて欲しいと」

ナギサ「…総督から直々にか。珍しいことだな」
医師「私も詳しくは知らないんだが…ああ、そうそうナギサさん。貴女も検査の準備が
できましたが…立てますか？」

ナギサ「ああ、問題ない」
医師「それはよかった。では私について来てください」

そこまで来て、あたしがここに残っていた意味を思い出す。
…医師に聞きたいことがあったんだった！

リコ「あ、あの！」
医師「はい？」

聞きたいような、聞きたくないような。
…ええい、ままよ！

リコ「えっと、ししょ…ヒースクリフ・フロウウェンはどうなりましたか…？」
医師「…ああ、貴女たちが運んできたあの男性ね…彼は…」

言葉を選んでいるのか。
残酷な現実を想定した、その瞬間。

医師「…非常に信じられない生命力ですね。もう、山は越えました

よ」
リコ「…え?って、いうことは…」
医師が笑みを浮かべて頷く。
医師「ええ。彼はもう大丈夫です。この調子なら1ヶ月もすれば、走れるくらい
にはなるでしょう」
リコ「せっ…先生!ありがとうございます!」
医師「いえいえ。人を救うのが私たちの務めですからね。面会は、明日以降になさって
くれると彼に負担がかからなくてすむのでそうしてください」
リコ「はい!本当にありがとうございました!」
椅子から立ち上がり、礼をする。
…師匠も、無事だった…!
医師「では、私たちはこれで。リコさんも総督の呼び出しに向かった方がよいのでは?」
リコ「あ、はい!」
最後までにこやかに医師は去っていった。
その後ろを歩くナギサが去り際に小さくガッツポーズをしていった。
…私も、そのガッツポーズに応えた。
嬉しいこと尽くし…だと、この後が怖くなってくる。
総督の呼び出し、かぁ…一体なんだろう?

状況説明とかならあたしを指名しなくても良いと思うんだけどなぁ…？

いろいろ考えながら、あたしは病室を後にした。

Ｐｉｏｎｅｅｒ２：Ｈｅａｌｉｎｇ（後書き）

はい、メディカルセンターで一話って話なっが…すいませｎ↑

でもまぁ、時空を越えて、で皆救済されるなら総督も救済されてもいいだろう、と思いまして…
っていうか書いてたらいつの間にか総督から通信入ってたみたいな感じになってしまいまして…
…中だるみしちゃってませんかね？大丈夫でしょうかすごく不安で（（・・；）

…とまあ、お昼寝の効果で眠気はないんで続きの執筆にはいります☆
なるべく早く完結させようと思いますが…最悪年内には新章に行きたいんだよなぁ…

おっとと、長くなってしまいました。
ご意見、ご感想などよろしくお願いします！
それではまた＞（｜　｜）＜

Ｐｉｏｎｅｅｒ２：Ｄａｙ　Ｄｏｗｎ（前書き）

こんばんは、いつもよりちょっと早くＡｎｇｅｌｉｃａです＞（｀）＜

やはー、明日からテストですよどうしましょうね！？

まぁ、単位もらえればいっか。ってスタンスですがね最早（ー｀ー；）

今回は書いてて矛盾がないようにするのが結構骨が折れて（汗

それではどうぞ！

ーーーパイオニア２・総督室：ｓｉｄｅリコ＝タイレル

そういえばパイオニア２の総督って誰なんだろう、知らないな。
知ってる人だったら話しやすいんだけど…そんな幸運、ないか。

何聞かれるのかなぁ、イヤな人じゃなきゃ良いけど…
そう思いながら、あたしは総督室へと続く転送装置を起動した。

リコ「失礼します。パイオニア１ハンターズ所属ハンター、リコ＝タイレル。
　ただいま参りました」
秘書「ああ、リコさんよくご無事で！総督、いらっしゃいました！」

あたしに背を向ける形で立っているのが総督らしい。
今喋ったのはたぶん、お付きの秘書さんだろう。

ううん、と唸った総督の後ろ姿に見覚えが…いいや、まさかまさか。
ゆっくりと総督がこちらを振り向く。

事実は小説よりも奇なり、だった。

総督「よく、生きていてくれたな。リコ」
リコ「え、…え？え、ちょ、と、父さん！？何でここに！？っていうか、総督って！？」

振り向いたその人は、あたしの…実の父、だった。

総督「まぁ落ち着きなさい。私は、今やパイオニア2の総督なのだよ。リコ、お前をここに呼んだのは…そうだな、パイオニア1の生存者はお前だけかという確認、ということにでもしておいてくれ」

リコ「しておいてくれって、そんな…っていうか生存者あたしだけじゃないし！師匠も生きてるよ！」

総督「ヒースクリフ・フロウウェンか。あの医師から報告は受けているよ。まぁ、何だ。いわばそれは口実で、だな…」

秘書「リコさん、解ってあげてください。総督は立場上、あなたを娘として呼び出すわけにはいかないんです。パイオニア1無き今、総督には昼夜問わず仕事が舞い込んできます。無事だと解っていてもご自分の娘さんですもの。顔を見て実感したかったのだと思いますよ」

総督「アイリーン、そこまで言わなくても良い」

秘書「これは失礼しました」

どうやら秘書さんはアイリーンっていうらしい…ってそれはどうでもよくて！

いけない、頭を冷やすんだあたし。

リコ「ええと、うん。心配かけた、けど。あたしは、見ての通り、全然平気。大丈夫」

総督「そう、か。…本当に、無事でよかった」

リコ「それは…心配かけて、ごめん」

総督「謝ることではない。お前が無事に帰ってきてくれた。私からしたらそれだけでもう
十分に嬉しいことなのだから」

秘書（ほほえましいやらもどかしいやらですねぇ…）

総督「何か言ったか？アイリーン」

秘書「いいえ何も？」

リコ「え、と。あの、父さん…そうだ、言わなきゃ…」

遺跡の中で頭をよぎったこと。

メッセージカプセルに込めた、あのときの思いは嘘じゃないってことを…。

リコ「あの、今まで、親孝行とかぜんぜんしなくて、ごめん。こ、これからは！あたしも
…その、ちゃんと大人になる、から…」

総督「何を言っているんだお前は」

なかなかのどにつっかえて出てこない言葉を出そうと頑張っていると。

出鼻を挫かれた。

リコ「へ？」

総督「お前はいつまでたっても私の娘だろう。孝行なんてお前が今ここにいることが一番
の親孝行だバカ者め」

リコ「え、でも今まで結構迷惑…」
総督「それがバカだと言うんだ。娘が親に迷惑かけて何が悪い？」
リコ「こ…この親バカ！せっかく一人立ちしようと思ったのに何さ！」
総督「親バカでなくて娘をわざわざ仕事場にまで呼び寄せるか！」
秘書（それもそうですよねー）
総督「何か言ったか？」
秘書「いいえ何も？」
…父さんと素でぶつかったのなんて何時ぶりだろう、忘れちゃったな…。
7年間会ってなかったけれど。
…その間の疎遠さなんて、どこかに行ってしまったようだ。
これが家族か、と実感していると。
ふと、思い出したことがあった。
リコ「…ねえ父さん、一個お願いがあるんだけど総督の娘権限使って良い？」
総督「娘には権限はないから私の権限を使おう。何だ？」
リコ「…本当親バカ…えっと、森に直してもらいたい機械があるんだけど…」

ーーーハンターズギルド：ｓｉｄｅマリー，Ｍ，ミスラ

恥ずかしい。
穴があったら入りたい。
事の発端はそう、レンジャーさんの一言だった…

ーーー２０分前、ハンターズギルド

レンジャー『なぁ、そういえば道中でこんなメッセージカプセル拾ったんだが
お前ら何か知らないか？』
エミリア『え？リコのじゃなくて？』
レンジャー『いや、リコのなんて落ちてたか？俺らが拾ったのは匿名なんだけど
…その、私たちを助けてください、って内容でな』
エミリア『そっか、そういえばあたし達リコのカプセル回収しちゃってたっけ…』

レンジャー『あー、うまく表現できねぇからここで再生するわ。…えっと、ここに
…あったあった』
エミリア『おー、青かぁ…リコのはオレンジだったし対照的だね。…っと、あれ？
マリー、どこ行くの？』

マリー『あ、あはは…ちょっとお腹痛くなっちゃって…』
エミリア『…トイレはそっちじゃないしそもそもそっち出口だけど？』

マリー『あ、あれ？おかしいな、あはは…』
エミリア『ほらほら良いからこっち来て座って。何か面白いカプセルがあったん
だってさ！』

マリー『…何の罰ゲームよう、もう…』
エミリア『何？何か言った？』

マリー『何でもないですぅ…』
レンジャー『お、いいのか？じゃぁ、再生始めるぜ？全部一気で良いよな？』

エミリア『おっけーおっけー！』
マリー『あぅぅ…』

◇◆◇◆

『ちゃんと録音できてるかな？…うん、大丈夫そうだね？』

『ええと、こほん。』

『このメッセージカプセルを拾ったあなたにお願いがあります。』

『私たちを、助けてください！』

『…私たちは、奥深くにまで行きます。』

『ですから、このカプセルを目印に追ってきてください。』

『…強制じゃ、ないですけど。』

『それでは、また後で…私に会えたら。』

◇◆◇◆

『ありがとうございます、追ってきてくれたんですね？』

『…え？違う？ただ歩いてたら見つけただけ？』

『そ、そんな事言わないでください…』

『とにかく！』

『私たちは、あなたが。もしくはあなた方が助けに来てくれるのを待ってます。』

『…では。』

◇◆◇◆

『このモニュメント。何なんでしょうね？』

『明らかに今の時代の物ではないですし…』

『まあ、考古学は専門外なのでわかりません。』

『…次は、洞窟に下ります。』

『あなた方と会えると信じて。』

◇◆◇◆

『あ、っつ…』

『溶けちゃいそうじゃ、ありません？』

『私も熱暴走しそうです…』

『モンスターの死骸に沿って進んでください。』

『私たちはその先にいます。』

◇◆◇◆

『また、あのモニュメント…』

『この辺、ちょっとだけ暑さ和らぎましたかね？』

『まあ、地下におりて暑いとは思いもしませんでしたが…』

『ただグツグツ溶岩に慣れてしまっただけかと。』

『はぁ。温度変化が激しいので体調には気をつけてくださいね？』

◇◆◇◆

『おっ、この辺はもう涼しいですね。』

『溶岩のさらに下には清流があるとは…』

『…飲んでみます？』

『ふふっ、冗談です。お腹壊したら元も子もないですし。』

『ところどころ血で汚れちゃってるなぁ…』

『…はぁ、綺麗な景色なのに。』

◇◆◇◆

『これからここを、いかだに乗って進もうと思います。』

『…まぁ、なんとか頑張って追ってきてください。』

『だって他に手段なさそうですし。』

『…待ってます。』

◇◆◇◆

『うっ、はぁぁ…』

『大丈夫でしたか?…って、これを聞けてたら大丈夫ですね。』

『見たところここには文明の手が入ってるみたいですね。』

『んー、研究所みたいだけど…』

『専門外なんでわかんないです。』

『同じ景色同じ質感の部屋ばっかりなんで迷わないように気をつけてください。』

『ではでは。』

◇◆◇◆

『見てください、またあのモニュメント。』

『全文解読できたみたいなので一応伝えておきますね?』

『光ありて　影を成し　対ありて　対無く　不在の在　かかる姿の
転生の　宴　無限なる
律　ここに　印　結びなさん　ムゥト　ディッツ　ポウム…』

『…私たちの見解では、ムゥト、ディッツ、ポウムのそれぞれがこれまでの3つのこの
モニュメントを象徴してるんじゃないかなぁ、って…』

『あ、もう行くみたいなんですいませんこれで。』

◇◆◇◆

『ぜ、ぜぇ…はぁ…』

『け、警備のマシナリーが発生してたらごめんなさい。』

『私たちの仕業です。』

『…ともあれ、ここまで追ってきてくださったなら実力的には楽でした?』

『それともあの量は辛かったですかね…』

『てへ、すいませんでした。』

◇◆◇◆

『…間隔が空いてしまってすみません。でも、事情があって。』

『今私たちは、あなた方のよく知るだろう人と合流することができました。』

『リコさんです。レッドリング・リコ。』

『私たちはこの人に会うためにここまで降りてきたのですが…』

『どうやら、少し片づけてしまわなければならないような事がありまして。』

『危険だ、と感じたらここから上に戻ってください。』

『好き勝手言ってすいません…けど、これから先は安全が保障できなくて。』

『…それでも、私たちの力となってくれるなら。』

『私たちは一番奥、この暗い力の最も濃い場所に行きます。』

『…ありがとうございました。』

◇◆◇◆

ーーーハンターズギルド：ｓｉｄｅエミリア・ミュラー

えっと、何からツッコんで良いやら。
マリーは顔真っ赤にして俯いちゃってるし…

え、でも、この声は。

エミリア「ええっと…マリー？」
マリー「…私がやりましたっ！」

そんな犯行の自供みたいに宣言しなくても！

エミリア「ちょ、そんな思い詰めたような声出さないでよ！」
マリー「だってだって！恥ずかしいじゃん！」

レンジャー「おお、これ残していったのはマリーだったのか」
フォース「え～？あたし初めてマリーの声聞いたときに解ったけどなぁ？」

ハンター「き、気付いてたし！ととと、当然っしょ！」
エミリア「追い打ちはやめたげてぇ！」

…あのハンターのキャストがこの場にいないことがせめてもの幸運だろうか。
そんなこんな話しているうちにマリーは。

その場に亀のようにうずくまってしまっていた。
詳しく言うなら正座で体を伏せて膝を両手で囲って顔をその上に伏せた状態。

マリー「穴があったら入りたい…むしろ穴に埋めて欲しい…」
エミリア「ちょ、落ち込みすぎだって！」

マリー「だって…まさか本当に来てくれるなんて…しかもこんなに親しくなる
　　なんて完全に想定外だもん…」
レンジャー「はっはっは。いやでも、俺らはこのカプセルに結構助けられたけどな？」

フォース「そーそー！だって道迷わないですんだし、結果的に皆助けられて大満足！

これ以上のハッピーエンドはそうそう拝めないよ！」
ハンター「そうだって！それに俺、結構あんたの声好きだぜ！？」

レンジャー「アホかどこ誉めてんだ！」
ハンター「いってぇ！拳骨は痛いぇって拳骨は…ごめん2発目は止めてください！
…痛ぇ！」

マリー「…穴がなかったら掘ればいいじゃない…森に行きたい…もふもふのラッピー
に包まれて癒されたい…」
エミリア「…伏せたまま言ってもねぇ？」

その時、がばぁっ、と効果音がつきそうな勢いでマリーが顔だけを上げた。
…首、痛くないのかな？あれ…

マリー「そうだ森って言ったら！エミリア、亜空間航行船どうしよう！？」
エミリア「…あああ！！すっかり忘れてたぁ！

亜空間航行船。
そういえばあれの故障であたしたちここにいるんだった…！

レンジャー「ん？何だ、その亜空間なんちゃらって？」
エミリア「そういえば話してなかったっけ…そもそもあたしたち、パイオニアの人間
じゃなくって…」

かいつまんで、事実だけを話す。

私たちのいる理由と、来た理由を。

…面白いことに、話終えて難しい顔になっているのはレンジャーさん一人だけだった。

レンジャー「にわかには信じがたいが…嘘をついたってメリットはねぇしなぁ…」

フォース「え、でもマリーとか今の私達の技術じゃ無理じゃん？納得できるよ！」

ハンター「俺はもうマリーの言うことなら何でも信じるぜ！」

エミリア「話したのあたしだっての！」

マリー「でも、嘘じゃないんです…本当で、あ、何なら航行船見に行きます？」

レンジャー「いや、信じよう。今更仲間を疑う俺じゃないさ」

エミリア「それに、ラグオルに降りるっていったらナギサも連れてかなきゃだし…」

ナギサ「呼んだか？」

と、聞き慣れた声が頭上から聞こえる。

…そうそう、こいつも連れていかなきゃ、って…！？

マリー「あ、ナギサ。ちょうど今…ぇぇぇえええ！？ナギサ！？」

エミリア「え、ちょ、ナギサ！？あんたもう出歩いて大丈夫なの！？」

そこには入院着ではなく、いつもの服に身を包んだ隻眼の剣士が立っていた。

ナギサ「ふっ。あまり私をなめないで欲しい。もう万全だ」
マリー「いやそんな髪の毛ファサって決めポーズ取らなくても！」

エミリア「ってか検査の結果は！？どうだったのさ！？」
ナギサ「そんなに大声を出すと目立ってしまうぞ？…結果だがな、不自然なほど
良好だそうだ。心配をかけたな」

フォース「すっごぉい…生きるか死ぬかから一気に全快だって…」
レンジャー「まぁ、ヒトの生命力侮るべからず、ってとこか？」

ハンター「いや、それだけじゃ説明つかねぇくらいの治癒力だろうよ…」
ナギサ「何を言っている。いつものことだ。体調不良は寝れば直る」

…いやいやいや！？ナギサ、あんた本当に…

マリー「何て言うか、タフだねぇ…」
エミリア「マリー、台詞奪わないでよ…」

一気に気の抜けたあたし達を差し置いて、ハンターズの皆がナギサに一斉に
話しかける。

…それを見て、しみじみとマリーと話す。

マリー「それ以外の選択肢ないでしょうってこれ…」
エミリア「だよね…」

台詞はとられても、言いたいことを言ってくれたと思えば。
…それにしても、本当にいつも通りのナギサで驚く。

エミリア「…一体何食べたらそれだけ丈夫になるのかねぇ？」
マリー「きっとプリンだよ。ほら、ユートも大好物じゃん」

なるほど、納得。
…あたしもプリンは好きだよっ！

エミリア「一日一食プリン入れればああなれるかなぁ…」
マリー「…うん、エミリア。目線がいやらしいよ？」

エミリア「べ、別に胸なんか見てないですー！」
マリー「あはは…年相応で、私はいいと思うよ？」

エミリア「慰めるなー！ルミアに比べたら全然あるでしょうがー！」
マリー「責めてないよ！ごめんごめんって！」

ぽかぽかと、大げさに拳を振り回して発散する。
…あるよ、あるある！あたしの周りが異常なの！

…かく言うマリーもそこまでではないんだけど。
あんまりいじるとエイダが怖いから言わないでおく。

…エイダ、かぁ。

エミリア「ね、マリー？」
マリー「はい？」

マリーが顔をかばいながらこちらを伺うように応える。

…そこまで襲わないって！

エミリア「やっぱり、その…エイダに早く会いたい、よね？」
マリー「もちろん！」

答えは即答。
…さて、そろそろ潮時かな。

エミリア「じゃあさ、亜空間航行船を見に行こうよ。もしかしたら時間が
　　経って起動できるかもしれないし」
マリー「本当！？うん、今行こうすぐ行こう！」

エミリア「ナギサー？そろそろ帰れるようになってないか確認しに行こう？」
ナギサ「おお、そうだな。ハンターズの皆、そろそろ時間のようだ」

ハンター「え、ってことはマリー帰っちゃうの！？」
マリー「ふぇっ？あ、ええと、はい…」

レンジャー「ばっかおめぇ、何寂しそうにしてんだアホか！俺らには俺らの、
　　マリーにはマリーの生きる世界があるだろうよ！」
フォース「そーだそーだー！未練がましい男はモテないんだぞー！」

ハンター「ぐふっ…わ、わかったよちゃんと見送るよ…」

そう、マリーは人当たりが良いからモテちゃうんだよなぁ…
仕方ないか。ハンターには泣いてもらおう。

エミリア「てわけでラグオルに降りるんだけど。リコにも挨拶していかなきゃ…」
ナギサ「いや、リコは今総督に呼び出されているはずだから会えまい。皆、リコに宜しく言っておいてもらえないだろうか？」
レンジャー「ああ、言っておく。じゃあ…短い間だったけど楽しかったぜ？」
マリー「こちらこそ、できればまたお会いしたいですが…きっと、もう会うことはないと思います。でもさよならって寂しいですし…また、どこかで」
フォース「エミリア！またね！」
エミリア「ためらいなく再会を誓うねぇ！？…うん、また！」
ハンター「ぐぁあ…間に立ちふさがる壁は厚いぜぇ…」
ナギサ「何を悶えているんだ、傍目に見て変だぞ？」
ハンター「やかまし！」
ナギサ「ふふっ、それだけ元気なら問題はあるまい。またな」
ハンター「ああまたな。今度くるときもマリー連れて来いよ！」
ナギサ「いっそ清々しいほどに自らに忠実だな…」
名残は尽きない。
けれど、夜の森は危険だから。
日の上がっている、今のうちに行かなければ。

あたしたちは、別れを惜しみながらも転送装置へと歩いていった。

マリー「あの、…ありがとうございました！またどこかで！」
エミリア「楽しかったよあんたら！それにあたしたちを助けてくれて
ありがとう！またね！」

ナギサ「私からも一言いいだろうか。…ありがとう。また、いつか
会おう」

座標軸を亜空間航行船の近くに設定する。
…このボタンを押したら、あたしたちは転送される。

ハンター「ま…、また、な！楽しかった！」
レンジャー「おうよ！そっちの世界に居辛くなったらこっちに来い
！大歓迎だ！」

フォース「まったねー！ばいばーい！」

最後は笑って別れられるといいよね。
…何だか柄にもなくセンチメンタルな気分に押し負けないうちに、
あたしは転送を
開始した。

Ｐｉｏｎｅｅｒ２：Ｄａｙ　Ｄｏｗｎ（後書き）

お疲れさまです、６０００文字超（。ε　。；）

総督が報われて良かった良かった（；＞＿＜）

読み切ってくださり、ありがとうございます☆

…さてさてそろそろ机に向かいますか…

ご意見、ご感想などお待ちしております！

ではでは☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2686v/

PSPo2iー英雄、その後

2011年12月13日01時55分発行